て長江を中心として大激戰の行はれて居る最中であつた、その爲もあるでせうが、軍閥の跋扈といふ事は否むべからざる事實であると思ひます。

之に關する例は枚擧に暇ない程あるのですけれど、それが此の報告書の全部ではないからして、特に一例を擧げるに止めますが、私共は、揚子江を汽船に依つて上り又は下る場合に於て、數回に渡つて船體を射擊された事があります。同船の支那人中には流彈が當つて殺されたものさへあつた位で、一寸の油斷もならなかつたのであります。がそれは、私共の乘つた船に限つた事ではないのです。何國の何船と雖も彼等には容赦はないのです。彼等の要求に應じないものは、片端から擊破するといふ——何たる無法な言、無法な行爲でせう。然しながらその深い理由を親しく聽く時には、成程その行爲は憎いけれども首肯しなくてはならないのです。といふのは、或所の支那兵が話したのですが、彼曰く「吾々はどうしても此船に乘らなくてはならないのである。吾々は上官から此處から何處まで行けといふ命令を受けて居る。然しながら目的地まで行くには何十里かある。それも三峽の險の山又山で、到底徒步では行かれない。かといつて行かねば罰せられる。船賃は與へられてない。斯ういふ譯だからして、心なくも、發砲しても、船を止めて乘らなくてはならないのである。」と。實に悲慘な聲と云はなくてはなりません。

然らば軍隊を動かす本部の領袖にも矢張り金はないのかといふに、それが大いに然らずです。その首領たるものは戰爭を起す爲といひ、講和條約をする爲といひ、無用の金品を强制的に徵發し、又銅貨の鑄造をする、その銅貨も自分の思ひ通りの物を造つて之を通用せしめる。金等は馬に喰はせる程あるのです。而して前述の如き發砲事件等が起つた場合、各國からその首領に訴へれば、金がないとか何とか言を弄して相手にしようとはしないのです。だからして軍閥といつても、それから浮ぶ利は凡てその領袖の私服する所のもので、その下に使役される一般兵卒等は、戰爭をして居りながら、此戰爭が何の爲に行はれて居るのか、又終つてもその結果がどうであつたかなんて事は、知らないで濟んで了ふといふ有樣で、只命令通りに西に東に走り步いて居るに過ぎないのであります。それならそんな金など貰へるのか貰へないのか分らない樣なことで、どうして兵士などになつて居るかといふ人もあるでせうが、彼等の望むところのものは本能寺にありです。卽ち彼等の多くは、掠奪と强姦といふ特典のあるのを見込んで、間違へば命も危い兵士を志願するのでありますから、給料など眼中にないのです。

斯うして軍閥が跋扈して居る裏に、良民は段々疲弊して行くばかりで、その甚だしきに至つては此の文明の今日、奧地に至れば大都市に殆ど公然恐ろしい人賣市さへ開かれるといふが如き、想像も出來ない樣な話を聞かされるのであります。それでも軍閥は何處までも私欲を滿さんが爲に、やれ戰爭、やれ兵器新調、やれ何のと、一年中稅金といふより寧ろ徵發を强いて居るのでありますから、良民は自分の事等より

此の一事にのみ苦勞しなくてはならないのです。だから普通言ふ樣に支那人が比較的情け好きな、酒好きな、阿片好きな、淫蕩的な、賭博好きな國民となるのは無理からぬ事と思はれるのであります。何故なれば、彼等は一日中黑くなつて働いて見た所で、その金の蓄積を樂まうなんて事は夢にも考へられないのですもの。斯うした關係から推して行つて、愈々明瞭に「支那に中産階級なく、無産階級が多い」といふ事が首背せられるやうに思はれるのであります。

以上の樣な事情からして私は今後のそれはいざ知らず、尠くとも現在の支那軍閥は支那に於ける大きな寄生蟲の樣に思はれるのであります。だからして過渡期にある現在軍閥の統一か、又はそれが支那から影を沒した時にならなくては、總ての支那人が樂しく日々の生業にいそしんで行くといふ樣な事は難いと思ふのであります。その方法となると、とかく現實をかけはなれた理想論に流れ易いから、こゝには申しますまい。

次に揚子江筋に於て感じた大きなこととしては、外國勢力の浸潤といふことで、それも細かい死んだ數字の羅列は止して、字義通りの感じた儘を書いて見ようと思ひます。

揚子江沿岸一帶に於ける外國勢力といつては、何としても英國です。英國のそれに至つては實に動かすべからざるものがあります。私共は玆に成程大英國なる哉といふ感を與へられたのであります。あの東洋の寶庫印度を得て居りながら、尙支那に迄も食ひ入つて其處に何處までも伸びて行かうといふ意氣を示して堂々とあの長江を壓して居る姿は何といつても偉大なる勢力といはなくてはならない。それに次で戰前までは獨逸が可成りの勢力だつたさうですけれども、戰後全然その勢力を失つて今は米國、佛國、日本といふ樣な國がありますが、到底英國を向ふに廻して活動する丈の勢力はない樣です。然しながら今まで毛嫌ひされてゐた日本人が、此頃になつて漸く、目覺めた實業家や智識階級の人々の間に理解せられて來て、排英熱の高潮に反して親日的傾向の濃厚になつて來たといふ事は事實であります。その卑近な例として本年前半期の如きは、之まで年中行事として年々行はれて來た排日問題が殆どなかつたといふ。斯うした傾向は我國及び支那の爲には勿論、東洋平和、否廣く世界平和といふ意味からしても、實に慶ぶべき現象といはなくてはならないと思ひます。

然しながら悲しい哉、支那在留邦人の現在に於ては到底まだ〳〵あの根氣強い白色人種の全勢力を引き受けて競爭することは不可能の事と思はれるのであります。何故といふに、私共はよく次の樣な事を聽かされて落膽した事があります。といふのは、白色人は一つの商賣をするに當つてそれが何商賣にしても大抵の場合に於て否必ず、外人に多くの客を求めては商賣を始める。さうして幾何かでも本質的に自分の利

益を自國の利に結び付けて居る。一方日本人はどうであるかといふに、支那あたりに居る邦人は、多く內地で喰ひ詰めた者が少い資本で飛び込んで行つては先づ官憲に泣き付き、それから先づ手近な同胞相手の商賣を始める、而して永久にその殼から脫することも出來ずに、づる〲と互に同胞と同胞と共喰ひをして行くのであるといふ。又日本人位官憲に賴る國民もないといふが、それは內地に於ける官憲の設備が比較的行き屆いて居るといふことも一つの原因でせうけれど、在外外交官・官憲を以て專ら在留邦人の保護機關であり、他に何等の存在理由なきが如くに心得、自分達の個人的力に依つて何の事なく片付いて行くやうな問題に至るまで、總てをさういふ機關に依賴して始末して貰はうといふ樣な譯でありますから、在外外交官等は、邦人の詰らない小事件の爲に時間と能力とを無駄に消費して寸暇も餘裕等は求められないのです。他國との圓滑な折衝等計つて居る暇もない位であります。斯んなことも日本の外交が何時も思はしく行かないといふ一部の原因を爲して居はしまいかと、さういふ事に門外漢の私も密に思つて居るのであります。それに付けても私は、將來ある日本青年諸兄に對して、もつと自治に目覺めるやう促したいのであります。

些か脫線致しましたが、尠くとも、今迄に於ける在支邦人の大部が前述のやうな狀態であるといふのですから、その頭數に於てこそ何萬居ると言つて見た所で自立自營何處までも進取的に仕事をやつて行く、あの白人を相手に競爭は覺束ないのであります。

斯んな譯で、是迄の長江筋に於ける日本の勢力といふものは、全然認められて居らないのですから、心ある在支邦人達は、道義的な、そして何處までも紳士的な「末の百より今五十」といふ香具師的商賣人でない、若い奮鬪家のどし〲長江筋に入つて來ることを望んで居るのであります。それは勿論支那人としても、若し日本人が、本當に友誼的に溫い愛情を以て、彼等と心と心を結び手と手を握つて、彼地で仕事をするならば、必ずや彼等も喜んで日本人を迎へる事は明な事だからであります。而して斯くなつて來た日に始めて机上の空論の樣にのみ思はれてゐた日支親善も實現されたといはれるのでせう。

最後に滿洲朝鮮ですが、滿鮮方面は學校　都合やら何やらで、忙しく通つて了つた爲にあまり深い所に立入つて見ることも出來なかつたのですし、又已に種々な書物に依り、或は人の口から內地にも傳へられて居るので、今更事新しく玆に書く事は省きますが、大摑みにその感を書くならば、私は滿洲の地に足を踏みこんで、始めて內地に於て豫想した以上に滿洲に於ける滿鐵の事業の偉大なことに感付いたのであります。實際あの大連埠頭を見、大連郊外に日本人の手に依つて打たれるハンマーの音を聞いた時、伸び行く故國の爲に祝福せずには居られません。此の姿を見た時、私は內心に、精神的にも日本が支那といふ國

に斯く接して行つたならと深く思つたのであります。

それから朝鮮は殆ど汽車で素通りの様な譯で全然書く事もないのですけれど、汽車中に於て非常に私の心を動かした事柄がありますからそれを一寸書いて見たいと思ひます。それは他でもありません。言語といふものが何程人の心情に影響するかといふ事であります。

處は今判然した記憶に殘つて居りませんが、恰度私共(私及び折尾君)二人が、言語が判るでなし一人として話し掛けて來るでなし、奉天を出て此の方長い時間を二人限り話して居つたので話も盡き、鮮人ばかりの汽車中の無聊に苦しんで、京城も後四時間ばかりといふ頃、とある驛から乘り込んだ一人の青年が私共の直ぐ側の席に腰掛けたのであります。そしてその青年も最初の間は遠慮して居つたのか別に話しもせずに一時間ばかりは過ぎ去つて了つたのですが、遂に彼は口を開いて私共に向つて何處から來たかといふ様なことを流暢な內地語で話し掛けて來たので、私共も、今迄車內に車窓に知り度い事が山々ありながら、言語の通ぜぬ爲に隣人に質すことも出來ず、結局見ただけで何だか判らずに了るのかと殘念に思つて居つた矢先でありますから、盲龜に浮木といふ言を如實に、それとばかり、眼に映り、耳に聞える珍奇な事どもに就いて彼に問ひましたところ、その青年は如何にも親切にその質問に對して應答し、尙それに關した由來、地方の習慣、風俗等、當方の質問しなかつた事にまで及んで、詳しく說明して吳れたので、實に思ひ掛けない智識を得たのであります。而して京城へ着いて後も、旅館を探すやら其の他、種々と心配して私共の爲に便宜を與へて吳れたので非常に助かりました。そして、其時までの朝鮮といふものに對する感じを、より親しいものにされました。

何でもない事の様にも思はれますが、斯うした事は物質的な利慾關係に基くものよりも、お互の心を結び付けるものではなからうかと思ふのであります。「外面的に亡びた國がありとしてもその自國語を失はないならばその國はまだ眞に滅亡した國とは言はれない。」と誰かが言つて居りますが、實際そんな事も言へるでせう。私は玆に於て日本が同胞である朝鮮をより深く內地に接近せしめようとするならば、何より先に先づ、普通教育機關の完備が必要のやうに思はれるのであります。

以上で私の報告書としての範圍は大體終つたのでありますが、稿を了へるに及んで、白人自身が已に自己の造れる文明の行詰りを感じ漸く東洋に目を注ぐに急な今日、尙其糟糠を金課玉條の如く心得て、一にも二にも西洋文明々々といつては獨り好がりに樂しんで、歐化讚美に耽つて居る日本否東亞中堅青年が、一日も早くその惑夢から醒めて本當に自己のものとしての東亞といふものをもつと〳〵深く研究して、黃人は白人と提携する前に、先づ黃人としての地步を確保するやう、切に希望するものであります。

雲南に入る

——第四班——

雲南見聞記

早稻田大學　笠原敬四郎

神戸―門司―基隆―廈門―汕頭―廣東―海防―牢該―阿迷―雲南(昆明市)―阿迷―牢該―河內―ダブコ―海防―香港―汕頭―廈門―(臺灣一周)―門司

七月十日東京驛で主事始め多數の會員と友人に見送られ、一路目的地へと進行した我等二人、途中基隆、廣東、佛領印度支那の東京を經、廿二日間汽車と船で暑熱に苦しみつゝ雄大なる山水の風景を讃美し、今正に雲南省城に到着せんとす。

眼前に展開せる一大盆地、樹林で圍繞せられたる村落、彼方此方共の青田の上に立つて、宛然湖水に島の浮べるが如き光景を呈す。その間を汽車は省城目がけて驀進する。目前に省城を控へた我等の心中、躍起すとでも言はうか、形容し難い心理狀態となる。炎熱に惱まされた十數日の海上生活と三日間の車中の苦痛と疲勞も何時か！らすつかり忘却してゐるのである。眼前に見える青田は耕地整理をしたと言はれざるも誠に平々坦々として畔等も非常に通り好く、從て東京平野では見受けられぬ程の良田で、農民の順良さと比較的農業の進歩せる事が領かれる。眞黒な大きた水牛に腰掛けたる農夫等夕陽を浴びて畔道を家路へと急ぐ。

軈て汽車は赤い泥水の大堰の傍を疾走し構內へと入る。車內の者皆下車の用意をしてゐる。即ち省城驛へ到着したのだ。當驛は牢該・阿迷よりも大都市、且つ此の滇越鐵道の終點なので、より多數の佛支安南人の出迎ありて列車の右側は人山の如しだ。海防の保田洋行本店よりの通知で雲南同支店主溝延氏が出迎へて下さる筈だと車窓より顏を出せば、四等車側の人混中より、親切さうな四十五六歲の同胞が我等の名を呼び乍ら殿りの三等車へとやつて來る。

汽車は狹軌にして等級は一等より四等迄。一列車に六七臺の客車が連結され、其の中一、二、三等が各一客車で他は全部四等である。而して參等以上は乘客としての待遇を受け、四等は貨物同樣に取扱はれる。併し生活程度の低級な、反意に於ては質素な安南人支那人には最も相應しく、却つて便利ならん。何故なら彼等は運搬せんと欲する荷物・動物(主に豚鷄類)を自分と共に車中に擔ぎ込むのである。我等の見たる所

では、此等の荷物を我國の夫の如く、手荷物として合札（チッキ）するは到底不可能事と察せられる。其の代り車中は兩側に幅一尺二、三寸厚さ一寸位の腰掛板あるのみ、其の不潔極まる事丁度豚小屋の如しと言ひたい程である。此の滇越鐵道は佛人經營にして一九一〇年四月に完成したものである。非常な難工事にして工事中數千人の生命を賭したと稱するが、現在でも線路到る所見張番の居る事でも、其れを想像するに難くない。

所で我等は溝延氏の案内で喧騷たる此の場面を餘所にし一、二、三等の出口より驛外へと出たが、出口には檢札員が居らず、入場券と云ふ樣な厄介なものも無く、自由に出入して好い。是れは他國領の爲制度の及ばない事、叉驛員の怠惰を意味するとも見られるが、個人の人格を尊重された樣な氣がして誠に心持好く感ずる。

日沒の驛前は叉驚く程閑靜で、直前の池には無數の家鴨の雛が、倘飽き足らならしく遊游してゐる。茲より道路は左傾斜して眞直ぐだが、二丁程先方に我國のお役所によくある樣な、舊式の鐵製の門が見え、其の兩側には四、五名の警察官が得意さうに立つて居る。此れは昨夜宿泊した阿迷驛前と同樣、旅客を檢査するんだなあと直ぐ了察される。當市に十五年間も滯在してる溝延氏が、自分の來客なるを告げたら無檢閲で通され、出門すると左右に街路があつて、恰度丁字形を爲して居り、澤山の苦力であの銀座の夜店の樣に步行不自由な混雜だ。早速人力を呼べば五、六臺我勝ちにと競爭的に出たが、優先權を認容して、順序に登乘し領事館へと急ぐ。約廿分にして萬鐘街の左側に、金文字で大日本領事館と行書で書いてある大きな額を揭揚した、門構への莊嚴な邸宅の領事館へと着く。館員等夕餉前の事とて玉突きに熱中して居つたが、種々挨拶の後、書記生武藤貞喜氏(外語出身)の獨身社宅へと御世話になることになつた。

此處は城內の西南鐘鼓樓に東隣せる場所で、城外のステーションより此處迄南門を通過し、當省城の一部分を車上より眺めたのみだが、纏足の多い事、海岸の仙頭・廈門・廣東の比に非ざれど落付いた繁華な市街である。人口十五萬とか稱するが、入省以來二日間の車中生活より蒙自（モンツウ）・阿迷を除く外、峨々たる山岳の重疊として、殆んど盆地と稱すべき平原なかりしより推して、よくも斯る大都市あるものと驚嘆せざるを得ない。流石は四億の生民を有する支那である。

元來當省は支那東部の最南端に位して北緯二十一度より廿九度、東經九十七度半より百六度に亘り、我國の本州・四國・九州・北海道を合したものより稍々小なりと稱する程の廣大な地域で、北は四川、東は貴州・廣西の兩省、西は英領緬甸（ビルマ）、南は佛領印度支那に隣接し、西藏より來れる崑崙山脈の二大支脈その西部を南走して、本省の大部分は海拔四千呎以上の高原地帶である。昆明（コンメイ）市(省城の別名)は六千四百呎、蒙自は五千三百呎、騰越は五千四百呎に及び、最高一萬呎に達する高原ありと云ふ。即ち高峯峻嶺聳立連

亙すと稱する地勢で、その間處々に大小の沼湖が散在して、河あれば必然的に平野存すと云ふ譬の如く、矢張り大小の平原を存して居るのである。蒙自の縷海(ルーハイ)の六十支里、省城の滇池に依る百支里の平原等が、其の顯著な例である。

從つて氣候は上述の緯度からすれば亞熱帶地に屬するが、土地の高低に依つて一様で無く、南部の牢該以南は到る處椰子、バナ、、甘蔗、檳榔樹等の熱帶植物が繁茂してゐるから、全く熱帶地同様と云ひ得るが、大部分は前述の如く海拔四、五千呎以上なれば概して氣候調和せられ、一年が乾濕二期に分られて、五月より十月迄の半年間は降雨頻繁なるが故に、夏期に於ける暑熱の高騰を防ぎ、冬期間は之に反して連日快晴なるが爲、年中殆ど同一氣溫を保持して居り、殊に昭通縣等は世界第一の良氣候地と稱せられて居る。昆明市附近も同様で、春夏の候陰雨甚しく、約三週間の滯在中晴天僅かに四五日のみで毎日溫度七十度內外だから、同胞人皆セルの單衣物で丁度避暑に赴いた様である。又冬期は乾燥晴朗で、日中の直射熱度春夏に比較して却つて强烈を感ずる時さへあると云ふ事で、氣候の點では誠に惠まれた地域である。そして邦人の在住には最も適して居る(事實在留邦人僅かに三十余名に過ぎないが)。

又、直ぐ目に留まるのは、天產の副食物と果物類の豐富な事である。即ち牛、豚、鷄、家鴨、火腿等の肉類と白菜、葱、大根、茄子、芋、南瓜、菠菜、新菊、モヤシ、豆類、韮等の野菜物及び卵で、又特色としては他省と同様、味付けに油濃いのは當然だが、辛味を非常に喜ぶのである。野菜の漬物の中には余り辛くて舌の感覺を失ふ様な物さへあると云ふ。右の加く肉類、野菜物は極めて豐富だが、山國と交通不便の爲海產物が僅少で干物或ひは罐詰と、附近に產する鯉、鮒其の他の河魚等で僅かに食膳を賑はすのみである。又、果物の產は多額で、就中省城附近では梨、橘子、蜜柑、桃、柘榴等產出して四時の嗜食に不足を感じないが、其の味一般に我國の其等の様に美味でないのは、栽培法の未熟の結果と思はれる。唯、柘榴のみは特筆大書すべきもので、其の巨大さ、美味、觀賞用としての色合ひ、その他凡ての點に於て我國の物等到底その足下にも及ばざる事遠しと賞讃しても過言ではあるまい。他の果物についても、目下日本農科大學出身者がぼつ〳〵見える由だから、漸次改良せられて良品を產出する事だらうと思ふ。

扨て昆明市見學は四、五日で盡きるが、概略を述べると、當市も他市に倣ひ支那特有の城廓を繞らし、其れが稍五角形を爲して東西南北に物見台の様な宏壯な樓門を構へ、就中南門を一名正義門と稱し最も大、且つ立派で、石垣の冂形の門上には、がつしりした二階建ての樓閣が、巍然として聳え、當市を睥睨して居り、屋內は小博物館とも稱すべく、種々の記念品・參考品等を陳列して、火、木、土の三日間公開してゐる。城內は中央部に東唐繼堯氏戰捷記念品、阿片の害毒の模型、小中學生の製作品等は最も我等の眼を引く。城內は中央部に東西に走れる丘陵地があつて、その中心に當省官廳が設置せられ五華山と稱し、其の西北に海子邊(ハイツペン)と稱する

低地、又其の北部に一段高く東陸大學が規模小なれど威風堂々と聳えて居る。又海子邊の左側(西)に陸軍學堂あり。尙東北部の一隅は空地で將來の發展に資せらるべき場所。街路は南門より五華山に至る最も繁華な通りを中心として四通發達して居る。

外人は領事館員の外一切城内に居住を許可しない爲、自然城外(主に城南)にも立派な街衢が出來上つてゐる。然し街幅槪して狹く、硬度の高さうな白色の天然石(或者は切石)を以て敷かれて居るが、メーン・ストリートの外、凹凸甚しく、我國の樣に下駄だつたら吞氣に步行されまいと思ふ。此路上を、車輪もない、直徑三尺位の丸太を厚さ二寸位に鋸いて車とした牛馬車の通るその恰好は、何とも表言し難い有樣である。併し我國の如き物を使へば、この險惡な郊外の道路では、一朝にして毀損せられ、經濟上到底成立たないだらうから、却つて之れが適切なのかも知れない。

其の他籠を手にして纏足した支那美人が、蹣跚と、指一本でも觸れるものなら直ぐ轉げ返りさうな風采で、お臀を左右に振り乍ら到る處步行してる場面、奇觀と稱へようか、風習とは云へ斯くして迄も美人になりたい彼女等の心理狀態は不可解で、全く可哀相である。孝經の「身體髮膚云々」の孝道も之れには適用されなかつたと見える。尤も近時此の惡風を禁止したが。

次に家屋は一般に木材と壁を使用して、屋根は主に瓦葺である。大部分は商店で二階造り最も多く、店は土間若しくは板張りで正面に商品を陳列して、店先には、高さ三四尺、幅二尺位の櫃臺なるものを設けて、店員は商品を其の上に運んで客に應酬するのである。そして食事の際は其の臺を利用して會食する習慣だが、大槪は男子のみである。一體當市は洋式煉瓦造の堂々たる建物は殆ど無く、外觀、內容共に極めて粗末にして簡單である。之れは一面建築の甚だ不振なるを表はし、柱等も襤褸隱しに漆が塗つてある。

軍事は勿論警察制度も、往年日本人顧問を招聘して範を我國に求めたと云ふ關係上、市內の各所に駐在所の設けあるは他省に見ざる所で、成績も割合良好だといふ。鐵道沿線上にも之れを設置して警備の任に當らしめて居る。此の警察官吏と軍人が平民間に於ては最も權威を振ふものだが、軍事教育は永年日本武官を聘して鋭意其の改善發達を計つた結果、他省よりは餘程優越し、海子邊の軍事學堂(士官學校)の學生教練等は、嚴重且つ規律ある事その他に於て、中々見るべき點がある。但し兵卒は募集兵であるから、身長や年齡の統計を計つたなら、屹度三角定規の樣になる事と思ふ。

軍馬は朝鮮馬の樣な小馬で、乘馬せる將校の足や劍は殆ど地に付かんばかり、丁度小兒用の玩具の木馬に乘つた樣な奇觀を呈するのである。然し我等も數度乘馬した經驗より論ずれば、存外力强く又非常に御し安く素人向きで、如何なる險阪の山路でも自由に驅け廻るのが得意であるから、當地方の如き高原地帶には最も適したる運搬者と謂はねばなるまい。運搬には牛も補充するが大部分は馬である。

市民の衣服は頗る粗野で中流以下は土布及綿布を用ひて居るが、綿布は主に外國や他省より仰いで居る。上流は緞子・繻子・洋服地を使用して居るが、洋服着用の者は外人を除く外中々見られない。稀に見る洋服着用者も極めて質素な物を着用してゐる。之れは支那服が四千年間次第に變化し最も便利な所に落付いた結果で、其處に支那獨得の味が首肯される。同樣に精神的にも之れに類似した强固なる美點が存し、到底外來思想によつて感化せらるべきものではなからうと觀測される。彼の廣東の赤化運動等も一時的の物で、單に名目を共れに借りて自分の野心を完うせんとして居るのではなからうか、と私は推測する。尤も此の一事だけでこれを推測するのは獨斷かも知れないが、四千年の過去の歷史が物語つて居るのだから仕方がない。又形式と內容は何れの國家でも異にしてるのであるが、兎に角畏怖せざるを得ないと思ふ。

公園としては城內海子邊に翠湖公園あり。之は窪地で園內の大部分は宏濶なる湧水池、其の間に十文字の道路を布き樹木鬱蒼として海心亭と云ふ亭の設等もあり風致極めて良く、其の北(中央の十字路の一角)に寺院があるが、上野不忍池の觀音堂に類似したお寺で、參詣人が常に絕えない。その寺側の池には蓮が群生して麗しく、數多い鯉魚と相俟つて參詣人や遊客を樂しまして居る。此の他西門外約二里を距てゝ滇池に臨む大觀樓公園あり。西門より同公園に至る間は、滇池に注ぐ川に沿うて道路廣く且つ平坦なれば、例の小馬の背を借りて第一土曜の午後、武藤氏に案內せられ、同道のA君と共に散策に赴いたが、道路の兩側には、一種の藥を製するとかいふ我國の枝垂柳の如き樹木を配して頗る散步に適して居る。且つ公園には高樓あつて、前には洋々たる滇池を隔てゝ遙か西山（シーサン）の勝地を眺め、湖上にはジャンク、サンパンの往來絕え間なく、風帆點綴して全く郊外の一勝地である。以上の外、南門外に金碧公園其他二三あるが、皆平凡だから省略する。

唐繼堯氏の建設にかゝる東陸病院の日本人軍醫顧問の談に依れば、疾病はあらゆる種類を網羅して居るが、主なるものはチブス・感冒・肺炎・呼吸器病・赤痢・トラホーム。時としてはコレラジ・フテリヤ・ペストの如き傳染病が、猛烈なる流行を來す事もある。之等傳染病の發生流行する原因に就いては、衞生思想の極めて幼稚なるが主因で、醫師を蛇蝎の如く嫌惡し恐怖して、只迷信を信じ、病魔に襲はれても自然の成行に任せる頑迷者が多い有樣であるから、一度之等病菌の發生を見んか、忽ちにして各地に傳播するのみならず、何等防疫機關の設備がない故、施すべき術もない。尤も近年は醫術の效果顯著なるを知つて、診察を受ける者が多くなつたと云ふ。此外町を通つて直ぐ氣付いたのは、咽喉に袋の如き大腫物を出した男女であるが、之れは當地方の一種獨得の風土病で、癭袋病と稱する奇病で、咽喉の下部膨脹し、瘤の如きものとなつて漸次垂下し、遂には袋狀をなして下腮と胸部とを連接するに至るものである。之れは靑年時代に發現して年と共に膨大するが、精神上並に肉體上何等の苦痛を感じないので、多くは其の儘放

置して顧みないばかりでなく、却つて男は長命の相とし婦人は福相として喜び、大切に保存する習慣がある。原因は多分水質に依るものらしく、目下何等豫防法はないが、一般に下流社會に多いのである。尙又、夏期には瘴癘病と云ふ堪へ難い病氣があり、之れが爲め、甚しきは土人全部他に移轉する地さへあると云ふ。概して支那は衞生の點には無頓着であるが、當地方は其れが最も甚しく、素人の我等でも例示し得る點が澤山あるが、茲では除外して置く。けだし優秀なる醫術を以て支那に雄飛せんかなである。

八月十二日、中野領事と武藤書記生の斡旋で、午後二時より省城五華山に於ける省長公署の樞要處內應接室で、省長唐繼堯氏に謁見する。唐氏は五十五六歳の年齢で、頭は五分刈、身には支那服を纏ひ、身長五尺六寸餘、體重は二十二、三貫もあらうと云ふ偉大なる體格の保持者で、女の如く肌目の細かい白皙の好丈夫である。民國成立以來初代督軍蔡鍔氏に繼いで立ち、同四年時の政府袁世凱の帝政に對し反對の第一聲を放ちて、雲南獨立の聲は一時人の耳目を聳動させ、邊境の一省をして全支那に重からしめたが、同九年失脚して廣東に亡命、顧品珍氏が代つて立つた。が、同十一年三月再現して、それ以來中央政府との關係を離脫し、獨立してゐるのである。彼は非常な親日派で、毎夏此の地を通過する上海同文書院學生には必ず謁見を許し、書院生も亦其れを土産話の一に數へると云ふ。氏は我國の陸士及帝大の出身で日本に滯在すること、實に十數年、歸國後二十有年を經たるも、尙日本語は極めて流暢で、大要次の如く語る。

「態々此の偏境の土地に御出で下さつた事を厚く御禮申上げると同時に、あなた方日本の若い學生が、亞細亞學生會なるものを組織して、精神的に純眞な亞細亞各地の學生と團結を計るのは、何より喜ばしく、私も斯くあらねばならぬと期待し、又大いに贊成します。只近頃、御國は精神的にも歐米化せられつゝあると聞くのは、歎しい事と思ひます。今度の歐洲大戰を見ても了解されるが、我々が歐米人より學ぶ事は、物質文明丈です。東洋の孔、孟、釋迦等の精神的教理は世界に冠絶たるもので、之が世界に普及されて居つたならば、歐洲大戰の如き慘狀を見なかつたでせう。東洋人は元來先天的に、此の良い精神的文明を保持して居るから、益々之を發揚して世界に貢献せねばなりません。それで先年私が設立した東陸大學は、趣旨として、精神的には益々東洋文明を鼓吹し、物質文明は西洋に仰いで居ります。私は御國の明治維新の大久保・西郷等の偉人を最も崇敬して居りますが、現在では斯る人物が見えない様ではありませんか。哲學等も立派に印度に開發せられて居りますが、自國の長短の區別も辨へないで矢鱈に他國の文化を輸入するのはどうかと思はれます」と。此の說には以前より我等も同意見だつたから、大いに贊意を表すると、「歸國後は何卒斯る御心組で吹聽なされて、何處迄も黃色人種の爲め盡力して下さい。尙終りに當省は御承知の通り高原地ですが、熱帶、溫帶、寒帶夫々の產物があります。中にも鑛物に至つては、箇舊の錫始

め多量に產出するが、只惜しい事には大資本を投ずる事が出來ないから、御國の財界の方々とでも、共同して事業を經營したいと思ひますから、何卒宜敷しく告げて貰ひたい」と、支那人特有な熱狂的態度で述べられたのには、我等は一種侵すべからざる尊嚴と崇敬の念を感じたのである。

彼は北方、滿洲の雄張作霖氏と對立し得る人物であるが、先年廣東征伐の失策以來、內治的諸機關の建設に專心從事した結果、現在は甚だ財政困難を來して居るから、斯る實業的方面の事迄も吐露した事と思ふ。

尙此の外、武藤氏の紹介で富滇銀行の重役、李乾元氏、蕭壽民氏、同省學務課長兼東陸大學校長、同諸教授及び同學生等と（教授李耀爲氏の通譯で）意見の交換をした。學生は休業中の爲、僅か十五名に會見したのみだけれども、大體に於て平等主義を稱へ、帝國主義に反對して民主的聯邦政治を强調し、排外的精神濃厚である。兎に角、政治的智識の發達してゐる事は、他省同樣新聞紙上に見るが如しである。

我等は當地の如き山間僻陬の地に來て、最も意外に又心强く感じたのは、唐氏始め流暢なる日本語を操る者極めて多い事で、軍界、官界の重要なる地位を占むる者は、殆んど我國に留學した者である。從つて日本語の優勢は、他の外國語の比でなく、此の意味に於て日本は、精神的に又學術的に、他國の追從を許さぬ獨得の勢力を有するものと云へるが、實際的勢力の伸張に於ては何等認め得る所がない。今後は、我が外務省も米國の如く、領事を介してもう少し彼地の諸政府に交涉して、歸國した留學生全部が安全なる地位を得る樣努力して欲しいと思ふ。

外國の實際的勢力としては、佛國が一九一〇年四月老開より雲南に達する滇越鐵道布設以來、其の勢力愈々深く浸潤し牢固として拔き難く、又英國は緬甸鐵道を同地方迄延長して其の勢力を扶植せんとしつゝある。我國は地勢の關係上、今日では、傍觀するの外致し方ないが、唐氏自身の從來の行動より見て、富力を得れば再び廣東に進出して、南淸一帶の勢力を一手に收める事であらう。斯くなれば彼自身も我國も萬事好都合で、極めて優勢なる地位を占むるものと想像され、又私は今よりそれを期待して已まないのである。

又、若し、現在經濟的地位を同省に扶植せんとするならば、委細は拔きにして、私一個の私見として、次の如きものがある。

一、輕便鐵道若しくは手推車の敷設事業
二、水力電氣業
三、紡　績　業
四、セメント製造業

五、硝子製造業
六、罐詰製造業

硝子製造業に就いては、同胞中村望氏目下其の計畫成り準備に着手しつゝある。上記の中、當地方の工業品は多く外國に仰ぎ、佛領印度支那を通過して入省するのであるから、運賃と通過税とに價格の大部分を占められるのであるが、工業品の原料は割合多量に産出するから、之等に關した事業が最も適當かと信ずる。只當地は交通不便だから、生命財産の安定と云ふ點より見て、現在の如き邦人に對する好感が永く存續するか否かが問題となり、投資如何は、之に就ての見込次第だと思はれる。

如上の外、溝延總平氏の催しの西山滇池旅行、宮定氏案内の金殿乘馬旅行、滇越鐵道沿線上に於て三日間に亘つて接したあの素敵な美觀、其他の見學記事も執筆したいが、紙數に限りあれば其れは將來の派遣者に讓り、第一回の雲南事情として、誠に肩の凝る拙文の報告であるが、概括丈を述べて擱筆する。

終りに三ケ月間の海外旅行中、到る處筆舌で盡し難い御厚情を下さつた方々に對して、衷心より感謝の意を捧げると共に、將來の御健康と御幸福を切に御祈りする。

雲南省貿易概況

拓殖大學　新井英一郎

神戸—基隆—厦門—汕頭—廣東—海防—ジヤラム—蒙自—雲南省城—老開—河内—ダ
ツブコウ—海防—香港—汕頭—厦門—臺灣全嶋—福州—上海—杭州—南京—青嶋—天
津—北京—大連—旅順—奉天—撫順—安東—平壤—京城—釜山—下關

緒論

抑々雲南省は、東に廣西、貴州の兩省、西南に英領緬甸を控へ、南は佛領印度支那、北は四川省及川邊特別區域に接して居り、海洋に離るゝ事遠く、而も支那特有の河川もこゝに於ては全く船舶を通ずるもの無き爲、貿易も總て陸上貿易である。それに省内到る所山嶽連衡し、平原少く、かてゝ加へて水陸の交通

は東京より省城に及ぶ滇越鐵道を除くの外は全く無く、漸く人背・駄馬に依る狀態であるから、從て商工業の見る可きものも無く、又古來豐富を以て知られた鑛產物でさへ、箇舊の錫鑛以外には採掘されて居ない。而も省內は蠻族の居住する未開の地大部分を占むるを以て、民度極めて低く、加之民國以來しば〳〵政變を來したるを以て土匪の橫行甚しく、國民積極的の活動を爲さゞらしめた等種々の原因から、貿易は格別の發達を見ないのである。が滇越鐵道開通以來、各種貨物の集散も極めて便利となつたので、遂次其の貿易額も增加しつゝあるのである。現在日本品の如きも各種多數に輸入され、味の素だけでも月に數萬の賣行がある程である。

貿易路は其の主要なるもの六つあつて、

(一)は、蒙自稅關の管轄に屬するもの、卽ち滇越鐵道・紅河の水運に依つて佛領印度支那東京を經由する香港・諸外國との貿易路。

(二)は、思茅稅關に屬するもの。卽ち英領緬甸及佛領東京方面との通商路。

(三)は、騰越稅關に依るもの、卽ち緬甸との通商路。

(四)は、本省北部より四川省叙州、瀘州を經て重慶に至るもの。

(五)は、東南部地方より剝隘を經て廣西省の百色、南寧に出づる商路。

(六)は、東部省境曲靖より貴州に出るもの。

等である。そして年貿易總額は勿論確な數字ではないが大約二千四百五十萬兩乃至三千七百二十萬兩。其の大部分は佛領東京を經由して行はるゝ蒙自貿易に依るものである。騰越貿易、卽ちビルマ方面よりするものが之に次ぐのであるが、之は總貿易額の二割內外に過ぎない。他の四つに至りては全部合せても總貿易額の一割に當らない狀況である。

此の大部分を占むる蒙自貿易は佛領東京を通過しなければならぬ故に、佛國政府の貿易並に課稅・運賃政策等に依りて自由に左右されて之が爲に貿易の發展を阻碍さるゝ事が甚だ多い。依て省長唐繼堯を始め省民一般は、省城より廣西に出で、廣東の一港に出る鐵道の敷設を熱望して居る。幸ひ之が敷設され、更に、省城重慶間の鐵道が敷設されたならば、雲南貿易の大發展は火を見る如く明かであつて、本邦貿易に及ぼす影響も甚大なるものがあらうと思ふ。唐繼堯の如きは此の鐵道敷設の爲めに、日本の投資を待つと云つて居るが、之は佛國との條約上難事であり、支那にだけ期待するならば、現在の狀態に於ては到底近い將來に其の實現を望む譯にはいかないであらう。

以上大體の概念を述べたが、更に之を、輸入貿易輸出・貿易に分け、各品目を擧げて、其の品目每に簡單な說明を加へて見よう。

(一) 輸入貿易及輸入品

輸入貿易の主なるものは、綿絲、各種綿布及び綿製品、石油、卷煙草、燐寸、靴下、縫針、釦、磁器、化學藥品、其の他日用品雜貨類であつて、就中綿絲は全輸入額の六七割を占め、實に輸入品の大宗である。而して輸入も年々增加の傾向を有し、本年(大正十五年)上半期にありては輸入超過を示して居るのである。

一、綿　絲

綿絲は本省輸入品の大宗であつて、蒙自、騰越、二海關に取扱はるゝものだけでも、一年約十九萬擔强、其の價格は一千萬兩以上に及び、實に本省輸入貿易の七割内外を占めて居る。而して其の大部分は印度綿で、次で日本品、佛領印度支那品の順序である。(印度綿はビルマを通じて騰越海關に依つて、本省に入るものと、海上より佛領東京を經て滇越鐵道に依つて、蒙自海關に入るものと二徑路を有す。) 綿絲の需要は、雲南省自身紡績業皆無なる爲、文化の發達日に盛なるに及んで益々大となる許りである。而も綿花の產出には好適な地であり、紡績に必要な勞働力も容易に得られ、電動力に至つては、至る所に水力發電所を起し得らるゝから、斯業の經營は甚だ有望であると思ふ。

日本綿絲は民國三年(大正三年)頃より輸入さるゝ様になつたもので、其の種類は、十六番手・二十番手・四十二番手のもの。殊に細物は極めて好評で、殆ど本邦品の獨占の觀がある。就中二十番手の黃佛が最も信用ある様子である。而して之等細物は各種綿布の織用に供されるのであるが、其の販路は省城及び其の附近、及照通、嵩明、四川の會理、貴州の貴陽市等である。民國七年歐洲戰爭發生の結果は印度綿絲の價格騰貴し、且佛領印度支那綿絲の輸入減少するや、日本物は從來の細物の外十番手の太物も輸入さるゝ様になり、省城竝に大理市場に於ては好評を博し、爾來日本物全盛を見た。民國の八年、九年の日貨排斥の影響を受けて、一時印度品に壓倒されて大打擊を蒙つた事もあつたが、現今では依然として日本品が全盛を極めて居る。

印度綿絲は十番手内外の太物が好評を極め、佛領印度支那綿絲は、日本綿絲、印度綿絲に比しては、土地の近い爲に種々の便宜を有するから、價格は低廉であるが、其の品質は十番手の粗品であるから、競爭綿絲としては恐るゝに足らぬと思ふ。

綿絲の取引は廣東人の綿絲商人に依て大部分行はれて居るが、大規模の專業者は無い。多くは雜貨商及び其他の輸出入業を兼ねて、小資本の下にやつて居る。

輸入時機は從來、冬期農閑時の十月から翌年四月迄の輸入が最も旺盛であつたが、最近織布工業が漸次發達を來して、都市に於ても需要さるゝ様になつた。尤も

輸入業者が一時に多量購入に困難な資金關係の原因して居る事も云ふ迄もない。其の取引は大部分現品取引で先物約定の如きは絶對に無いと云つてもよい。以前は、即ち販路擴張時代には、一ケ月の延貸しも行つたが、現今は殆ど現金扱ひである。

二、綿　布

綿布の需要は年と共に增大しつゝあるが、未だ民度低き爲一般省民の需要は極めて少ない。又、外國綿布の需要は一部都會地方に限られ、爾余と云つても大部分の省民は、上述の綿絲を用ひて織るところの土布を着用して居るのである。綿布の輸入は何と云つても英國品が最も多く、日本品之に次ぎ、外に佛領印度東京物及支那內地製綿布等が輸入されて居る。近來は英國品に比べて日本品需要が益々盛になりつゝあるが、其の質は、紺・アサギ等の盲縞、及び、赤・桃色等の衣服用に供せらるゝのが大部分である。

今之等綿布の種類及其の市況を述ぶれば、

(イ)「ドリル」　衣服用に供され、日本品が最も多く、色合は灰白、淺黃、黑、茶褐等が最も好まれて居る。

(ロ)「綿フランネル」　之も衣服用に供せられ色合は赤が最も多く、綠等も好まれて居る。

(ハ)「シーチング」　綿布中最も賣行の多いもので、英國品が最も多く需要され、次が日本品であるが、之は日本品が高價の爲であらう。雲南省では之を各種の色合に染めて、衣服若しくは下等の手巾用に用ひて居る。

(ニ)綾木綿　非常に省民に好まれ、從つて賣行も大である。用途は帽子の裏・衣服の裏及製靴用に用ひ、日本品が全部を占めて居る。

(ホ)寒冷紗　英國品最も多く、日本品は第二位　衣服の裏に用ひられ、色合は、鶯茶・樺色等が最も好まれる。

(ヘ)小倉木綿　日本品と、「ヴェニーレアン」物等が需要されて賣行極良好、用途は婦人の服地に用ひられ、茶・紫・淺黃・茶褐・藍等の綾縞物等が最も好まれる。

(ト)愛國布　名の如く支那製品にして、北京・上海物であるが、品質省民に適せず賣行きは極惡い。余りに品質不良の爲である。

(チ)「ビロード」　之は支那製品が最も多く、その需要は年々增加して居る。支那靴及衣服用に供せられる。

(リ)綿毛布　元來獨乙品の一人舞臺であつたが、歐洲戰爭後は日本品が之に代つて需要せられ、英國品も少々輸入されては居るが、何と云つても現在は日本の一人舞臺。色合は丁度日本の明治時代に流

行した様に、赤いのが好まれ、大部分は桃色に黒の線を取つたものが需要されて居る。

（ヌ）　敷布　之は全然日本品の一人舞臺であつて、その賣行は頗る大なるものがある。

等、以上が主なるものである。此の外、「タオル」「靴下」「夏シャツ（冬の下着にも用ひらる）」等があるが、日本品は全然ない（靴下は多少の日本品があるが）。總て、上海・廣東等の支那內地製品、若しくは香港品が需要されて居るのである。靴下は近頃省內でも出來る様になつたが、品質は非常に惡くて問題とならない。綿布の輸入も、別に專業者がなく、綿糸同様廣東商人に依て取扱はれて居る。

三、石油

雲南省に於ては石油の埋藏量も大なるものありと云ふが、未だ之を採掘するに至らない爲に、年々百萬ガロン內外を輸入して居る。輸入先は米國・スマトラ・ボルネオ等であるが、米國石油その大部分を占め、スマトラの石油之に次ぎ、ボルネオの石油に至つてはホンの一部分に過ぎない。電力の利用の殆どない雲南省に於ては、益々石油の需要量を增すばかりであるから、輸入量益々增加するのみである。

四、染料

雲南省は輸入外國綿糸に依り行はるゝ、土布の染織業は極めて盛んであつて、省內の年製布高、約六百三十萬匹に及び、之に使用する染料の需要は又甚だ多く、その大部分は、外國に之を仰いで居る。元來省內にて出來たるものが用ひられて居つたのであるが、日本でも見る様に、藥品染料に、すつかり驅逐されてしまつたのである。省內に於ける有名なる染料の產地は、玉溪縣であつて、土製藍靛の年額は約數十萬斤に達し、本省染料の供給地であると共に染織工業の中心地であつたが、西洋染料の輸入以來、今日は全く見る影もない迄に萎微して居る。西洋染料中では、獨乙品が戰前は斷然一頭地を拔いて居つたが、戰爭の爲、全く其の跡を絕ち、英國品の一人舞臺となつてゐた。所が戰後獨乙品の再び輸入せらるゝに及んで英獨品の競爭となり、民國十二年頃は尙英國品優勢であつたが、現在に於ては獨乙品再び優勢になつて居る。日本品としては皮革着色用として、小量のものが輸入されて居るに過ぎず、到底問題にはならない。

五、紙類

雲南省民は一般に古來の習慣に基き、日用の書寫用紙は、省內及び貴州・四川產の土紙を使用して居る。一般洋紙の輸入は最近の事であつて、其の數量も亦格別多くはない。而も輸入紙の約七割は、支那內地製品で、殊に廣東品が大部分を占めて居る。

洋紙中需要の最も多いのは連史紙及び有光紙の二種であつて、連史紙は新聞・雜誌・廣告等に用ひられ、輸入量も漸增して居る。有光紙は、その需要が近年急速に增加し、廣告用紙等に用ひられて居る。而して前者は廣東品を主とし、後者は日本品が主である。

他に、連史紙を赤又は黃色に染めたる對聯紙及び年紙が有るが、之は從來の支那紙の販路を一蹴してしまひ、封筒にも名刺用にも、盛に需要されて居る。そして住宅には構造の關係上壁紙用として輸入さるゝもの甚だ多く、いづれにしても、支那古來の文字尊重癖より來る所の、紙の使用を恐れるの習慣が次第に減少して、非常な勢を以てその需要を增しつゝあるのは注目すべきである。

六、麥　酒

雲南に於ては、ビール釀造の原料を得るに難くはないが、氣候に嚴暑と云ふものがなく、又その期間も短いので、ビールの需要も甚だ多くない。

故に釀造業の發達は全く之を見ず、總て輸入に仰いで居るのであるが、前述の理由からして輸入量も僅少である。之を輸入先國別にすると、日本品・佛領印度支那品・カナダ品となり、日本ビール、その半を占め、佛領印度河內の「オメール」ビール・カナダビールの兩者が約平等に他の半分を占めて居る。尤も「オメールビール」は、價格低廉であるがその質良からざる爲賣行はよくない。そして價格は高價でも甘口であるカナダビールの方が現今支那人間に喜ばれ、賣行も漸增の傾向があるのである。

日本ビールは、アサヒビール・サクラビール・台灣ビール・カブトビール等が輸入されて居り、以前は日本品獨占の形をなして居つたのであるが、例の日貨排斥運動以來、前記外國ビールの輸入を見る樣になつた事と、之が取扱者たる日本商人が、他の商品に比べて利益少ないのと、銀相場の變動より起る不利よりして、一切其の取引を現金にした事、等の理由から、次第に減少を見るに至つたのである。然し氣候は溫和であるからと云つても、海外留學歸朝者次第に多くなり、且文化益々高上の機に有るから、ビールの需要も益々大なる可き事は明かである。從つて之が輸入量は日を追つて大となるに至るであらう。

七、烟　草

近年烟草は省內に盛に栽培され、自足自給の政策を取り、七八年前より省城に亞細亞烟草會社（支那人經營）を設け專ら之に生產させて居るが、尙まだ多量の輸入を見るのである。（尤も同會社は自國製品を緬甸方面に輸出したり、外國品を再輸出したりはして居るが、ほんの少量である）輸入先は亞細亞烟草會社の製品に混入すべき上等原料品としては、エヂプト方面から。既製品とし　は、英米烟公司及び南洋烟公司の製品が輸入されて居る。此の內英米の烟草が品質良好且つ價格も低廉なる爲、第一の賣行を示し、南洋烟草は亞細亞烟草よりまだはるかに賣行が少ない。輸入品は、紙卷煙草と葉卷とであるが、葉卷は民度の低い爲に、輸入量も至つて少ない。そして葉卷は英國物と佛國物とで全部を占めて居る。卷烟草も省城及滇越鐵道沿線には佛國烟草の輸入を見るが、其の量は少ない。佛蘭西人及安南人の需要を充す位の程度である。日本品は今より二十數年前に眞先に輸入され英米烟草及南洋烟草が輸入さるゝまでは、獨占の好景

氣を呈して居たが、品質不良、味惡く、價のみ高いので、兩者と全く競爭する事が出來ず、全く市場より驅逐されてしまつたのである。

八、海　産　物

本省は大陸の山地であるから、全く海を見ないが爲、海産物の利用すら、余りなかつたのであるが、最近急激に之が需要を增し、益々輸入の大なるを見るに至つた。輸入海産物の種類は主として、海參・海鼠・鯣・燕窩・燕巣・魚翅・鱶鰭・乾鰕・寒天・魚肚・鮑の罐詰等であつて、日本品と廣東品とがその大部分を占めて居る。燕窩はビルマより輸入さるゝ物が最も良品で、從て價格も高いが、多量に輸入されて居る。日本品としては、海參・魚翅・鱶の鰭・乾鰕・鮑魚・寒天・鯣等で此の外は總て廣東より輸入されて居る。

九、洋　燈

洋燈の需要は民度高上と共に非常な勢を以て增加し、其の附屬品と共に年々多量の輸入を見て居る。即ち民國八年頃には僅か二萬九千餘兩、約三萬兩の輸入であつたのが、民國十二年頃から十數萬兩を每年輸入して居る。尙地方民度の發達と共に益々その需要の增加を見る事であらうと思ふ。雲南省城及び蒙自・阿迷州の三都會には電燈がひかれたのであるが、それでも輸入の約三割は三市に用ひられ、他の七割が全省に需要される譯である。之等洋燈の輸入先は日本及び廣東・香港等である。從來洋燈も日本品獨占であ

つたが、民國九年頃より、廣東品等の這入るに及んで、漸次日本品減少を來したのである。尤も品質は廣東品は大いに日本品に劣り、需要者も之が購入を好まないのであるが、利にさとい商人等は、日本品より廣東品を扱ふ方が利益が多いので、需要の如何にかゝはらず、出來るだけ、廣東品を取扱ふ樣にして居る結果、日本品の減少を見るに至つたのである。

此の外米國より馬燈と稱する圓形の手提ランプが輸入されて居る。即ち紐育製 Dietz の記號を有する米國專賣特許品で、强風にも雨にも消えない特長を有するもので、而も數年間使用しても何等の故障をも見ないと云ふ程、頑固に出來て居るので、需要が頗る多い。之は、軍人及軍屬が、夜間の通行に、提灯の代用として用ひたのに始まり、今では一般に利用さるゝ樣になつたのである。

一〇、硝子・鏡

雲南省に於ける硝子製品は、現今需要益々多くなる傾向があるが、已に幾度も述べたる如く民度低き爲其の利用廣からず、漸く上流家庭に、日用品としてのコップ其の他の硝子製品が用ひらるに過ぎない。窓硝子等に至つては、上流の一部だけが住宅へ應用して居る程度である。それだけに將來に於て大いに有望なる一事業とされて居る。現在に於ては、省城に廣東人が小規模の硝子製造を爲して居るが、それは全く問題とはならない。全部日本品の獨占である。

鏡は近來非常な需要を增し、其の輸入額は十數萬元に及んで居る。一體、本省人は鏡を裝飾に用ゆる傾向を有して、上流家庭では大形鏡を多く用ひる。省長唐繼堯氏の公署や私宅へ行つて見ても、衝立ての如きものは鏡を使用して居る。而して殆ど全部の鏡は日本品であるが、大形鏡に至つては、フランス品が多くを占めて居る。最も需要も多く、從つて輸入量も多いのは、長方形の五六寸形であつて、全需要の大半を占めて居る。

一一、セメント

本省に於ては、建築物にセメントを利用する迄に進んで居らない爲、輸入量は甚だ少ない。年輸入額は、二萬三千擔、乃至は、三萬擔位のものであるが、然し之も將來益々其の需要を增加するを以て、輸入量も漸增すべきは言を待たない。然してその使用方面は、主として箇舊錫務公司の水管据付工事・箇舊鐵道工事・省城に於ける水道會社の工事等に使用される。輸入先は佛領印度支那であつて、現在海防の「ポートランドセメント」會社の製品が大部分輸入されて居るのである。

一二、磁器

本省に於ても磁器の製造行はれ、其の原量土たる良好の土質が有るが、其の製作品は、品質外見共に惡い。從つて價格は低廉であるにも拘らず、需要比較的少く、今猶、江西省附近及び佛領印度支那・日本等より、多量の輸入を見るのである。即ち、省製產品は、外見品質等よりも、價格低廉を第一條件とする地方土民に歡迎さるゝのみで、省城其の他の都會の商民は勿論、地方の富裕なる者は、總て輸入品を用ひて居る。が、其の輸入量は比較的少く、二十萬兩內外に過ぎない。

此の內大部分は江西省產である。之は品質も、廣東品や、東京品・日本品に比べて、餘程劣るのであるが、價格低廉と、實用向の點からして其の需要が多いのである。日本品に至つては全く問題にならない、むしろ、贅澤品の部類に屬する。

輸入される磁器は主として、茶碗・飯碗・小皿・花瓶・茶壺(急須)等で、飯碗は藍色又は赤色の草花、又は龍模樣等のあるはでなものが好まれて居る。茶碗は外部が赤色又は褐色で內部に白釉を用ひたるもの、及び白地に藍模樣を表したものが愛用せられ、又金泥を用ひたもの等が多く、茶壺は眞鍮手吊の附いた圓筒型で、之に金泥又は五彩模樣を配したものが多い。花瓶は五彩又は三彩のものが多く好まれて居るが、日本品としては、日本美人(古風美人)の立像を畫いたものが專ら喜ばれて居る。

一二、化粧品

しば〱述べた如く雲南省は民度尙發達せない爲め、文明的物資は未だ多くの輸入を見ないのであるから、文化品たる化粧品も、當然其の輸入量は多くない。而も品種も僅に、香水・石鹼・白粉類の三種を主

とする程度である。

香水は、佛國・日本等より輸入されるものと、香港製の輸入されるものとある。支那人一般に廣く用ひられて居るのは、此の香港品(支那人商人製)であつて、其の需要の大部分を占め、佛國品・日本品は、支那人にありては一部上流に、他は在留外人に使用されるのみで、其の量も僅少である。

石鹼は、化粧用として需要され、佛國品が大部分である。蓋し、佛領東京通過の際、他國品は高率な課税を受けるにもかゝはらず、佛國品は免稅される關係上、價格も低廉にして、而も香氣良好なる點等より、他國品の追隨を許さないのである。日本品では、三輪・花王等が輸入されるが、殆ど問題とはならない。

白粉も香水の如く、佛國品・日本品等が輸入されて居るが、同じく支那上流の一部、及在留外人用に供せらるゝのみで輸入量も至つて少ない。多くは、支那內地製—卽ち、廣東品・上海品・北京品等が愛用されて居る。而も現今は、本省製の所謂土製品が頗る需要を增加しつゝあるから、相當注目しなければならぬと思ふ。

要するに、高價な上等品は、本省には向かず、安價な普通品が歡迎されるのである。

一四、縫　針

縫針りの需要は現在に於ては、さして大なるものはないが、將來益々其の輸入量增加の傾向を有するものである。現在は約千萬本內外の輸入を見て居るが、

十一年	二一、三二九、〇〇〇本
十二年	五〇、四二一、〇〇〇本
十三年	七五、八四五、〇〇〇本
十四年	一〇、九六三、〇〇〇本

の增加率を以て見れば、將來民度の發達と共に大なる需要のあるべきは云ふまでもない。

之等縫針は、大部分、都市及び滇越鐵道沿線で消費されて居るが、地方消費は年々增加するのみである。然して地方需要品は、3/0・2/0一號乃至四號、及び地方製產の太物のみで、未だ、細物を使用する域には達して居ない。現在輸入されて居る針は、從前は獨逸品の獨占であつたが、歐洲戰爭以後は、殆ど支那內地產のものであつて、外國品は、極少量の輸入しか見ない狀態である。

以上の如く種々輸入品があり乍ら、最も好適の位置にある日本よりの輸入品が誠に少ない。之には色々の理由もあらう——卽ち、佛領印度支那通過の際の高率の課稅等も影響しようが、大部分の理由は、何れも際物的で、一時迯荷をするが後を續けないと云ふ點にある。卽ち折角販路を得ても、品物がなかつたりして信用されないのである。殊に甚しきは、堂々と見本を送つて來て居りながら、漸く販路を見つけて、

之を製造元に注文すると、僅か數ケ月の間に、已に其の品物の製造を中止してしまつて、送荷出來ないなどと云ふのがある。總て一時的品物許で、永續しないのが日本商人の悪癖である。從て品質の粗悪なる事も免かれない事であつて、總て眼先だけのゴマカシ的根性の結果である。一時天下を風靡した例のブルドツク形の米國靴が、已に流行を終つた今日でも、注文すれば何足であらうと米國から送荷して來るのに比べたなら、思半に過ぎるものがあらう。

(二) 輸出品

文化未開の雲南省にありては、科學の發達遲く、化學工業の如きも殆ど皆無と云つてもよい。從つて輸出品の如きは殆ど天然物即ち粗製品若しくは原料品であつて、加工品・精製品の如きは、輸入のみに之を見られる狀況である。この故に輸出品種も、輸出量も、餘り多くはない。漸く、鑛物・畜産を原料とせる諸副産物、農業的産物、等を出すに過ぎないのである。左に其の主なるものを列記しよう。

一、錫

雲南に於ける第一の輸出物は、何と云つても錫である。一體雲南は鑛物の埋藏量甚だ多く、全省鑛山なりとも云ひ得る程である。即ち石炭鑛のみにて卅九。約七十五の銀鑛。八十の銅鑛。二十六の金鑛。二十八のアンチモニー。二十三の鐵鑛。十二の錫鑛・其の他鉛・水銀・硼砂・明礬・沙金・石英等、數へ來れば無數と云はれる迄豐富なる鑛物を有する故、交通の便さへ開ければ、之等の輸出は容易な事である。現在は未だ其の域に達して居ないが、只獨り錫のみが輸出されて、而も世界的地歩を占めて居るのである。輸入貿易の決濟は此の錫によりてなされて居るのを見れば、錫が雲南輸出品の如何なる地位にあるかはすぐ解る事であらう。

現在輸出されて居る錫は、箇舊錫と稱して、蒙自の西南方、約六十五支里の箇舊錫山に産せられ、年産額は、五千噸乃至九千餘噸に達し、世界産額の百分の七强を占めて居り、世界の産錫地として知られた新嘉坡・和蘭・英領カナダ・濠洲等に次ぎ、世界の第五位を占めて居るのである。

箇舊錫の市場は香港で、同地より、英・米各國、及び上海等に仕向けられて居るが、一年の輸出額は、蒙自海關の統計に依て見るに、八百五十萬兩乃至一千萬兩以上に上り、實に蒙自海關取扱總輸出額の約九割を占めて居る。從て本省貿易の最重要品たると共に、雲南省に於ける唯一の大富源と云はなければならない。

然るに其の輸出額は年に依て非常な増減がある。甚しき時には約半減となつた事がある。之は其の製産額が減少したのではなく、其の市場たる香港に於ける錫相場の低落・不況等に原因して、其の價格及び輸

出量に激減を來すのである。卽ち香港に於ける錫市場の如何は、箇舊に於ける錫の生產並に輸出を左右して居るのである。

然らば何故にかゝる不便不利なる狀況を以て甘んじて居るかと云ふに、交通不便の結果なる事は云ふ迄もない。故に往昔より本省貿易は香港を市場として其の大部分が行はれて來たのであるが、其の間交通機關としては、國外たる佛領東京を通過しなければならない、不便極まる佛人經營の滇越鐵道が只一つあるばかりである。其上金融機關は、支那銀行としては爲替力極めて薄弱な雲南政府の富滇銀行が唯一つあるばかりで、多くは外國銀行に賴らなければならない。從つて極めて不利な取扱ひを受けなければならないのは當然である。

故に本省の貿易は、香港市場に於て輸出品を賣り捌いてから輸入品の仕入れをするか、逆に輸入品を本省迄販出して、其の賣上を以て、本省の物產を仕入れて輸出するかの二方法を選ぶと云ふ樣な、殆ど(間接ではあるが)物々交換の形式に於て行はれて居るのである。

それ故に、輸出貿易の大部分を占める錫の香港市況如何は、雲南一般貿易に大なる影響を及ぼすものである。

二、獸皮

雲南省の地勢風土は極めて牧畜に適して居る。其の牧畜は年々發達し行くと共に、省內到る處に、牛・馬・豚・山羊等が盛に飼養されて居るのである。從つて獸皮の產額も多く、山羊皮だけでも百萬張內外を年々輸出して居る。之に依て其の飼養數を見れば之に數倍して四五萬頭ある事が想像される。故に之に牛・馬・豚等を加へれば、其の額は驚く程多く、從つて獸皮の多額に產出さるべきは言を待たない。而して之等家畜類の大部分は省內に於て農耕に使役し或は食用に供し、副產物として皮革・豚毛の輸出となり、其の數量及價格は、實に雲南貿易に於て、錫に次いで重要なる地位を占めて居る。

而して本省に於て製產されたる皮革は、省內の需要を充すものと、照通から四川省に、及び騰越から緬甸方面に仕向けられるものとを除いた外は、大部分貴州省の西部卽ち雲南省接近地方に產したる皮革と共に、蒙自海關を經て香港及び上海等に輸出されるのである。

牛皮及び山羊皮は地方の屠殺剝皮者が自ら之を乾して、或相當の量がまとまると、之を省城や、其の他市場へ送つて販賣するのである。省城に於ては、之等地方より搬出された皮革の取扱者が、東門外の目犬皮街と南門外の順成街とを合せて約百戸程ある。

而して之等省城及地方中心市場の取扱業者は自ら之を製革するのであるが、此の製品を地方の需要に應じて出すものと、輸出業者にのみ販賣する問屋と、此の二者を兼てやるものとがあり、其の取引は總て現

金である。

牛皮中には水牛皮があるが、之は其の量は餘り多くなく、且其の用途も、鞣革として馬の口紐や積荷綑等に用ひ、省內で僅かに需要されて居るに過ぎない。

右の外雜鞣しとして、虎・豹・水獺・狐・野猫・火狐・飛鼠・麂皮等があるが、之等だけで、年產三四萬張に達する。

虎及豹は、主に西南部雲南、卽ち、ビルマ及び東京國境方面に產せられるのであつて、其の毛は短く、廣西省產のものより品質が惡い。

水獺は、西南部雲南・北西部雲南、卽ち、四川省及び川邊、各省境方面から產する。品質は、北西部方面で產する方が善い。

火狐は省內奧地山地から、至る所產せらるゝが、其の量は多くない。其の皮革は赤茶色で足部が黑く、普通狐と殆ど同形の野獸である。而も之は雲南省の特產であつて、其の毛は深く柔いところから、歐米婦人の肩掛として、非常の需要を有つて居る。

飛鼠も亦雲南の特產で蝙蝠の一種である。其皮は質弱く背の部分だけしか使用出來ない。霜降及褐色。光澤があつて上品である所から、同じく西洋婦人に好まれるのである。麂皮は、南西部方面から、相當の

量を產出され、鹿皮の代用品及熟皮として、需要が甚だ多い。

野猫皮の產出は一般省內山地方面に於て獲られ、其の需要も頗る多く、火狐皮等と共に香港方面に仕向けられて居る。

水獺・牛羊皮・麂皮・虎及豹皮等は、大部分上海方面を市場として輸出せられるのである。

三、豚　毛

豚毛は、「ハム」の主要產地たる宣威・鶴慶を中心として、省內各地方に多量に其の產出を見るのである。其の大部分は黑色のもので、二吋乃至五六吋の長さを有する。最も多いのは二吋前後のものである。之等豚毛は四川の會理地方・貴州省南北方面のものと共に、竹籠・麻袋・蓆包み等に包裝されて省城に集り、問屋の手に依つて雲南省品として、香港、英・佛本國及び佛領東京地方へ、「ブラッシ」用として輸出されて居る。省城に於ける問屋は、前記諸地方より集つて來た豚毛を買入れ、之を先づ金屬櫛で梳いて塵垢を去り、後水中に入れて十五六日間浸け置き、曹達水で洗滌した上之を木に卷き付け、[illegible]に入れて蒸して其の癖を直し、然る後之を日光に晒して乾燥する等の手を加へた上、更に尙之を十數種位に分類し、八寸經を束として一束宛を紙で包裝し、每百斤づつを一箱として輸出するのである。

四、火　腿（ハム）

雲南省の火腿は其の味頗る佳良なので名高い。浙江省の金華(ハム)と古來より併稱されて其の名極めて高いが、品質・味に於て數等勝れて居る。故に其の製法さへ改良すれば多量に海外へ輸出する事が出來るのである。産地は宣威を主とし、鶴慶が之に次ぎ、其の近接地方よりの産出も甚だ多い。年産額は省内に費消さるゝばかりでも頗る多量であるが、之に海外輸出量、約二千擔(五萬兩内外)を加へると、其の量甚だ大なるものがある。(輸出は生産額の25700)

其の製産方法は、先づ豚の一定の年齡に達するのをまつて、之を屠殺して腰部だけを取り、鹽(しほ)と木屑を適當に混合したものの中へ入れて交ぜ、之を大きい小屋の土間に深く堀つた土穴の中に一年乃至四年の間貯造するのである。かうして土穴に永年貯造された年限の多いもの程、其の味はよく、一年内外のものは新腿と云つて、其の味は前者よりも劣り、從つて値段も安い。即ち永く貯造された物程高價なのである。

ハムは穴より堀り出した丸のまゝを其儘販賣したり之を鑵詰にしたりして販賣する。元來雲南ハムは其の美味な所から、外人間に頗る評判がいゝ。それで、今迄大部分省内で消費されて居つたものが、現今は海外並に支那各地にどん／＼輸出される樣になつたのである。從て鑵詰ハムも頗る有望となり、宣統二年には、資本金五萬元の宣和火腿鑵詰公司を宣威に設け、支店を省城に設け等して、斯業の發展を企畫したが、民國七年に、表面火腿鑵詰と見せかけ、其の實は阿片を充塡した物を廣東方面に輸出しようとしたのが、税關に知られたため、其の輸出を禁止されてしまつた。翌八年に禁令は解除されたが、爾來輸出鑵詰に對しては、種々な方法の下に嚴格な檢査が行はれて居るので、殆ど輸出されない。從つて現在輸出されるのは、丸のまゝのもので、鑵詰は省内と四川省の需要に供せられるに過ぎない。

五、茶

茶は雲南省著名の産物であつて、主として省の西部地方に産出されるが、思茅・普洱の八大茶山は最も有名で、古來から知られた所である。景谷・緬寧・宜良・陸良・路南・羅平・祿勸・騰越の諸地方も之に次いで有名な産地で、全省の茶樹數は約五億萬株と云はれ、年額、二萬五千擔内外を産出し、海外輸出も年々一萬五六千擔を降らない。

元來山地の雲南は斯業に好適地であるが、種植、製法共、舊法を守つて少しも改良を加へない結果、一時、販路頗る減少するに至つたが、實業當局の熱心な指導に依つて、再び有望視されて來たのである。

一體西南部雲南は、氣候・風土共に自然に茶の生育に適し、之等地方の人民は古くから製茶に從事して來たが、其の栽培法は極めて幼稚で、而も少しも手入れもせず、又肥料にも留意しないで、天然の儘に放つて置いた結果、少しも發達を見なかつたのである。

本省は四季を通じて製茶する事が出來るが、初春に、新芽を摘んで製したものを春茶と云つて、他の夏

秋冬の三季に作つたものより品質良好である。

製茶は大部分所謂磚茶であつて、外國へ輸出の爲に別に紅茶を製するのである。普洱地方には比較的資本を持て、茶園を營むもの、製茶所を營むもの、及び兩者を兼營して居るものが多い。普通茶園と製茶業者の間は仲買人に依つて取引され、仲買人は三分の口錢を取る習慣があるのである。

取引時機は、舊暦、三四月頃で春茶の收獲期には、之等諸地方の茶商は手を盡して買ひ集め、之を省城に送つて(一部は思茅に集散するものもあるが)省城より海外及び各地に輸出されるのである。

六、生　糸

雲南省より輸出さるゝ生糸は年百餘萬兩の多きに達し雲南貿易輸出品としては、錫に次いでの重要品である。輸出先はビルマ方面殆ど全額を占め、香港方面は僅か一部に過ぎない、質は黄糸である。此の生糸は總て騰越税關を經るのであるが、同關第一の輸出品である。本省の生糸主産地は、騰越を中心とした西南部雲南であるが、其額は年產約二十萬斤しかなく、漸く省內の需要を充すに過ぎず、其の大部分は、四川省西南部の會理地方に產せられたものが、騰越を中繼貿易場として集散して居るのである。

七、「キユナオ」(薯良)

キユナオは雲南省特產の一であつて、主として紅河の沿岸附近の山中に生える野生植物の根である。一見蒟蒻玉の樣で其の質は頗る堅く、之を割れば褐色の液體を多量に藏して居るのである。大きさは色々有るが普洱市場に出すものは二、三斤位の所が多い。皆土人の採取したものであるが、土人は毎年七月頃迄山中に入つて土の中より堀り出して之を市場に賣り出すのである。

このキユナオは我が國の柿澁と同樣な用途卽ち着色用・雨水防ぎ・一種の防腐染料として用ひられて居るのである。其の特色の一として色が容易に落ちないので、佛領東京・廣東方面の熱帶地の衣服の染料として好適である。其上他に之が代用品としては殆ど皆無の狀態であるから、需要頗る多く、販路は極めて確實である。輸出先は南支各地・佛領印度支那各地であつて、之等地方の土人が、夏季、黑褐色の衣服を着て居るのは、總て此の染料でそれぞれ絹なり木綿布なりを染めたものである。

キユナオは熱帶に用ひらるゝ所からして其の集散地は佛領の河內であつて、雲南年產額、現在約十五萬數千擔あり、益々增額の傾向を有して居る。

八、麝　香

印度の特產と迄云はれる麝香は本省にも亦產せらるゝのである。而も雲南產は西藏產と共に其の品質の優良なるを以て有名である。其の產地は、主に大理・麗江・中甸地方、及び川邊との境界地方とである。此の地方の住民は、多く西藏族若しくは苗族であつて、彼等は山中に入り込み麝香鹿を捕獲して、其の生

きた鹿より瘤を取つて、市場か或は內外人の手に賣渡すのである。卽ち麝香は此の麝香鹿に生成せる瘤狀の塊から取るので、此の塊を割れば粉狀を爲せる香氣馥郁たる麝香が取れるのである。死んだ麝香鹿から取つた瘤中に有るものは香氣がない爲に、特に生きた鹿から取る要があるのだと云ふ。

而して此の麝香の買出しをするものは、雲南人の外に、廣東人が前記地方へ雜貨を販賣して其の歸りに買入れて行くものもあり、又英米佛人等の買出しに來るものも少くないのである。

包裝は一定しないが、外國へ輸出するには、香氣の散出と品質の變化を防ぐ爲に、鉛製の小箱に瘤一個宛を密閉封入するのである。麝香一斤の價は年々高價となりつゝあるが、本年は約五百二、三十元である。其の年產額は年と共に減少の傾向はあるが價格に於ては變化は殆どない。昨年度に於ける全產額は（四川省方面へ移出されるものもあるから、實際はもう少し餘計に產出されるが）約五萬五千兩。數量は二千六百擔である。

九、藥　材

雲南省は古來から藥材の產地として有名で、四川省・貴州省と併稱されて居るが、現在に於ては兩者に勝る產額を有し、而も年々增加を見るのである。此の藥材の輸出は前記二省を經て省外各地及海外に出されるものが殆ど大部分を占め、蒙自騰越等の海關を經ての輸出は殆ど其の一少部分に過ぎない。而も兩關だけで年々八萬兩乃至九萬兩內外を輸出して居るのを見れば、全省年產額は少く共、八十萬兩乃至は九十萬兩內外と見て差支へない。

之等產出藥材の名稱は多種多樣を極むるが、省內各地に豐富に產せられて最も多く輸出されて居るのは茯苓であつて、年產額、一萬數千兩に達する。

現今雲南市場に現るゝ藥材の主なるもの及び其の產地を擧ぐれば左の如きものがある。

（名　稱）	（主　要　產　地）
茯苓	楚雄、摩芻、蒙自地方に多し
猪苓	楚雄、摩芻、蒙自地方に多し
大黃	各地方に產す
砂仁	緬寧地方
穿山甲	各地にて捕獲
熊膽	思茅・東南部・緬甸國境
鹿茸	同
三七	開化地方

黄連	元江・麗江地方
子母黄連	元江地方
大杷黄連	同
貝母	麗江地方
蟲草	中甸地方
細黄草	元江地方
大黄草	各地方
馬檳榔	同
豹骨	思茅地方

四川方面に輸出する商人、及び貴州方面に輸出する商人は四川人であつて、主に兩省に接近せる地方の藥材を蒐集し、又江西商人は湖南・湖北方面へ移出し、廣東商人は、專ら、廣東・香港方面に輸出して居るが、之等三省の商人は、藥材商として一種特殊の技能と勢力を持つて居る。

以上は、雲南輸出貿易の大約であるが、更に機を得て詳細に論じたいと思ふ。

大陸の南

—第五班—

佛印より暹羅へ

慶應義塾大學　高橋次郎

神戸——上海——香洪(九龍)——廣東——(海防)——河内——ダプカウ——(海防)——康海——海防(ドゥソン)——(廣東)——西貢——盤谷——アイチャ——(盤谷)——(香港)——(上海)——長崎

旅は憂いものつらいものとは小さい時から好く聞かされて居る。今迄旅と云へば九州への田舍旅とお上り氣分の東京への巣立ち位であつた。此度佛印・暹羅への苦しい旅を續けて漸く歸つて來ると妙にそれが愉快な氣持に變つて行つて苦しかつた事は苦心談となり失敗談は笑ひ種となり、知らず知らず美化されて行つて了ふ。

顧れば私の旅は隨分繁雜なコースを採つて來た。生ひ立の島國を鹿島立つてから一月は兎も角も、其後は路銀の都合や日數の點をごつちやにして眼が廻る忙しさであつた。旅行を了へて此の方大分日を經て居り、僅に日記やばらばらな手記を參考に、忘れかけ

た記憶を辿つて書いた。この拙稿が些かなりとも報告の役目を果せば幸これに過ぎたものはない。

一路海防（ハイフォン）へ

八月七日朝。珠江のほとり突然響く銃聲に驚いて河岸に鈴なりになつて居た無數な舢舨（サンパン）の一度に散らばつた其中を同じく船頭の操る櫓も急ぎ調子な一艘の舢舨。吾々二名を乘せて折から降り初めた雨を衝いて港内のメナド丸に漕ぎ着けた。十時船は錨を上げて雨に煙つた廣東を後に佛印の港海防に向ふ。翌朝支那最南端の海南島の海峽にさしかゝつたが濃霧立ち罩めて針路定まらず船は附近を彷徨して霧の霽るゝを待つた。明くる九日は前夜來の雨も霽れ海面は油を流した樣だ。無事海峽を通過したが海防着はこれが爲一日遲延した。此海峽は航海者には苦手ださうで濃霧の中を無理に進めば坐礁沈沒の憂目を見るべく、それかと云つて飛んでもない處に停船でもしようものなら海賊の襲來があると云ふ至極厄介な處である。事實海峽通過の際數々の難破船のマストを海面上に見た。海南島は臺灣位の廣さがある。カナリヤ島が多く値も安い。

八月十日未明より降りだした雨の中を船は午前五時半といふにソンコイ河口なるドウソンに達し、パイロツトを採つて或は狹く或は廣くひらけた河を逆航すること五時間にして海防港内に投錨した。前途の希望に馳られながら上陸し簡單なる佛蘭西税關吏の檢査を受けて日本人經營のホテルに投宿した。かくして吾々は佛印の旅への第一歩を海防に印したのである。

東京（トンキン）一帶

海防に着いた當時は折惡しくも東京一帶の豪雨で、爲に近頃稀に見る大洪水となり、交通機關の汽車に不通箇處がある始末だつた。斯樣な不便もあつて海防を根據として河內行・ホンゲー行を爲し、果ては西貢に陸行する豫定をも變へて海路を採つたことなど、從來の先輩諸兄のコースと少し趣を異にした點がある。滯在中雨に祟られて大分活動を拘束され、それにつけて何とかかとか故障も連發して約廿日間東京一帶にぶらぶらして居たお蔭で相當東京通になつた氣持がする。兎に角今年は近來にない大雨ださうである。

恨めしい思をしながら二日といふものはホテルの一室に立ち籠つて居たが幸に雨も霽れたので早速河內行を志し、八月十二日早朝、五等迄あるといふ粗末な汽車の三等車に席を取つて海防を立つた。汽車は所謂東京米の產地なる坦々たる東京平野を走つて行く。靑々とした水田の中、處々の野原に土饅頭然たる墓のあるのを見たが、これは皆安南土人の墓で、この墓は皆卜に依て其位置を定めるのだといふ。甚しいのは水田の眞中にもある。水田より小高い處に小さな祠堂の樣な物があつたが之は田植當初の式場となつて其時日本でいへば村長格に當る安南の大官が臨場するといふ。大平原の彼方遙に見ゆる連山は全部石灰岩

ではげ山である。セメントの材料となるもので海防郊外には規模は小さいが此原料を使つたセメント工場があつた。後日ホンゲーに行つた時にも驚いたのであるが、山といふ山は全部石灰岩で無盡藏といへる美しい程で日本に運べばと直に考へるが實際になると運賃やその他の失費でいくら原料が安くても算盤に引き合はぬさうである。此の附近ばかりでなく佛印では農家の住宅は其周圍を竹で取卷いて居る。此竹林を處々に見ながら約四十分餘りして海陽の近くに來て汽車は止つた。此の附近から靑田一變して見渡す限り大洪水である。

此處から愈々艀舨連絡に移つたが數十の艀舨列をなしての光景は先年の關東地方震災當時の鐵道の徒歩連絡を想起させた。暑さに閉口しながら、ぎらぎらする水面に目も眩ゆく五時間搖られ通して約六キロ米、又汽車に乘替へた。洪水の最も甚しい箇所だけに家屋は僅にその屋根を水面上に現して居る。鐵道沿線に群り右往左往する悲慘な避難民に同情の眼を遣るうちに、何時しか汽車は佛國人が自ら東洋一と稱する大紅河に架せられた長鐵橋を渡つて午后二時に河內に着いた。

河內(ハノイ)

河內は佛領印度支那總督府の所在地で首都であり人口は拾五萬を算して居る。嘗ては安南人の舊都があつた處で、今は僅に其面影を郊外僻陬の地に存して居る。先づ力車を驅つて日本領事館に領事菅氏を訪問し吾々の來意を告げた。其夜は領事夫妻の招待に依り、ホテルメトロポールに於て爽なオルケストルの音を聽きながら席を圍んで會談し、佛印に於ける最初の佛蘭西料理で腹をつくつて後一同自働車をドライブして郊外なる大湖(グランラック)を一週、蒸暑い河內の夜の風を切つて納涼氣分を味つた。

その翌夜は河內在留の日本人土曜會の方々が吾々二名の歡迎會を催されて佛蘭西製のシャンペンに氣勢を擧げながら夜更くる迄面白く雜談に耽つた。吾々は一週間も滯在して居たのでゆつくり見物することが出來た。先づ市內を一巡して安南土人街や支那人街又は佛人街など見たが、商賣は支那人街が一番繁盛であつた。市の中央に小湖(プチラック)がある。湖畔の工合・大きさ等不忍の池に彷彿たるものがあり、湖中の祠は不忍の池の辨天樣に好く對比して居た。

又此の湖畔にグラン・マガジンといふ佛蘭西百貨店があつて佛蘭西本國の製品を網羅して居る。本店は本國の巴里に在るのださうだ。偉大なるホテルメトロポールもその近くに在つて此附近には市廳其他の主だつた建物が聳えて居る。市立の大劇場・音樂堂等、藝術には凝つた佛蘭西人の豐富な趣味もこんな處でざつとわかる。堂々たる總督府官廳はジャルダンボタニックの附近にあつて、ブロンゾの大階段は一寸日本で見られぬ代物、愚鈍な安南人への嚇しには爲らう。廣々としたジャルダンボタニックの邊は、往昔安南王の王城たりし內羅城のあつた一部であるらしい。今は遺跡殆ど存せず、史書を繙いて探索しなければ

その位置は判然しない。併し此公園を出て程近き大湖の畔に立つとき內羅城趾の外壁の一部を僅に認め得たのである。葦蓬々たる此の大湖を挾んで對戰せる安南人の悲慘な敗北を目のあたり見る樣で感慨深いものがあつた。

此の湖畔に一寺院があつて名を鎭武觀と云つて居る。早速參詣して大吉のお神籤を貰つてほく〱ものであつた。此湖に沿つて大分行くと軒の低い穢い家が處々に點々して居る。その昔の敗殘兵の末裔の住居とわかつた。この邊り途々廢寺を見たが、甚しきは廢寺は變じて田舍活動寫眞館に代用され、フランス、パテーのフィルムが提供されて居た。滑稽と云ふよりも皮肉な世の變遷である。

更に行くと佛人が「ヴィラヂ・ド・パピェ」と呼んで居る文字通の紙の村がある。此處だけは佛蘭西文明を脫した完全な安南人の村である。何處からとなしに杵搗く音が洩れて來る。紙の原料を打つて居るのである。その音を便りに臼のあり場を搜して行つた。優しい情趣だ。土人が夕陽に照され乍ら力を腕二本に入れてポンポンと杵を臼にたゝきつける樣子が何の飾氣もなく古典的で私の眼に異樣に映つた。紙透場は又素敵に粗末なものだが之も私を魅するに充分であつた。ポン、ポンと間斷なく聞える音に心惹かれて暫しその附近を低徊したものである。實のるバナナ、茂つた椰子の葉蔭、丸木船に身を寄せて水に浮ぶ野菜を採る土人の姿、椰子の實を割つて汁吸ふあどけない幼兒、頭上に甕を持つ土人の娘などの行き交ふ土人の

市場、これは又小さなあばら家に机が十もあるかと疑はれる土人の小學校、皆變つた情景であつた。

河內の市中に一柱寺といふお寺がある。讀んで字の如く一本の太い丸太柱の上に寺が建つて居る。昔安南の王が妃に子供の無いのを案じて、その頃名もなかつた此寺の池中に祠を建て觀音像を安置し祈願した處、妃は其靈驗で王の胤を宿して玉の如き王子を分娩されたと云ふ故事がある。その形に因んで其後一柱寺と言ふ樣になつたのだ。そして今は建築界の變り種とされて居る。

市立博物館にも行つて見た。尙宿の主人の紹介にて極東學院（安南人は之を東洋學林と云つて居る）に安南の志士黎氏を訪ひ、氏と同道して學院附屬の博物館に赴き趣味ある博物・圖書を見た。氏は嘗て日本に亡命せし事あり、歐洲大戰當時の特赦に依つて歸國を許されて家業の傍ら東洋學林の新聞記者として勤めて居る人である。日本語が話せるので參觀の際「これ御國の本」「この佛、法隆寺」等といふ。その氏の言が未だに耳の底に殘つて居る。西藏の名物喇嘛教の珍奇極まる佛像は見逃さなかつた。

學院の教授なる佛人ウ・ボンといふ人が吾々を見つけて急に巧な日本語で話しかけられた時は一寸面くらつた。氏は先年迄日本の外國語學校の教授として東京に居た人であることが氏の話でわかつた。此の歸途黎氏宅に立寄り、さし出された盃樣の小さな茶椀の安南茶をもつたいらしく啜りながら、現在の安南狀態及び前途についての氏の言に耳を傾けた。

ダ プ カ ウ

約一週日の後、途を北の方雲南に通ずる滇越鐵道に採り途中河船(シャロップ)に乘換へて大迂回して海防に向つた。

先づ滇越鐵道に依り二時間にしてチツカウに停車した。此處に下車して右にバクニンの佛蘭西北方聯隊の兵營・病院を眺め、左右に數個の千人塚を見ながらダプカウに赴いた。

ダプカウはバクニンの兵營が近いだけに軍人相手の商賣で、吾々が訪ねた長崎婦人の家もレストランを開いて軍人を顧客として居るらしかつた。此町は以前は相當に繁盛だつたさうだが今は人も隨分減少したとの事である。男氣のない此レストランの長崎婦人數名は此の地の日本人の總てである。その日の暮方ダプカウを立つて海防行の河船(シャロップ)に乘つた。シャロップとは船尾に水車がくつついて居て、之を蒸氣で動かす仕かけの船である。歷史の挿繪に見るペルリの黑船に似てゐる。船は中休してはゆるゆると進み夜明方海防に着いた。

康海(ホンガイ)

河內より歸つてから二日目今度は康海に向け海防を出發した。クワンエンと云ふ船着場迄河を遡り其處から右折して海岸に出た。此の海岸に沿つて北上すること暫し、壯大なアロン灣の景色は展開された。その全部が石灰岩であるといふ奇岩奇石の大小無數の島々で一杯である。見渡す限り海表に屹立點在する石灰岩の上には熱帶植物が生ひ茂り紺碧の海上に反映するその妙姿は宛然一幅の名畫である。送迎應接の暇なき四圍の情景に醉うて只茫然たる中康海の港に着いた。

翠朝雨のそぼ降る中を宿の主人に案內されて佛人經營の石炭會社事務所に出頭し菅領事の紹介狀を以て石炭山見學の件を交涉して許可を得た。會社は一人の安南人を案內役として吳れた。直ちに同會社附屬のコークス工場の前から炭坑行の汽車に乘つた。極て粗末な輕便列車で降雨の爲に漏るゝこと甚しく私は車中に洋傘をさして坐つた。無蓋貨車に乘つて居る土人はびつしよりになつて居た。

コークスは同社の副業として居て同地に產する石炭と日本の三井から輸入する粉炭とを原料にして製造して居る。三井は三池より粉炭を此地に運び此地の無煙炭を日本に輸入して居る。それで一週間置きに三井物產の貨物船は康海の港にその姿を現して居る。

ハツーの炭山は康海附近一帶に散在する幾多の炭山の中の一つで最初に發見された有名な炭山である。現在はカンフアの炭山が最も有望視されて居る。その埋藏量も多く炭質も甚だ良いといふ。此附近の石炭は全部無煙炭であり露天掘が多くハツー・カンフアは露天掘に於て最も大規模なるものとされて居る。雨の中此處彼處に褐色の衣を着た土人の鶴嘴を揮すのを見た。パイプを啣へた得意の監督は吾々の來たのを見て握手の手をさしのべた。掘りかへされた褐色の泥濘に當惑して早々に此處を引上げた。

宿の背後は山になつて居て、見た處餘り木もなく、茂みも少いが、此近邊にはよく虎が出沒する事があるといふ。數日前に隣家の佛蘭西人の子供が夕方犬を連れて遊んで歸り鐵柵作りの戸を閉めて內庭に入つた瞬間虎が飛びかゝつたが鐵柵にぶつつかつて危い處で助つたと云ふ。斯樣に危險千萬な事は稀としても虎の出ることは珍しくないのださうだ。康海滯在中雨に祟られて殆ど家に立て籠つて居たが、一寸の霽間を狙つて鐘乳洞見物に出掛けた。安南人の操る小船に乘つて遙か沖なる島に漕ぎ着けると、其處に大きな鐘乳洞があつた。船頭を先頭にして明りを便に中に入る。眞暗い中、冷い水が頭の上からポタリポタリ落ちる工合はあまりいゝ氣持ではなかつた。

昔此洞穴は海賊の巢窟であつたが今はその影を留めない。洞の處々に記念の字體を彫り付けた邦人のいたづらを見る事が出來た。日本人らしさは、かうした處にも遺憾なく現れてゐる。

斯くて數日の後雨も止んで月夜の景色は又格別なアロン灣の風光に見惚れながら名殘も惜しく海防に引きかへした。

海防（ハイフォン）（ドウソン）

吾々が南支那最終の地廣東を立つて海防に着くや、翌々日には河內に行き歸ると今度は康海といふ樣に此地を中心にして居たゞけに、海防は可なりの長逗留であつた。海防と云へば普通な地理書で大體云ひ盡されて居り、格外に取立てゝ述べる程の事もないと思ふ。併し海防は佛印の旅で最初に見た所であるから海防の印象が根强い佛印の印象となつて居る。純粹の佛蘭西植民地、東京の空氣雰圍氣が氣に入つたのである。

上陸早々からゆつたりとした南國氣分に打たれて呑氣な所だと思つた。ボルドー邊のピジョン佛蘭西、橄欖の實結ぶ地中海の畔などあられもない遠い所が想像された。事實海防のコンクリート道路の兩側には橄欖樹が高く聳え長く續いて居る。道路近く迄ベランダをさしのべたカフェーが赤白の辨慶縞の幕を吊り下げた中に隱見して居る。その情景は流石に南國氣分豐かな佛蘭西式の美を表はして居た。明るいコバルト色の壁・簡單な線の造作、幾ら見ても飽きの來ないものであつた。繁雜な而も不淨な廣東から來て一層その感を深くしたのである。

人力車の賃銀の法外に安いのにまづ驚いた。一時間乘つて廿五錢、日本の電報代式にそれから一時間每に廿錢增しと公定されて居る。十町餘り乘つて五錢もやつて置けば威張つたものである。陣笠陣羽織の樣な法被を着た土人車夫が車體を青や赤で塗り潰した風變りの腕車の竹の梶棒を振り乍ら裸足をコンクリート道路に叩きつけ乍ら走つて行く格好は觀物である。

海防は非常に暑い所で夜も隨分蒸し暑い。此の所東京（とうきやう）の夜が美しい位であつた。それで歐米外國人や一

等國民待遇の日本人達は白晝は歩行しないで自働車を走らす。自働車のない者は先きに述べたあの安い人力車を飛ばして用件を濟ます。實に都合良く出來て居る。日本の車夫が徒に足踏み多いばかりで進みがのろいのに反して風を切つて走るから夕涼にもつてこいである。次は道路の良い事で、全部コンクリートかさもなくば小石を混ぜたタヽキになつて居る。自働車のドライブには好適である。それも絶えず修繕されて文明道路の完全さが美しくなつて來る。泥田の東京の道路とは較べものにならない。

それから又眼に止つたのは土人の服裝で普通の土人は褐色の上衣を着てお齒黑をつけ皆裸足で歩いて居る。女は頭に布を巻きつけ男は椰子の葉で造つた笠を被つて居る。兎に角日中街上を歩いて居るのは土人だけで永年日光に照り付けられた彼等の頭は先祖代々から完全に熱帶馬鹿になつて居るらしく日焼け　た顏にポカンと口を開けて居る。併し上流になると流石に違つて餘り外に出歩かない。顏には氣品も有り、色も白い。黑絹の服を纏うて履物を穿いて居る。女子は褐色と綠の二色の帶をしめて右下にそれをぶらさげて居る。その色合は日本の芝居好みの三色に相應しい澁い色どりである。そして頸や手足に金輪をつけて居る。土人の女は食事よりも大切なと云ふ檳榔樹を嚙んでお齒黑の口から絶えず赤い汁を道路と云はず床と云はず吐き出す。丁度肺結核患者の喀血と同じ樣に見えた。

總じて安南人は一見支那人よりも寧ろ日本人に酷似して居る。此の地方の芝居も亦同樣でその舞台裝置が支那のよりも未だ念入りで日本の歌舞伎のそれに少し似通つた所が有る樣な氣がした。あれやこれやを總括して日本に貢を献じたその昔に思ひ及ぶ。愉快に思つたのは土人が何時も懷しさうに我々に接した事で、吾國人とは神農氏四代の孫に於いて同始祖であると云ふ彼等の言が可愛い。

扨て海防は北部印度支那並びに隣接する雲南省の農産物・鑛産物(石炭・大理石)を輸出する東京唯一の港である事は世間周知の通りで、石炭や東京米の輸出が多いだけにその港內には常に數隻の汽船が停泊し河港乍らの賑かさを呈して居る。目下築造中の新しいワーフ完成の上は相當の繁昌を齎らすであらう。當市には人口が七萬もあると云ふが、その大多數は安南人・東京人で、佛人之に次ぎ日本人は僅か廿數名とは餘りに情けない。

當市には三井洋行と華南銀行の二つの邦人會社があり、他の邦人は殆んど雜貨商を營んで居る。

康海見物を終へて再び海防に歸つてから日もなく、雲南入りの新井・笠原の二君が引返して來て賑かになつた。やがて一行四名は自働車をドライブし道良きまゝに卅哩のスピードを出して約八哩、ソンコイ河口のドウソンに行つた。此處は海水浴場であり佛人經營のホテルがある。附近は佛人の別莊地となつて眺望の廣い美しい處である。ホテルの卓を圍んで佛蘭西ビールに溜飲を下げ、附近を散策する事暫くにして

海防に歸る。ドウソンは海防港に向ふソンコイ河遡航汽船に對するパイロット船の居處である。

新井・笠原二君が數日この地に滯在の上歸航の途につき香港に向つてから日ならずして九月二日、私は安藤君と別れて、大華丸に乘船し、懷しい海防に我が伴侶を殘した儘、西貢盤谷への旅を續ける可く一先づ廣東に向つた。

再び廣東へ

西貢

廣東に滯在する事二日、西貢行きの日本貨物船に便乘して西貢に着いたのは九月の十日であつた。東京と共に印度支那に於ける佛國の純然たる領土交趾支那の首府であり、又東洋に於ける小巴里として有名なだけに小綺麗な佛蘭西式の街でその兩側には鬱蒼整然とした街路樹があり、コンクリート道路の中央は芝生の園となつて居る。南國情緒たつぷりな美しい都である。メコン河三角洲の上、西貢河に臨んで水こそ澄まねどセーヌの流に跨る巴里はかくやと思はれた。

香港市街を英京倫敦の縮圖と見れば此處は又巴里の縮圖と見え、前者の何となく暗い感じのするに反し後者はさつぱりとした明い感じを與へて居る。人口十二萬有ると云ふ。年産約一千二百萬石の西貢米の集散地で日本ではラングーン米・盤谷米などと一緒に稱して南京米と云つて居る。米と云へば西貢に行けば必らず西貢の接續市街であり河向ひであるショーロンの精米場を見て置く必要があらう。

私もそれを見逃さず早速見物した。人口八萬もあると云ふ中々繁華な支那人街で、河岸に支那人經營の宏大な精米場が羅列し廻轉式の精米機の喧騷の中に土人や支那人が眞白になつて働いて居た。之等の機械を動かす原動力の石炭に米の籾を代用せしめて、うまく廢物利用して居る處は感心の外はない。

有名なジャルダンボタニックを見たが、宏大なもので白日の下美しい熱帶性の動植物が旅情を慰めてくれた。夕暮れ近くなると街路には佛美人の姿が現れ始め南國の街は夜の賑ひに移つて行く。立派な劇場・活動常設館・カフェー、その他娛樂機關到れり盡せりのカテナの街はイルミネイションに飾られて不夜城を呈し、瀟洒たる佛美人の群で賑ふ。ホテルではオルケストルの音響きダンスの足どりも輕い。ベランダに酒を酌む男女の群。未知の巴里の夜もかくやと想像したものである。

佛領印度支那に就いて

私が佛領印度支那で見た處は東京地方と交趾支那の一帶のみであるが、かの有名な晝寢は、金錢奴の支那人は別として、どちらでもやつて居た。此の地方の十二時から二時頃にかけては一日中一番暑い時なのでその間この公然の慣習となつて居る晝寢をして英氣を養ふ事にして居るのである。私は始めこの晝寢が出來なかつたが「鄕に在つては鄕に從へ」で終にはそれをしないと氣持が惡くなつて來た位である。眼から

入つて來る紫外線や後頸に照りつける光線が腦を犯す事夥しいので白色靑眼なる佛蘭西人などはよく之がために斃されるさうである。この點に於いては日本人は割合有難いもので眼玉が黑いので紫外線を透さないので耐久力があると云へる。それだから日本人は此の地方に生活するにさして身體的困難を感じて居ない。

海外に女は附物でありそして彼等は殆んど長崎の女である事は世間周知の事だが、此處もその分に漏れない。尤も現在この地にゲイシヤガールとして働いては居ない。嘗てさうした時代もあつて西貢邊では隨分繁榮したものださうだが十數年前に撤去せしめられたとある。かくて大部分は日本に歸り、殘れる長崎婦人は今やその姥櫻を洋服姿に變へて故國を離れた常夏の異鄕に暮して居る。佛印は東京・交趾支那の二領地と老撾・安南・柬蒲寨の三保護地とよりなり、佛國はその守備に約數萬の兵を置いて居るが、佛國本國から派遣された將卒は二千名位ださうで殘部は凡て土民兵であると云ふ。士官以上は皆佛蘭西人で給金も隨分取つて居る。話に依ると特務曹長級で百五十圓も取つて居る。他はそれで推量が出來る。そして彼等の一月に於ける葡萄酒代はその給金の五分の一を出るさうだ。葡萄酒と云へば本國佛蘭西から直輸入であるからボルドーの普通のが一本五十錢位で買へる。佛蘭西製香水及び東京地方の水牛の皮で作つたトランクと相俟つて、佛領印度支那に於ける安價な名物の三福對とさるべきものであると思ふ。

佛印全體にわたり今猶人身賣買の舊風を見、到る處に人身のマーケットが立つ。そして勢ひ賣買結婚の流行を伴つて居る。

白人等が非常に悠暢な生活をして居る半面、土人は最大の壓迫を加へられて居る。人智を人爲的に退化せしむるに汲々として居る。卽ち「知らしむ可らず」の政策が取られて居るのである。吾々この地に始めて旅する者でさへも容易に此の政策を看破し得る程であつて、恰もそれが白人の權利かの如く低能な土人に壓迫を加へて居る。先年安南隨一と稱せられた一革命家の死せし時、安南人が門戶を閉ざして共靈に敬意を表したと云ふ事は、下層の土人こそ愚鈍なれ、中流以上の安南人達が如何に人種的に覺醒してゐるかを示すバロメーターとなり得よう。その志士が嘗つて獄に投ぜられ死刑を宣告された際は佛印全土の安南人の輿論喧しく時の總督も困りぬいて本國に照會の上諒解を求むるなど大騷ぎの後、遂に死刑を免じたと云ふが、之を以ても活氣のない安南人に對して遠慮なく壓迫を加へてゐる佛蘭西の統治の半面にも、難澁の問題の存するあるを知る事が出來る。

旅行當初はアンコールワット見物を目論んで居たのであるが、船便の都合で早々に西貢を引上げなければならなくなつた。まる三日西貢滯在の後佛蘭西汽船に便上してこの歡樂の都を後に暹羅の盤谷に向ふ。

盤谷（バンコク）

佛領印度支那最終の地西貢を去つて、船がメナム河の眞中に錨を下したのはそれから四日目の九月十七日であつた。濁つた河の兩岸は美しい椰子の林に圍まれて、見るからに凉々しい。

形ばかりの檢疫を濟ませて棧橋に上陸した。當地では英語を以て何事も交渉に當つた。先づ車に乘つて兩側には隨分汚い小屋が列んだ素的に惡い道路を拔け、嘗ては市中唯一の交通機關たりし汚い大小運河を見乍ら交通頻繁な街路に出て割合に綺麗な處に私の宿を見付けて旅裝を解いた。先程見た運河は縱横に鑿掘され盤谷市の一特色とされて居る。水は汚いが東洋のベニスと呼ばれて居る。英國の勢力が大きく次いでは佛國の勢力で最近米國が盛にこの地方に手を伸し始めて居る事など奈邊にも窺はれた。

盤谷の人口は約八十萬近くあり、その住居は歐洲文明の浸入の影響もあつて造作の變化著しく壯大な石造建築物のある一方、陋小なる木造の土人家屋があつてその對照頗る珍妙である。

暹羅家屋の普通のものは雨季の終に氾濫し來るメナム河水の浸入を豫防する爲め地上より數尺高く床を造つて居る。そして壁は特産のチーキ材や竹を使ひ、屋根は棕櫚やその他の植物の葉を以て葺き、排熱のために軒廂を長くして居る。最も奇妙に見えたのはメナム河の兩側に點々する浮家であつて、水上にあつて柱を以て支へられて居る。その形よりしてよくフローチングハウスと稱せられて居る。歐洲式と暹羅式の對照の甚しい市街建築物の間を縫うた汚い道路でも往來は仲々頻繁で、電車も有り自働車も走り馬車も有り、世界各國の文明や人種が共々に小さいなりに集つて居る。

市街ではチョイ〳〵土人の乘つた象君の歩いて居るのを見た。小さい時聞いたお伽噺に出る樣な型で靜靜と歩く工合は流石盤谷特有である。周圍が雜然たる中に何となくオリエンタルな氣分に打たれて了ふ。兎に角から云ふ處に異國情緒を味つて行つたのである。

市街の道路が前述の如く餘り思はしくないのに引變へて、一旦郊外に足を運ぶとこれは別世界かと思はるゝ程綺麗である。暹羅王宮附近のマホガニー並樹の道路は全部アスファルトで固められて居て、一名マーブル、パレスと呼ばれて居る新王宮と、暹羅風のお寺に似た舊王宮とがこの美しい並樹街道で結びつけられて居る。

道行く土人の姿は安南のそれとは格段の相違こそ有れ檳榔樹を噛んで居る點に於ては異りはなかつた。此の國の男女は共に斬髮して居て見分けが付きにくい。平素着用して居る衣服は「パノング」と云つていろんな色合も有るが殆んど無地の布で造られ腰部と股とだけを蔽うて居る。丁度日本の腰巻の樣に見える。普通の土人の男はパノングだけで裸體で歩いて居るが流石女は乳の部分も布地で卷いて居るから男女の相違は付く。上流になると男子は上衣に白洋服を着て長い靴下をはき、靴を穿つて居るが、女子は上身一帶に薄き絹地のショール樣のものを被つて居る。宮中の女官連は七曜に應じて毎日パノングの色を更替する

と云ふ。

最後に忘れてならぬのはこの國の農業である。之はこの國の林業がチーキ材に、鑛業が錫に代表さるゝが如く、米に依つて代表されて居る。今日の暹羅が經濟的生命とするだけあつて一百萬噸の米を輸出し、輸入總額と相對せしめ輸出入の平準を保つて居る。メナム河の兩岸に横はれる一望際涯なき米田を見る時その廣袤なるに驚いたのである。このメナム河流域の沃野を汽車にて縦走する事三時間にしてアイチヤの町に着く。此處は暹羅の舊都であつて佛寺の廢墟空しく草萊に埋れ、榮華の後を偲び在りし昔を追懷せしめる。此處では今尙船で凡てを爲して居る。德川時代の初期吾が國人の渡航する者多く諸所に日本村をなしたが今は僅に遺跡を留めて居るのみである。昔一世の快傑山田長政が此處で偉功を立てた事などを思ふとそゞろ懷舊の念に堪へぬものが有つた。

暹羅が米作で有名なると共に又暹羅國粹の美を誇るものは寺院輪奐の美である。この美術も佛敎の工藝•殿堂美術であつて、佛敎美術の外には何等賞揚すべき美術はあるまい。菩提樹の影深き印度美術の靈香を千載の下、眼のあたり見る事が出來たのである。

常夏の島々

―第六班―

馬來半島を訪ねて

拓殖大學　島田貞雄

門司――上海――香港――新嘉坡――彼南――太平――保――吉隆坡――スレンバン――馬剌加――柔佛――シンガポール――香港――九龍――上海――門司

南洋旅行――椰子の葉末に落ちる夕日、檬果(マンゴー)の樹蔭のサロン姿、綠樹碧浪の美しさ、踊り狂ふ馬來の舞姬、鬱蒼たる護謨林、千古不鉞のジヤングル――等々、總て南國の風光を夢見つゝ、約五十日程病床に呻吟してゐたが、幸ひな事には六月の下旬から相當元氣づいて來たので、愈々本會派遣員の一人として第六班に加はり、一行三名門司を立つたのが七月の十日。喜びの中にも病直後の身體なので幾らか心配もあり、感慨無量であつた。余を最も親しく知り、多く南洋を知らざる叔母さんや友人は、炎熱灼くが如き熱帶の地、猛獸荒れ狂ひ、毒蛇跋扈する馬來の地への旅立ち、それこそ飛んで火に入る夏の蟲とでも言つた樣な喩を懇々と擧げ余の壯圖を思ひ諦めさそうと試みたり、出發確定

の際は非常に氣遣つて吳れたものだつた。

然し凡ては天運に任す事にして、爾來二ヶ月に亘る南洋旅行を續け、無事門司に上陸した頃は見違へる程の丈夫さとなり、出發當時の骨張つた顏はまるく太つてさへ來たので、余を知る人々は等しく南洋の左程迄暑からざる事を確認するに至つた。余も亦南洋の新鮮なる空氣に惠まれて、身心愈々健全となるを得て、南洋恐るゝに足らずといふよりは、寧ろ、南洋が如何に吾々邦人の生活に適してゐるかを體驗した次第である。

熱帶地を征服する者は世界を征服するとの言葉は愈々益々身に沁みて來た。「行け！　南洋の天地に」と言ひ度くなる。――只腸胃と呼吸器の弱い人には不適當なる事は熱帶醫學者の異口同音に唱ふる處である。

（一）途中のいろ〳〵

十二日朝私等の乘れる歐洲通ひの鹿島丸は上海に着いた。母校先輩村上氏のお出迎へで、上陸から上海見物と易々樂々に濟んで、當夜は學校先輩約二十名余り打揃つての大歡迎に預り、純粹の支那料理に我を忘れて舌鼓を鳴らしたのは今以て忘れられない。先輩は皆元氣旺盛で、一致團結の精神に溢れ、我々後輩の壯圖に幸あるやうにと祝福された事を先づ玆に記して、後日の思出の一とする。

十四日朝上海を發してより四日目、航程八三〇浬にて英國東洋艦隊の根據地香港の埠頭に第一歩を踏んだ。時に母校先輩小宅氏、學生帽の我等を雜沓の中から見出して、直ちに香港一周やら、ピーク見物と何彼と心からの歡待を盡された事を感謝する次第である。

猶香港で一支那人から直接耳にしたことがある。何も敢て耳新しく聞くに足る可き事でもなからうが、現今支那人の國際的問題に關する思潮の一部を窺ふことが出來ると思ふ。彼曰く「香港は今二年後には所謂支那人の香港になり、其後數年にして上海も亦然り」と。然し眞に支那は如何に進展して行くものであるか、而して之が南洋に於ける支那人に如何なる影響を及ぼすものであるか、吾人の大いに注視すべきことである。當時香港は例のボイコットの渦中であつたことを附言して置く。

香港を十七日夕闇に乘じて出發、船は南へ南へと進み、暑さも隨つて加はり、南洋氣分は彌が上にも增して來た。香港から航海約五晝夜、航程一、四四〇浬を經て丁度六日目に新嘉坡に着いた。

新嘉坡上陸に移る前に一寸鹿島丸船中生活中の思出話を紹介しよう。吾々の船中での世界は言ふ迄もなく三等船室で、七名の日本學生と、六名の支那學生と、他に南洋行・濠州行の出稼人がゐた。此の中に一人の婦人、寧ろ田舍の叔母さんと言つた方が適當である人がゐた。年の頃四十前後で嘗て過去七年間馬來の地に生活してゐたと言ふ。而して今度は養鷄事業を營み一成功する迄は日本にかへらぬと言つてゐた。而して吾々が南洋旅行をすると言ふので同じグループとなり、毎日南洋土人の奇習――特に馬來女が產氣附く

と馬來人の產婆は胴より下腹にかけて呪文を唱へながら絞壓して產兒を分娩させることや、惚れ藥の實話や、回々教徒になる可き土人の珍無類な大洗禮、三十日の斷食等、凡て面白い話を聞かして貰つたのであるが、その叔母さん馬來語を上手に饒舌るので一同は喜んでその叔母さんを先生として馬來語の會話練習に熱中したものである。但し女先生の馬來語は吾々が學校で敎はつたのとは少々相違してゐたが、之が實際的のもので、後日半島旅行中直接間接に非常に役立つた事は、女先生に大いに感謝すべきである。玆に、その氏名は記さないが、健氣にも單身南方萬里の地に新生を開拓す可く自ら進んで行く婦人を紹介すると共に、虛榮の夢に憧れて塵の都に浮身を窶し、邦家の植民發展の如きは一考だにする事なき婦女子に、世にはかゝる同性もある事を知らしめ度いのである。

抑々我國の南洋發展――のみならず海外發展は、桃太郎式や浦島太郎式發展では完全なる成功は望まれないのである。男女共に手を握つて海外に發展せねばならぬ時が來たのである。

（二）　シンガポールのファースト、ステップ

七月廿二日正午、東亞の關門新嘉坡の大都市を眼前に迎へる。立並ぶ白亞館の偉觀は堂々港を壓してゐる。大船巨舶の碇泊數多ありて、防波堤內に浮ぶ小汽船は數知れず、帆船その中を横行し、タンジョンパガーの大棧橋は、各國の巨船を横付けて流石に殷盛を極めてゐる。暫らく船上より港の繁榮を睥睨しつゝ、此堂々たる完備した東洋一の稱ある大棧橋に先づ膽を冷やした。

船は次第に横付けにされて行く。其間に、大勢の土人（オーラング・ラウーツ）が獨木舟に乘つて群つて來た。之れ我等の半島に於ける第一の出迎人で馬來海上の乞食なり。上を向いては、ツーアン（英語のミスター）ツーアンと呼ばはり乍ら、錢を投げて吳れと合圖をする。船客が面白がつて、銀貨や銅貨を海中に投込むと、先を爭つて波間に飛込み、沈み行く銀貨を掌で受けて浮上つて來る。飛込む時には船も櫂もそこらに放り投げて、ざんぶと躍り入る。浮み上ると、覆つた船をクルリと起して、無造作に乘込む。片手で櫂を操り、片手で水を酌み出し乍ら、上を向いて、聲高に怒鳴る。度々水の中に飛び込むので唇などは紫色になつて居る。

上陸すると、埠頭は大層な雜沓である。同行の伊藤君を御出迎へ下すつたジョホール護謨會社の社長岡部常太郎氏の案內で先づ臺銀支店に赴いた。是は邦貨を海峽植民地の金に換へる爲である。こゝの法貨は海峽弗にして、磅貨との爲替比率は、貳志四片に海峽弗壹弗の割合。又、英國金貨も法貨とされ、七磅は六拾海峽弗にて、如何なる金額の支拂にも使用され、弗貨は即ち標準貨である。海峽弗はラブアン・英領馬來・英領ボルネオ及サラワクの標準貨である。而して所謂金爲本位制が實施されてゐるのであつて、人

民にて倫敦宛電信爲替を買へば、新嘉坡にて代り金が支拂はれ、反對に倫敦なるクラウン・エージェンツに金を支拂へば、新嘉坡にて政府が紙幣を發行して流通に付するを得るのである。流通貨幣の種類は、硬貨としては金貨があるが、市場流通稀にして、銀貨は壹弗・五拾仙・貳拾仙・拾仙・五仙の五種、壹弗及五拾仙は無限法貨にして、其他は貳弗迄を法貨とされてゐる。銅貨は壹弗迄を法貨とし、壹仙・半仙・四分一仙の三種なるも、壹仙以外は市場に殆ど見當たらぬ。軟貨卽ち紙幣は拾仙・壹弗・五弗・拾弗・五拾弗・百弗・千弗の七種にして、五弗以上は或る特定の場合を除く外無限法貨とされてゐる。紙幣を無限法貨たらしむる故に政府は紙幣準備金を有せねばならぬ。準備金に就ての規定は玆には畧す。猶余が兩替したる當日の相場は邦貨の百圓が八拾貳弗五拾貳錢であつた。

如上のやうな海峽弗に就ての智識を臺銀に於て修得し、次に領事館を訪れる積りであつたが、領事は當日不在と聞いたので、直ちに岡部氏の案内で邦人經營の碩田舘ホテルに憩ひ一先づ落ち着いた。

これ迄に第一に目に着いたのは、雜多矢鱈な人間の種類である。達磨のやうな男が白い布地を無雜作に身體に投げかけて威張つて歩いて來る。チツテー族と言ふ印度人で、其の總てが金貸を業として親が五千圓殘して死んだら、其の子は遺產を倍額の一萬圓になさない間は一人前でなく、妻帶の權利は勿論認められない。繼承した財產を倍にした時始めて彼等の社會での公民權を得られる事になつて居る。故に夫れ迄は全く食ふ物も食はずに拮据精勵只宗敎によりて慰安と信念を求めて居ると言ふことである。

次に丈の高い印度人が桃色の布片を身に卷いて、頭の眞中に殘した毛を束ねて、さつさと歩いて行く。タミイル族と呼ぶ、色飽まで黑く眼光烱々たる印度人が、額に白墨のやうなもので三本條を引いて、威張てやつて來る。之れは牛の糞であり、涼しくなるお呪ひであるとも言ふが、元來彼等は牛は神の御使なりとの信念からして、牛より放出された糞を異敎徒が土足にかけると不信を神に責めらるゝと云ふので、先を爭うて其の糞を搔き取り、之を乾燥して石灰と搗き混ぜた物を顏や胸や上膊等に塗つて魔除けの祈禱をなすものであると言ふ。且つ一方守護神の守札の意味に於ても牛の糞を塗るので、彼等は儀式の席に行く時は必ず念入りに塗る事になつてゐる。又其上に神聖犯す可からざる意味で家内の柱や器具も牛糞を以て淡黃色に染めて喜んで居ると言ふ事である。

その次に馬來の女が被衣目深に被つて靜かに步んで來る。馬來の男が赤や黃色の派手な着物を着て、のそのそやつて來る。支那人が來る。英吉利人が來る。暹羅人が來る。扨て又同胞日本人が來る。而して此町だけで二十六の國語が用ひられてゐると言ふ丈けでも、如何に混沌とした人種展覽會の街であるかが判る。

暫く行くと、向ふから牛に牽かせた車が來る。角の先には眞鍮の管を箝め、顏は如何にも柔和で、黑に

白の斑の毛色に丈高く莊嚴な姿をして、靜々と車を牽いて來る。是は特に神聖な動物として、取扱はれて居るのである。卽ち回々敎は牛を女神として信じてゐるからである。

流汗を拭いて、直ぐと自働車で、町の近郊を見物する。先づ詩趣豊かにして、風光絕佳なるタンジョン・カトンに車をとゞめて少憩、それから再び車を走らしゴム林の間を縫うて、もと日清ゴム園なりし處に到つた時、一寸車を止めて岡部社長がゴム液の採取方法を說明されたので、初めてゴム園なる物を納得するを得た。百聞は一見に若かずとは同行の邦人紳士が感心極まれる言葉であつた。

それから再びゴム林の間を快走して美しい植物園の一巡を終へ、凡ゆる熱帶の珍らしい植物に讃辭を表した頃は、常夏生活の慰安であると稱される夕暮の涼風さへ訪れて來たので、愈々碩田舘に戻つて、日本を去つて以來始めて水浴の味を知つたのである。

夕食後は南洋の珍味な果實に舌鼓を鳴らした。ピサン・マス（バナヽの王と稱されてゐる）・ラムブータン・ドリヤン・パパイヤ・龍眼・ランサ等々總てがお甘しかつた。南洋の果實は實に豊富で市場に山をなし、然かも芳烈な味がするのが多く、世界中の果物に到底比較を許されぬ味を持つて居ると云はれてゐる。殊にドリヤンは南洋土人の大好物で、一度ドリヤンの味を占めたら、終世忘れることが出來ないとさへ唱へられてゐる。

夜は一行五人（中二人は本會派遣員に非ざる同じ旅行者）で電燈燦爛と輝く海岸通りを、涼風に吹かれ乍ら散歩して居ると眞晝の暑さを忘れ實に人間らしい氣持になる。一通り夜のシンガポール市街を見物して南洋の第一夜の夢を結んだ。元より邦人のホテルなれば大した珍らしい風變りな事もなかつた。

要するに新嘉坡は單にファースト・ステップを踏んだのみで、其の詳細は後に讓る事にする。

翌廿三日、四度び鹿島丸に搭乘して半島の西北にある彼南に向つた。而して途中マラツカの街を去る二浬の沖合に船は碇泊し、きらびやかなマラツカ街燈を眺めては、マラツカの歷史を思ひ浮べて上陸不能をかこちつゝ、其處に一夜を明かした。

廿五日朝丁度日本を去つてから十五日目、新嘉坡から三七〇浬を航し、愈々鹿島丸に最後の名殘りを惜みつゝ別れを告げ、ペナンへ着いた。これからほんものゝ見學の第一戰を開始したのである。

（三）彼南の一巡

抑々彼南は一七八七年、英國のライト大佐が半島の一州ケダの王樣から貰ひ受けた所で、北緯五度二四分、東經百度二四分弱の位置にあり、彼の馬剌加海峽の北部を扼せる一小島——西南スマトラに對し、東は二浬の小海峽を隔て馬來半島に接する、南北一五哩、東西九哩、周圍四五哩の小島にて、所謂英國の海

峡植民地の一である。島の中央に二、七〇〇呎のペナン・ヒルがあつてペナン人の自慢のヒルである。

彼南は人口三十一萬餘りにて、政治は同廳長の下に殖民地政府と同樣な小組織に依て行はれてゐる。彼南は馬來第二の都會で、街の殷賑も仲々なものである。こゝに於ける邦人は百五十名との事で、日本人會を組織してゐる。會長船木氏は三井物産出張所長で、吾々の訪問に際して彼南に於ける同物産の活動振りや彼南の貿易狀況等に就いて説明の勞をとられたことを玆に謝す。而して主な邦人は寫眞館二、醫院一、齒科醫四、大藥房・雜貨店並に商店四、理髮店一。大いに活躍してゐる樣子が覗はれた。ホテルには我々一行の宿泊せる堂々たる朝日館あり。尙玆に吾々を喜ばせたのは、我々の先輩にて南洋に發展されて、旣に五ケ年有餘大いに活躍されてゐる藤井愼己氏であつた。同氏は未だ學生離れのしないやうな元氣さで、余等今般の旅行を大いに歡迎し色々と南洋事情に花を咲かせられ一同は大いに元氣づいた。

次にこの殷盛を極めてゐる市街見物を一先づ濟まし、眼を郊外に轉ずれば、風光佳良にして、海濱タンジョン・ブンガー卽ち邦語で花が崎と稱せられる處で、その眺めたるや白砂碧水、空には白雲輕く浮き、海には先のゲダ州の青巒が映つてゐる。翠波に白鷗飛び來る花が崎の淸楚な眺めは實に長閑であつた。

ペナンの名所として一行が訪れた處は、蛇這ひ廻る寺卽ちスネーク・テムプル、及植物園と水源地、工費八十萬弗と言ふ大仕掛けな極樂寺。寺は立派で眺めも素敵であるが、どちらかと云へば俗惡な氣が多くて尊嚴の念が起らない。然しこの佛寺を辭せんとする時、ふと乃木、東郷兩元帥の揮毫が揭げてあるのを見出して喜んだ。卽ち歐洲に行かれし途中立寄られし際の書とて、極樂寺淸遊記念と記され、明治四十四年五月四日とあつた。

これから愈々ペナンに名にし負ふペナン・ヒル上の雄大な絕景を味ひに行つたのである。先づケーブルカーに乘る。最新式にて傾斜頗る急にして廿二分にして頂上に達する。流石に二千七百呎の高臺である。風は稍冷たく頰を打ち、暑い所によくも斯んな極樂があるもんだと聊か驚き且つ喜んだ次第である。形勝に見惚れて忘然自失の態であつた一行は、軈て一齊に早取寫眞を始める。頂上の一方にはクラブホテルがあり、一方には總督の別邸が流石馬來太守だけに普通人の得られぬ地を占めてゐて其の豪奢には驚かされた。其他富豪の堂々たる邸宅が所々にある。

此のヒルは眞に彼南の風光を一望に集めてゐる。山上は小公園になり、其處に茶亭がある。茶亭のベンチに腰を据ゑ、彼南島を眼下に見れば、(ペナンとは馬來語にて檳榔樹の意。)如何にも彼南島の名に負かずして、檳榔樹椰子の島である。殆ど凡てが椰子であると云つて好い。丘上より南方を眺むれば、靜かなペナン水道を隔てゝ、馬來半島の海岸線、蜒々と南に走り、プライの南クリアンの平野は米田續き、眺めを北に轉ずれば、そこにはケダの青巒連亙し、南の平原翠綠の美觀に反して、北は峻嶮雄大な景色である。

連岳は遠くケダの東國境を北に上つて遙かシャムに走つてゐるのである。彼南人が「このヒルの眺めを知らずしてはペナンを語る資格がない」と言ふ丈け如何にも丘山の眺めは蓋し天下一品であらうとも思はれた。ヒルに盡きせぬ名殘りを惜み、再びホテルに戻りペナン第二夜を迎へた。

之を要するに彼南は貿易港にして、歐洲航路の船は皆此處に寄港する。而して商業上有望な處で現在邦人の活躍は大したものでないやうに見受けたが、今後邦人が商業上に手を擴げる餘地は充分ある。然し最善の努力を拂ひ且つ何とか良き發展策を講ぜねば大勢力を有してゐる支那人に對抗する事は出來まい。最後に彼南は對岸スマトラ島のデリーと相對せるを以て將來スマトラの開發發展と共に、同島への貿易の中繼港として有望であらう。

（四）馬來の汽車旅行と都太平●一保

廿七日、一行中の大西・伊藤兩君は彼南よりスマトラ見學を分擔し、余は一途に馬來半島を一巡することになり、相互の健康を祈りつゝ袂を分ち、余は同日朝七時旅裝を整へ、朝日旅館々主山田氏及先輩藤井氏に見送られつゝ、彼南の港を發し連絡船で對岸のプライに着いた。此のプライの築港はプライ河の砂が流込み流行の英式の大規模方法を以てするも如何ともなし難いとの話であつた。これ所謂地の利を得ざる所以か。

プライから始めて馬來汽車旅行者となり、米實のり、民は富むと言ふ渺々たるクリアン大平野をめがけて進む中、いつしか太平に着いた。實は馬來半島の汽車は餘り上等の石炭を用ひず、而も車中のほこりつぽいのは馬來汽車旅行の名物なんだから、汽車の旅行は夜行に限ると言ふことであつたが、このクリアンの大展望を味ひ度い許りに、晝の旅をなした次第である。

ペラ州の太平の町は街路樹を以て飾られ、流石に並木道路は立派である。こゝは政治の都である故、商業的には一向振はないとの事であつた。然し博物館と公園は堂々たるものである。錫の國と云ふ丈けあつて、博物館には鑛石類が多い。又、馬來の文物にも面白い變つたものがあるものと首肯されたのは、汽車を顚覆させた象の遺骨が飾られてある事である。次に植物園であり、且つ公園である處を見物中、初めて南洋で有名なスコールに遭遇した。一時に威勢よく頭を叩くやうな雨で、所謂マスキュリン・スコール。實に爽快なものであつた。然し雨に濡れる事は南洋では特に病氣の源泉である事を知つてゐたので、直ちに附近を彷徨してゐた支那人の車に乗つて、太平の町を悠々と見物したのであるが、時恰も太平ヒルがタモヤの中に聳えてゐたのは、日本の景色そのまゝであつた。

邦人は市の附近を加へて約百名、日本人會がある。その半ばは街に在留し、主に寫眞師・齒科醫・洋服

業・雜貨商等。床屋さんで五十エーカ餘りのゴム園を所有してゐるのもあつた。そして、怪しい婦人の過半は先年の廢娼と共に一掃されたと云ふ。此處では太平日本人會副會長の山本氏に甚だ御世話に預つたことを深く感謝の意を表する。太平はゴムと錫の都である。近年錫採掘法が甚だしく進歩して來たので、苦力が少く、町の賑ひに及ぼす影響は、可なり大したものらしい。

太平驛迄態々御見送り下すつた山本先輩に別れを告げ、再び車中の人となる。鐵道線路に沿うて州道あり、自働車の往來が折々見受けられるが、左右はゴム林を以て掩はれ、その奥地は千古不鉞の處女林が鬱蒼としてゐる。太平を出たのが午後四時で、南ペラの都一保に着いたのは夜の九時頃であつた。

一保の街は實に綺麗で、道幅廣く、名にし負ふキンタの平野に建つ新開都市である。人口約五萬五千、流石に商都と云ふ丈けに、街は賑はしく活氣があつた。支那人の富豪が多く、商權亦彼等の掌中にある。邦人の數は百五十と聞くが、その半ばは例の巷の夕に黑・白・黄とり〴〵の客を迎へる女である。日本人の中堅となつて相當の地盤を有する人々には、日本人會長としての齒科醫山下氏、副會長の飯島眞太郎氏があり、同氏は支那人社會に人望特に厚く、吾々も氏に連れられて支那のブルジョア紳士を訪れ　共に活動寫眞(支那劇のみ)を見物に行き、馴れぬ英語で吾々の目的などを話した事がある。その他洋服店二、寫眞館二、雜貨店二等がある。

飯島氏に案内され有名な鐘乳洞を見物し、又支那人經營の錫鑛東英公司を見學する。可なり大仕掛けの工場で、何處まで錫の鑛脈が連續してゐるか未定だと云ふ程豐富な山である。此の錫鑛發見には、面白い物哀れなエピソードのある事を、飯島先生から聞かされた。丁度三年前、馬來土人の親子五人が、其日其日の生活に窮　、果ては身を飾る一切の金銀を質に入れ、翌日からの餬口を如何にす可きやのどん底に陷つた日、小川に洗濯してゐた細君が、ふと二三の鑛石あるを發見した。これが卽ち此の錫山の開發の素因で、彼等土人親子は、その發見に依り立ち所に數千金を貰ひ受け、裕福なる生活を樂しむに至つたと云ふ。窮すれば通ずの實例として有名な物語とされてゐる。發見當時は百エーカ餘の地を支那人が借り受けて經營してゐたが、今は、一千エーカに五、六千圓の株に對し年に十二萬圓の純益金があり、其配當毎月百圓に對して五六千圓、現に一株貳萬圓位の價値があるとの話であつた。皮肉なのは、邦人中の棚からボタモチ主義者――所謂一攫千金を夢見る人々が、競うて是等寶山發見に歲月を費すが、遂に一も見當らぬとの事。斯んな寶の發見はやはり偶然に天が發見させるものらしい。然し、天運さへ良ければ馬來の地に錫鑛を發見するは至極容易なことであると云はれる程澤山あるとの事で、特に此のペラ州の錫鑛業の盛んなるは一驚せざるを得ない。ペラとは馬來語にて銀の意、銀と錫と間違へてペラ州になつて終つたと云ふことである。錫は護謨に次ぐ馬來の一大財源である。而して馬來半島に於ける支那人長者は多く錫成金であり

馬來半島の錫は世界産額の半ばを占めると言はれてゐる。
一保に遊ぶこと三日、卅一日午前一時十二分と云ふ眞夜中に、飯島先生に一保驛迄見送られ、夜の靜けさを一保の見納めとして三度馬來車中の人となり、セランゴール州のコーランポー市へと向つた。玆に飯島先生の御厚意を感謝し併せて先生の幸福を祈る。先生は大阪の人で仲々の淡泊家、所謂磊々落々の肌合である。先生の僞らざる前半生の告白には深く心を動かされた。又東洋民族としての支那商人に就て感想を陳べられたのも記憶してゐるが、玆には略す。
一保・コーランポー間、タパ・ロード驛からテロクアンソンに通ずる十八哩の支線があり、嘗て此支線で汽車が象群の襲撃を受けて顚覆した有名な話がある事を思ひ出して往時を偲ばせられた。先に太平の博物館に保存してあると云つたのは、この象群の遺骸である。

（五）馬來聯邦州の政治の都

明くれば卅一日朝六時、丁度熱帶圏内に在る太陽が鬱蒼たるゴム山から少し顏を出した時、セランゴール州のコーランポー市に着いた。此處は馬來聯邦の首府で、馬來政治の中心地である。馬來鐵道の總元締の居る處丈けあつて、アラビヤ・ルネツサン式の白亞の建物が堂々聳え立つて、首府の大玄關たる中央驛の名を恥かしめぬ。此の吉隆坡（コーラムポー）はカラン河口の流れに沿うた新開の都市で、四十年の昔迄は沼澤の中に在る一村邑に過ぎなかつたと言ふ。聞いただけでも、西洋映畫スパローで見た沼地を思ひ出させる樣な恐ろしい沼地は、今や馬來の首府となり、西洋文明が立派に築かれ、ロンボー（「牛」の意。訛つてランポーとなつたと云ふ）の沈んだと云はれてゐる地一帶には、大廈高樓が立ち竝んで、遊子の眼を驚かす。
市の人口は十萬餘。セ州の邦人は約四百名で、その大半はこの吉隆坡市にをり、醫院二、齒科醫四、寫眞館二、雜貨商店四、ゴム園主一、洗衣店一、染色店一、等である。旅館では日の丸・鹿島・ハルナの三ホテルが主なもので、余等二名は日本人會長佐竹氏の紹介でハルナに陣取つた。ところが、ここの邦人の半ばは女――而も例の南京蟲の消費者で、モス友染のサロン姿でペタリン街の夜を鳴らしてゐる。何處にも邦人のゐる處には斯かる婦人が發展してゐる事は、是が非でも見逃がす事は出來ない。尙此處で、自然を應用した大公園、博物館、半島第一と稱せらるゝ農事試驗場及び鐘乳洞を見る。特にこゝの博物館には澤山の土器が見出されるが、此の土器たるや、印度より傳はつたものとかで、卽ち、當地方本來の文明は、印度、アラビヤ文明の流れなる事を知らしめる。又此の博物館特有なのは幾千種類の胡蝶である。次に公園散歩中面白かつたのは、赤色のシヤツを着た土人がトプポニーの實つた木に猿にも劣らぬ早業で攀上つて、その實をぬすんでゐた事で、是も土人の特徵の一つかも知れない。

愈々八月一日、此の名だたるコーランボー市を辭し去らうとする朝、ホテルの主人に車夫を呼んで貰つたら、主人答へて曰く、今日は車挽一齊に總罷業してゐると。低級な彼等さへも如何に一致團結の精神に富んでゐるかはこの一事で了解される處で、是が南洋到る處に於て華僑が大勢力を占めてゐる一大原因である事が首肯させられる。若し一人でも働からうものなら、其の車は立ち所に叩き毀されるとのことだから氣持が好い。之を日本の勞働者諸士のそれに比して見たらどんなものだらう。右の樣な始末であつたので、重たいトランクを持ち乍ら驛迄歩いて行つたことは何よりの思出で、今に當時の模樣が忘れられない。

斯くして午前七時にコーランボーの都を後にし四度び馬來の汽車旅行を味ふことになつたが、もうすつかり馴れて、附近の馬來紳士にも、さては土人・支那人にも話し掛け、彼等の氣持を幾分知る事が出來る程、度胸も据つて來た。そして、彼等との會話が段々面白くなつて來た。

(六) ゴムの都

ネグリスミラン州のスレンバン市に着いたのは、其後二時間の後九時半頃で、直ちに例の人力車にて日本人會長朝永誠三氏を訪ねて敬意を表した。而して氏の御厚意によつて、スレンバンを中心として充分に見學することが出來た。

スレンバン市はシンガポールから鐵路二百哩を離れ、人口二萬。三十年來の新市街とて、街は奇麗で道幅廣く、吉隆坡程繁華ではないが、森の都と稱せられるだけに、落ち付いた感じの好い街である。此處は最初錦の都として開けたさうであるが、ゴム栽培の熾んになるに連れ、ゴムの都に早變りしたとの事で、此の州の經濟的生命は一にゴムにあると言はれてゐる。其の都スレンバン市はゴムに圍まれた中にあり、サヽヤカな而かも根强い發展力を持つてゐる街である事が首肯される。

先づ朝永先生の御指圖で同社の内田氏に案内せられ、社の堂々たる最新式の自働車でポート・デクソンに遊ぶ。これは、スレンバンより廿四哩の處に在り、鐵道が通じてゐる。ス市より此港に貨物を運送し、此港より更に新嘉坡に運送するのである。約四十分自動車の中で吹き來る涼風を浴びて森の間を走ると、愈々此の港に着く。此の港は實に風光明媚で、海濱をドライブすれは、水は碧く、濱は白く、海は遠淺、誂へ向きの海水浴場である。レスト・ハウスもあつて、ス市の邦人は土曜から此處へ來て一泊し、日曜一杯思ふ存分生氣を養ふとの事である。尙此處には邦人のホテル一軒とモータカーの貸屋と例の怪しき家とがある。

時は午後の三時、稍空腹なるを幸ひ、馬來の有名なサツテーを味ふ。サツテーは本來ジヤバ名物の一だと云ふが、今は馬來半島の到る處の町々に此のサツテー賣を見出す事が出來る。之等の多くは爪哇人で、

屋臺を擔いで路傍に竝んでゐる。バタ〳〵と棕櫚の團扇で風を送つて炭火を煽り肉片を串にさして火にかければ、油は下に落ちて燃え上る。肉の種類は牛・水牛の筋肉・山羊・鷄等で、肉が燒ければ、サブといふ味噌のやうな旨い辛い味をつけた物の中に入れる。つけては燒き、つけては燒く。蓋し此の味付け味噌の味たるや食つた人でなければ到底判るまい。出來たてのホヤ〳〵に、スタ〳〵と生の胡瓜を切つてつけて呉れる。實際今に味ひ度い氣がして、考へただけでも垂涎三千尺となる。南洋情緒の一として忘れられぬ思出である。

思ふ存分サツテーを味ひ、繪のやうなディクソンの風光に名殘りを惜みつゝ、再び自動車にて、往きの道と反對に迂廻して、ゴム林を疾走すること四十哩、坦々たる道路なれば疲勞を感ずることなく、正に夕陽がゴム林に沈まんとする頃、ス市に着いた。まづ八雲ホテルに落ちつき、水浴に身を清め、夜は亦内田氏の案内で Guani Opera 見物、馬來獨特の尻振ダンス等に興を覺える。彼等俳優の使ふ言葉は高尙なるが故に却つて理解し易く感じた。

扨てスレンバン市の見學も終了したが、此の市の勢力は依然として支那人の占める處であるが、邦人の發展としても新嘉坡に次ぐ所ださうで、在留邦人は三百四十人許りある。スレンバンの成功者笠田翁は邦人ゴム栽培業者の創始者として知られた有名な人で・Toean besar（テウーアン ベサール）の稱號を受けてをられる。今は功なり名遂げて、故國長崎で餘生を送つてゐられるとの事で、その謦咳に接し、南洋開拓の苦節數十年の尊き經驗談を聞くを得ざりしは殘念至極であつた。其後を受けては、名聲共に輝く朝永氏が聯合馬來ゴム會社の社長の地位を占め、日本人會長としての重望を荷つてゐられる。副會長には、小岩井ドクトルあり、その他個人ゴム園主二、寫眞館二、醫院二、齒科醫二、自動車店三、飮食店二、そしてホテルに八雲館がある。ネ州日本人會は堂々たる建物を有し、而も、土地、建物共に日本人會の所有で、墓地も邦人のものがある。一體邦人の住する處には大抵墓地を有する事を玆に附記して置く。斯くしてこそ、邦人は始めて安心立命して眞の植民的發展を遂ぐることが出來よう、吾々も心强き限りであつた。

八月三日朝、スレンバン市を去るに當り、萬事に御厚情を盡された朝永先生始め一同の人々に謝意を表し、五たび馬來の汽車に乘りマラツカに向つた。スレンバン驛で巡査見たいな服裝をしてゐる印度人が、吾々の側に來て、吾々のトランクを見ては、プレツクサー〳〵と連呼するが、何の意味か了解出來ない。そこで、早速ポケツトに用意せる馬來語の辭書を開いて見れば「檢査」とある。成程と合點してトランクの蓋を開くと、臭氣鼻を突くと迄はならないまでも、汚れたシヤツ、猿股類が一杯に詰込んであるのを見て、直ぐとオーライ〳〵と頭を縱に振つたので、始めて安心した。之れは卽ち稅關吏で、彼の支那の釐金稅の如き制度が施行されてゐるのだ。其後、稅關吏の派出されてゐる所では、先づ日本の學生であることを告

げ、二十仙も握らせれば、唯々諾々とオーライを叫んで無難に通過させる事を知つた。然し吾々と同時に検査を受けた支那人は荷物の全部を開かれ頗る嚴重に調べを受けた。其の一例としては、鑵詰の五個の中一個を切り開かれてゐるのを見た。蓋し、支那人が亞片の密輸入を行ふのと、無一文で通過せんとするからである。

（七）歴史の都マラッカからゴム園生活まで

スレンバンを立ちて二時間を要せずしてタムピンに着く、タムピンより支線に乘り換へ、マラッカに着いたのは、丁度炎熱の太陽が頭の眞上にある時であつた。早速マラッカ日本人會長のドクトル彦坂氏の案内を受け、益泰旅館に憩ひ、支那料理で晝食を濟まし、直ちに歴史に富んだマラッカ市を見物した。

マラッカは英國の海峽植民地であるが、歴史に豊かな市は、一見古い都で、ゴタ〳〵して狹苦しく、綺麗でない。又道幅の狹いのにも直ぐ氣がつく。此處にオランダの植民政策と、英國の植民政策との對照が良く表はれてゐる。英國のは何處迄も積極的であり、オランダのは消極的である事が萬事に首肯される。かのマラッカ王朝が建てられてから八百年、王國の繁榮は西歐人の東漸に依つて破られた。葡・蘭・英の爭鬪の歴史は、マラッカ城跡を見ても偲ばれる。和蘭印度會社が建てた赤塗りの建物——マラッカの政廳は今でもその建物の中で仕事をしてゐる。赤い政廳、赤い教會、赤い時計臺——それはマラッカのシンボルとも言はるべきものである。而して其處に百年の歴史が刻まれてゐる。これが百年も前に和蘭人が建てたものかと思ふとマラッカに對する懷しさが一層募る。而してこの赤塗りを壞さぬ處に面白味があり、英國の偉さが想像される。掘出されたマラッカに謎のヒンヅー時代を思ひ起こし、市長ケ丘に上れば、そこにはフランシス・サビエルの遺蹟がある。ポルトガルの根城であつたと云ふが、今は城壁の一部を殘すのみ、古色蒼然、苔蒸して、そゞろに昔が偲ばれる。確かに「サビ(錆)キル」だと洒落たくなる。丘を下ればオールド・フォート・ゲートがある。

街の中にあるセント・フランシス・サビエル寺院に數百年來神の敎を說く教壇を拜し、そこからセント・ジヨンス丘に建つ古城趾を弔ひ、オランダ軍がモアの問題からモアの馬來人と合してマラッカを攻めた時、ジヨンス丘のフォートで葡軍が防いだと云ふ丘を走つて、海岸に出ると、ポルトガル人の殘した棧橋がある。今は三分の一に短くされたとかで、マラッカ人の涼み場になつてゐる。可成り遠く突出されてゐるが——遠淺のマラッカ港にはその大棧橋も用を爲さず、マラッカ港が古都然として一向に振はないのも海の關係であることが、旅行者の吾々にも判るのである。

街には支那人多く、彼等の如何にも昔風の家が、その儘軒を並べてゐる。マラッカの邦人は約五十名で

彦坂先生が日本人會々長を務め、日本醫院を經營してゐられる。その他齒科醫二、寫眞館二、醫院一、商店一、他にホテルともつかない怪しい料理店見たいなのが一軒あつた。

斯くて其の日の夕方マラツカ見物を終へ、彦坂先生宅に呼ばれ晩餐の馳走に預り、先生の御厚意を謝し併せてその御健康を祈り、マラツカに最後の名殘りを惜んで、夜八時に自動車一臺を雇ひ切つてタムピンへと向つた。陽は既にマラツカの海に沈み、自動車は支那人街の臭氣を衝いて疾走する。何時しか街の燈火も見えなくなり、護謨の密林に入り、曲り曲つた國道を闇に縫うて行く。馬來の夜の風は寒い程で、乘心地はいとも良い。闇の密林を貫く坦々たる途を快速力を以て走ること約一時間、遙か前方に眞紅に燃えた焔が動いてゐるのを見る。初は山賊の群れではないかと胸騒ぎして、眠りこくつてゐた一人の友とひそかに語り合つたが、土人運轉手は平然と相變らずの快速力を以て走らしてゐる。愈々近づいて見ると、何だ、半裸體の土人が一群れ、揃ひも揃つて各自長さ一間餘りの松明を點し、それを振り翳して道路を眞晝のやうに照らしつゝ、土人部落へと進んで行く光景であつたので、ほつと胸を撫で下ろした。といふのも、土人の風習をよく知らなかつた爲、これは猛獸の不意の襲撃を防ぐ爲である事が、突差に思ひ出されなかつた爲である。

其後三十分餘りにしてタムピン驛へ着いた。此驛は日本の田舍の十五年程以前を思ひ浮ばせる薄暗いランプで構内をやつと明るくしてゐた。待つこと二時間にして漸く切符を賣り始めたが、釣錢が要るのでてんで賣つて呉れないので困つてゐると、前にゐた馬來の一青年が同じく二等の切符を求めてゐたが、「何處迄行くか」と聞いたのでシンガポールと云ふと、「私も」と答へ、親切にも釣錢の要らぬやうに自分の金で兩替して、都合好く切符を求めて呉れた。そして「馬來人を好むか」の「宗教は何か」のと色々質問するので「大變好きだ」と言ふと、「馬來人は一般的にレズィーである」と云つた。「然し其處に彼等の天分があり、レズィーであればある程好きだ」と云ふと、彼は非常に喜び、直ちに堅い〳〵握手をなし、「東亞の提携團結は吾々青年が覺醒し互に意志の疎通を計らねばならぬ」と實に堂々たる言をはいたのである。素より彼は政府設立のハイスクールを出た理解力ある馬來の有爲の青年であつた。そして三日間の休暇を利用し、シンガポールの文化に浸るために出掛けて行くのだとの事であつた。

斯くて夜の十一時、シンガポール行の列車に六度び乘つて、夜の汽車旅行をやる。車中は各國の人種で隨分混雜してゐたが、段々夜が更くるに從つて車中も空いて來たのでやつと淡い夢路にうと〳〵と這入ることができた。愈々目が覺めて窓外を眺めると、太陽は既に馬來の東天に高く現はれ、熱帶の地上を彌が上にも照りつけてゐるやうであつたが、車中は涼風に滿たされて爽快此の上もなかつた。軈てジョホール州のジョホール・バルー驛に着いたのが七時で、此の間セレタと言ふ所に赤塗の大重油タンクが三十も並

んでゐるのが車窓から右側に見えた。之れは英國の極東海軍の動力貯藏所丈けに素張らしいものであつた。後日馬來に永く住んでゐる本邦人曰く「あのタンクの如きは日本の爲に拵へてゐるやうなものだ」と。流石に大日本民族の膽玉を表現してゐる言の樣に思はれ、面白くもあり心强くもあつた。

ジョホール・バァーから一時間を要せずして、シンガポールに着いた。然し生憎當日は日曜で、翌日も亦休日であるとの事であつたから、新嘉坡見學も會社・大商店の閉鎖で駄目と諦め、ジョホールの邦人ゴム園見學に出掛ける事に變更した。先づ一臺の自動車を都ホテルの主人から世話して貰ひ、ジョホール州のコタテンギに在る眞植農園へと一路五十一哩を快走し、マワイゴム農園の支配人山村四郎先生を訪れ、同社宅のバルコニーに案内され、直ちに來意を告げたが、一通り挨拶が濟むと、其夜は同支配人宅に御厄介になることになり、其後約二週間マワイ農園の食客として、ゴム山生活を充分に味はつた。此の間山村支配人御夫婦と同社內の仙北・阿蘇兩氏の厚い〳〵待遇に甘え非常なる御世話に預つたことを深く玆に感謝致す次第である。

顧みれば二週間のゴム園生活は、實に愉快であつた。而して山村支配人始め一同揃つて猛獸狩を二、三回試みジャングルの中を跋渉したが、幸か不幸か一度も鹿や野豚に襲はれず、又、狩り獲た物もなくて濟んだ。熱帶森林の曉より夕日に至る迄は一入の情趣がある。森林の彼方、自然を樂む小鳥の囀りを四邊の靜寂の中に聞くこともあれば、夜の寂寞を破つて來る銃聲の如き爆竹の音に夢を破られることもあり、時には又、月明の夜、國を距る千里の異境に組織的に植民の實を擧げんと努力してゐる勇敢な邦人を思うては轉た感慨無量のこともあつた。又此の間に、園內に働いてゐる馬來土人・爪哇人・支那人等の實際のゴム園生活を見て、彼等土人達の風俗習慣等も審かに調査することを得たのは實に幸であつた。然し紙數に限りあるを以て玆には畧し、最後に土人の風習に就て簡單に其の一部を記す事にするが、兎に角彼等の生活は、呑氣で、悠長で、最も自然的で、時には却つて彼等の生活が羨ましくさへ感じた。無知は是れ幸福の至上であるかも知れぬ。猶、此のマワイ農園を根城にして、コタティンギーやジョホール・バルーからジョホール河の日本村等も見學した。

（八）　ジョホール・バルー

八月六日朝、四時半と云ふに仙北氏に起こされ、忽惶として出發準備をなし、一杯のコーヒーに元氣をつけ、昨夜來から呼んであつた自動車に乘り、暗のゴム林を貫いてジョホールの國道に出で、一時間七十哩の快速力を以てジョホール・バルー驛にと驀進した。黎明の風は冷たく、喉にハンカチを捲きつけて風を避ける位で、熱帶の地に在るを忘れしめられた。六時頃に急激に明るい世界に變じたのも面白い。六時

廿分に驛に着いてステーション・レストルームで一杯のウイスキーに元氣をつけてゐると、軈て、一行の大西・伊藤兩君を乘せた列車が着いた。兩君はスマトラ見學を了へ、ペナンの對岸プライより一途に鐵路でシンガポールへ行かうとする途中であつた。流石に强壯の兩君も數日の旅行で大分疲勞が顏に表はれてゐた。伊藤君は單獨自動車にてジョホールのゴム園に向つた。大西君を加へた吾等一行は、直ちにジョホール州の首府ジョホール・バルー見學を始める。

此のジョホールは新嘉坡と陸橋を以て續き、馬來唯一の王國にて、回敎の都である。街には商業的繁榮を見ず、大規模の都市でもなく、さゝやかな一小邑に過ぎないけれども、何處となく首府らしい落付が見えた。王宮と回々敎寺院は都バルーの誇る二つの名所で、實に壯觀である。そして、湖のやうな海峽の眺めはすばらしい風韻を添へてゐる。殘念だつたのは王宮に詣でて國王殿下サルタン・イブラヒムに拜謁するの機を逸したことであつた。邦人の有力者に案內して貰へば拜謁出來るとの事であつたのに。

ジョホール・バルーの人口は一萬五千人、邦人は五十名にして、邦商の主なるものは、寫眞館二、商會・商店各一、旅館一など。日本人會の會長は野村勇氏。同先生には親しく面談するを得て、特に南洋に於ける邦人の活動狀態等を聞くを得た。抑々此のジョホールは、王國とは名のみにして、實權は英國のアスィスタント・レジデントに委任されてある故、保護國と同樣である。人種風俗我が大和民族の先祖と大差なきを目擊しては、寸時たりとも是を橫暴なる白人の蹂躪下に置くのは、實に吾等兄弟の見るに忍びざる處であると思つた。が、是を如何にせんやである。噫！

午後三時頃都バルーの一巡を終へた時、實に壯烈なるスコールに出會つたので、マワイ農園で知合になつてゐた邦人請負師の竹田頭梁宅を訪れ、雨宿りをなした。夫人が蓄音機を持出して、珍らしくも日本もののレコードを聞かされたのには、一種の懷しさに胸を躍らした。四時頃雨は止んで空さへ晴れ渡つたので再び自動車にてジョホールの街を後にし、途中英人經營の二萬英反連續のゴム園を見學してマワイ農園に着いたのは、夕闇の頃であつた。其の夜は又大西君が新しく加つたので、山村支配人及び一同の話は益益振ふ。

（九）ジョホール河の邦人ゴム園

ジョホール・バルーから一路コタティンギーへ、二十五哩、自動車は一時間の半ばにて着く。コタティンギーは柔佛の一村邑である。鳳梨園・護謨園の沿道廿五哩を過ぎた處に一條の濁つた河がある。之に古風古色の橋が架せられ、それを渡ればコタティンギーの町である。新嘉坡からの汽船は此處迄溯つて來る。そして、毎日一回此の町が終始の基點になつてゐる。コタティンギー州は柔佛國の南東を占めた一區劃、

コタティンギー市は地方廳所在地にして、此地方の都である。ジョホール河の抱く平野の富源は此處に集り、緑濃き護謨樹の茂りは町の人出と繁榮を保たしめてゐる。町の近傍四哩の處に速水護謨園あり、その茂り續きに吾等が二週間のゴム園生活に興がつた眞植ゴム園がある。何れも自動車が園内に通じ、町を近傍に控へて、實に便利な地を占めてゐる。

八月七日、主人山村先生の引率で、大西・増田兩君及び余は、先輩遠藤桃三郎氏が支配人たるナムヘン護謨園、其他ジョホール河沿岸のゴム園を見學した。朝七時に園を自動車にて立ち、コタティンギーに出で此處より發する小汽船にてジョホール河を下る。河は大して廣くないが兩岸には紅樹所謂マングローブ樹が生ひ繁り、且つゴム樹の緑を以て蔽はれてゐる。航する事暫くにして船の進む左岸に、筏を浮べたやうなものを見受けた。之が馬來半島に有名な鰐公で、長さは優に四間位に見えた。初めて河を航する人が此鰐公を見ると言ふ事は、非常に縁起の好いことで福運者であると言ふ事を山村氏が話されたので、喜び且つ笑ひ乍ら鰐公の姿が見えなくなる迄凝視した。船の進むに連れ向ふからはモータボートがけたゝましい音を立て幾艘も走つて來る。河は愈々長蛇のうねるが如く、曲波重疊の流れを下ること一時間にして南興殖産株式會社、即ち藤田組の護謨園に着いた。

赤いトタン屋根が幾つも並んで工場作業の音が頻りに聞えて來る。一萬英反餘りの大園で大規模に經營され、科學的に行はれてゐる。此の山は賣るとか賣らんとかで有名な評判の高い山である。折角邦人の發展の基礎を築き上げた土地を賣拔くとは至極殘念である。往年猛獸焦熱と鬪ひ幾多の犠牲者を出し漸く涼風そよぐ若葉のゴム園に成し上げた事を思へば、邦人植民發展の爲、眼前の利益を犠牲にして、何處迄も之を維持しなければならんと思ふ。我が海外發展の立場から言へば、今日馬來に於て根底ある勢力はと見れば護謨園あるのみ。一園賣ればそれ丈衰へる。資本家の功利心の衝動に依つてのみ動かされる海外發展は駄目である。植民的に何等の對策なく、好況の門前に溺れんとする邦人資本家の反省を切望して止まざる次第である。それはさうとして先輩遠藤支配人は生憎新嘉坡出張で留守であつたので、次席の照屋全昌氏や江村氏等の方々よりゴム園の組織並に工場の模様など詳細に說明して下された。

お晝に食事の御馳走に預り再び舟にてコタティンギーへ戻らんとしたが、丁度同園に來合はせてゐられた菅原園の佐藤支配人にすゝめられ同園を見學する事になつたので、午后一時過一同紀念の寫眞を撮り、別れを告げて菅原園へと歩を運ぶ。同園は藤田園に續いてゐるのだ。ゴム林の間を歩くこと一時間、愈々菅原園に着いた。着くと支配人佐藤氏は自ら何くれと吾々を歡待され、引率者の山村氏が隨分歸へることを申出でられたが、主人佐藤氏は仲々歸さないので、遂に夕食まで呼ばれて戻ることになつた。山中のウドンに鷄の丸燒に舌皷を打ち鳴らし滿腹して歸途に着いたのは、もう夕闇であつた。虎や豹の出沒しさうな

山中を歩くこと約卅分餘りにして自動車が迎へに來たので、直ちに車中の人となり、山中を下りてコタティンギー町に出で、マワイ園に着いたのは夜の八時であつた。例の支配人佐藤氏は、我々の辭するに當り、態々自動車を呼ばせに使を走らし且つ自動車の走り得る道まで、自ら銃を肩にし部下の石田氏にランプを提げさして心から吾々を見送られた。同氏は一見奔放なやうに見えるが、仲々の溫厚な人物である。

尙時日の都合上、所謂日本村をなしてゐるジョホール河沿岸にある、秋田ゴム園・南洋護謨拓殖・トロンスガイ南亞公司王國・三五公司王國・巴盤河の熱帶產業會社等は、殘念乍ら見學する事は出來なかつた。又邦人の肩身の廣いと迄云はれてゐるバトパハの鐵鑛所や、バトパハ河の平野に茫々盡きぬ護謨の若葉の眺めの事は、一行中の伊藤君の記事に讓る。

愈々十六日、永らく御世話に預つたマワイ農園の支配人山村御夫婦及び仙北・阿蘇兩君に滿腔の謝意を表し、懷かしのマワイ農園に別れを惜み、新嘉坡に出發する事になつた。御親切にも其日山村氏は遠路態態新嘉坡迄吾々を御見送り下され、別れの最後の一夜を共に東洋ホテルに送られたのであつた。而して余等は、馬來半島最後の見學を新嘉坡に三日間費したのであつた。

（一〇）シンガポール雜觀

人口約五十萬の大都市シンガポールは、東西廿七哩、南北十四哩、周圍六十六哩、面積二百十七平方哩の少島。英國皇領海峽植民地の一つで、シンガポール市が總督の所在地である。かの偉大なサー・スタンフォード・ラフルスが、自由をモツトーとして百年の大計を立てた處丈けあつて、世界の人種が雜然として住してゐながら、整然と融合されて、非常なる殷盛を極めてゐる。それは既に、最初シンガポール上陸の際印象づけられた處である。人口五十萬の中支那人が卅四萬、馬來人が六萬二千、印度人が三萬四千、歐洲人六千、歐亞混血兒五千、日本人約四千許りであると言ふ一事でも實に混沌とした人種展覽の街上である事が想像されよう。

道路はアスファルトで固め、坦々として、何處迄行つても立派なものである。此の奇麗な道路は、ガバーメントと市役所とが協力して、惜し氣なく費用を投じてゐるとの事で、面白いことには、馬來の土人や印度のタミール族と稱する黑ん坊が赤の橫卷をして、然かも炎暑に跣足で、呑氣に每日此の道路修繕をやつてゐる。一體彼等には暑さがあるのかと思ふ程だが、矢張り步行の際はなる丈け蔭を步くのを見る。肌の黑いのは椰子の油をつけて一層黑くすると云ふ。何分、黑い光澤のある程美男子だと云ふのだから。而してこれ等の仲間は、日給が高々五、六拾仙位であるが、生活程度が低いから、日給拾五弗位で、五弗は殘すさうである。偉いものだと言つて良い。又、支那人の勞働に對する忍耐心の强い事と、經濟生活に妙

を得てゐることは、云ふ迄もないが感心の極みで、邦人の學ぶ能はざる處である。新嘉坡の町を通行して氣持の良いのは、交通巡査の手際好い指圖振りで、行政警察の巧妙さが全く吾々旅行者にも直ぐ判る。電車は主に無軌道で縦横に走つてゐるが、一寸の外出は大抵人力車で用が足せる。殊に街に馴れぬ者には一番便利である。この人力車は九千臺以上あつて、一哩十五錢一時間六十錢位で走るので、吾々も外出する時は大概車を雇つたものだつた。又安い辻自動車が輻輳してゐる外に、五千臺以上の自用自動車及び貸自動車がひつきりなしに動いてゐる。

十六日の夕食後は、山村氏に連れられて、邦人一流のホテルの並んでゐる夕刻の海岸通りから殷盛を盡してゐる日本人街を徘徊した。翌日は先づビクトリア街にある言論の雄南洋日々新聞社を訪れ社長古藤氏に會ひ、色々と南洋に就ての御高見を聞き、且つ余等が十九日愈々南洋星島を北野丸で出帆歸國の途につく事を挨拶し、次にハイ街の十字角にある日本商品陳列館に到り、同館發行の書類數冊を小出氏より戴き、歸途ウォタール街に邦人兒童に國民教育を授けてゐる立派な日本小學校を訪問して、中央路にある東洋ホテルに歸つたのは、既に夕方であつた。尚お晝には山村氏と最後の食卓を共にし、態々博物館迄御見送りをして戴いた上、同氏の御厚意を深謝して別れを告げたのであつた。

十八日はシンガポール滯在の最終の日であつた。お晝には先輩遠藤桃三郎氏の招待に預り、ジョンリットルの白人經營のデパートメント・ストアーの大食堂で、別れの御馳走攻めにあつた。同じく先輩で南洋倉庫會社に在勤中の矢田氏も見えて非常に賑はつた。同氏は仲々快活な人で最初の挨拶が「君が南洋方面旅行に就ての調査事項は何々か」との問であつたので、余は

一、南洋(新嘉坡又はスーラバヤ)を中心としたる交通運輸。
二、拓植・栽培(農業方面)、ゴム・椰子其の他熱帶有用植物。
三、南洋に於ける貿易狀態。
四、工業・鑛業方面(護謨工場・鑵詰工場・錫・鐵鑛等)。
五、熱帶地に於ける兒童教育。
六、在留邦人狀況。
七、英國・和蘭・植民地行政。
八、住民の生活狀態。
九、南洋に於ける勞働者及び勞働爭議(支那人・印度人・馬來人・爪哇人・婦人)。

等にて、特に自己の好奇心より(五)(六)の問題に重きを置いてゐます――と答へた。これについての御話は玆には略す。

斯くして其の日の夜、東洋ホテルの主人に、東洋一の埠頭に横づけになつてゐる北野丸迄自動車で見送られ、星の港にオサラバを告げ、翌日曉方に船は日本に向け出帆したのであつた。星の港とはシンガポールの一名にして、晴れた夜に郊外から港を望めば天に輝く星と商埠に泊る幾百の船から照される燈火とが何れとも見別けのつかぬ美しき眺めに、さる支那の詩人が斯く名づけたものださうである。（紙數の制限を越えたのでシンガポールの邦商や土人の風習、馬來の產業及貿易等は之を略す。尙研究項目の發表は他日に讓る）

（一一）最後に

要之今回の旅行に依つて得たる有形無形の效果は大なるものであつた。玆には只旅行中の南洋に對する所感の一部を記して筆を擱くことにする。

常夏の南洋は生活所謂衣食住に、將又凡てに簡易である。限りない贅澤な生活は結局面倒であることが熟々考へさせられる。生活の簡易に餘りに殺風景の感なきに非ざれど、自然は實に豊かな情趣を與へて吳れる。月下の常夏の地に逍遙する人があれば、誰しもその美觀に打たれるであらう。椰子園に冴える月、或は濱の名月——その麗しい月下に印度人苦力は椰子酒を飲んで踊る。馬來人はジョゲに狂ふ。月の夜ジョゲの太鼓の音をたえだえに聞くと、心も身も悠々たる自然に吸ひ寄せられる。勞働者は晝の疲れを忘れて鼻唄混りに椰子の林に這入つて行く。支那人の苦力は胡弓を彈いて浮かれる。喘ぐ生活の中にも自然の情趣には血が湧き返る。常夏の椰子と月、それは彼等の生活から離すことの出來ない美しい寶玉である。白人は夕刻のドライブに、夜のダンスに樂しむ。青樓を訪うて三絃の音に陶醉するのは日本人の趣味であるが一杯の美酒に名月を嘯く情趣も又別なる哉である。然し一方智的慾望を衝動せしめるには餘りに智的刺戟がないかも知れぬが、世界交通の線上にあるを以て決して大勢に遲ることはない。

次に南洋の土人・印度人は吾々邦人に非常な好感を持つてゐることが何處へ行つても判る。又、到る處に牢固として抜く可からざる地盤を有する支那人と相提携して進むことは南洋發展者に最も肝要なることである。

南洋の諸島を巡りて

拓殖大學　大西利作

門司——上海——香港——新嘉坡——彼南——メダン——彼南——コーランボ——新嘉坡——バタビ

ヤ――スラバヤ――マカツサル――パリクパパン――香港――門司

今夏亞細亞學生會海外旅行員の一人として、七、八、九の三ヶ月約八十日間、馬來半島、スマトラ、ジャバ、セレベス、ボルネオの諸島を巡り、學生として見た事及び聞いた事を、記憶をたどり、拙き筆乍ら書き並べる。今後南洋方面の旅行者又は視察者の御參考にでも一寸役立てば、幸ひ之れに過ぎぬ。馬來半島の方面は他に書く人も有るから、余はスマトラ島より書き始める。

一

彼南にて一行の島田・增田の兩君と別れ、愈々二十七日午後三時、スマトラ行の汽船コオパ號に乘込む。船は五百噸足らずの小なもので、這麼小船で十五時間も揺られるのかと思へば、聊か心細く感ぜられた。而し幸にも船の二等客は、同行の伊藤君及び早稻田大學の金尾君と、今一人日本橋の商人の四人丈で、他國人は交らないので、外國船の如き感じがせず、我國の船の如く思はれた。

船が小さな上に、彼南からスマトラ迄の間は、波高く荒れて必ず醉ふとの事を聞かされ、內心秘かに心配して居たら、案の狀夕食の折は、食卓に附いても一物も咽喉を通らず、遂に食はずの儘ベツドに入り、好きな煙草も吸はず、早くスマトラに着く事のみを考へる。

翌朝七時半頃ボーイに朝食だと起され、スマトラ島が見えると聞き、昨夜來の頭の重苦しいのも打ち忘れ、洗面もソコ〳〵に甲板に飛出せば、海水は濁りて褐色と變り、南方遙かにスマトラ島の橫はるのが見える。急に元氣が出て、朝食は何んの苦も無く腹に納まり、昨夜の殘りが今欲しい樣に思はれる。八時過ぎ再び甲板に出づれば、島は目前に迫り、船はブラワン河の口に入らんとしてゐる。河流流れに沿うて這入れば兩岸次第に狹く、ニツパ椰子は水中より生茂り、風物益々趣を加へて來る。河流は餘り急では無く、船は左の岸に寄り或は右の岸に近づき、徐々として進行を續け、九時近くブラワンデリーの棧橋に橫付になる。船客一同は一等のサルンに呼ばれたが、我々は檢閱も極く簡單に濟み、往復切符を買求めし故、入國稅百盾も取られず上陸を許され、乘船コオパ號を捨てゝスマトラ島に一步を踏む。稅關も難無く通り金尾君の好意に依り、此處からメダン迄自動車で送られる。走る事約三十分土人の村落や椰子の畑を通り拔け、拾時頃メダンに到着、大和ホテルに入る。

二

メダンはスマトラ東岸の總督府のある島第一の都にして、人口約一萬四五千位內白人千人餘りあり、デリー洲のサルタンの邸宅及び煙草會社の主なる役所を以て名高く、煙草會社に依つて發展せし都である。今を去る事約六十年(一八六九年)煙草會社が設立さるゝ前は、淋しき一寒村にして誰も注目せざりしも、

煙草會社の設立と共に、鐵道も四方に敷かれ、道路も完成し、急速なる發展をして今日の域に達したのである。

現在此處に居る在留邦人は二百人餘でスマトラ島內で最も多く居る。メダンを中心としてスマトラ島に居る在留民は千人に達し、和蘭領の印度諸島總數四千人の中の四分の一を占む。其の中には我が植民史を飾る娘子軍に依り養はれし人々もあり、刻苦勉勵して今日の成功を致した人物も可成り多いらしい。重に邦人は雜貨小間物商・寫眞師・散髮屋を營みて生活を爲し、ホテルの經營をやり、農園に働く人も居る事は勿論である。

話は元に返へるが、我々は短時日に多く廣く見聞せんと欲する者なる故、宿に入るや休む暇も惜しみ、身輕に裝ひ先づ林日本人會長を訪ひ、市中見學の要領を伺ひしに、幸にも店の一人を、我々の爲めに市中案內役として與へられた。第一にメダンの日本人小學校及び日本人協會を見る。小學校は植民地の事とて、規模も小さく設備の點も遺憾に思はれた所實に多いが、未來の南洋開拓者の卵連中が、熱心に我國語を勉强し、かたはら盛んに馬來語・和蘭語を習つてゐる。

林學校長から種々と植民地の敎育方法や、メダンの日本人協會の仕事、在留邦人の活動振等を聞き、辭して和蘭人の中學校に行く。校長ア・ファン・デルフェン氏は、心地好く迎へられ、自ら先頭に立ち學校中隈無く案內說明して下さつた。其の丁寧親切なる態度は我等に非常に有難く嬉しく感ぜられた。職員一同と紀念撮影をなし、禮を厚うして去り、今度はデリー洲のサルタンの邸宅に行く。其の構造は堂々として、成程昔の王の建物だと思はせる。庭は廣く一面芝生を以て綺麗に敷詰められ、正面及び側面の入口には、番兵嚴めしく立ち、此の建物より少し離れて、只今も十二人の寵妾の居る邸が並び、古の榮華を極めし時の豪奢な生活振りが想像される。其れより市中の賑な所を一廻りして、二時頃ホテルに歸り晝食を取る。丁度其の時金尾君が、コーラシンパンに居らるゝ姉さんの農園に、之から行かれると聞き、再び自動車に厄介になる樣に御願ひして、今日迄の旅行の疲勞に弱りし伊藤君をメダンに殘し、アチエ州の方へ向ふ。

三

一度我國を出で、他國を訪れる日本の旅客が、第一に綺麗に立派に感ずるのは、他國の道路の完備して居る事であらう。和蘭人は、植民地開發の第一階段として道路を敷くと云はれるが、其の道路の具合は實に至れり盡せりで、爪哇や其の他の大きな都會は勿論、スマトラの如き半開の地さへ、如何なる邊鄙な奥地でも、自動車の通る道路が立派に完成されてゐる。如何なる山道にでも汽鑵車の樣な形のローラが、盛んに煙を吐いて廻つてゐるのには驚く。其の手入は實に克く行屆いてゐる。我々を乘せた自動車は、其道路を滑るが如くに四十哩位の速力を出してメダン郊外の煙草の農園の平地を走つてゐる。

メダン近傍は煙草には最適地とせられ、其の煙草は世界第一の良質として名高く、同じスマトラ内にても只メダン附近のみの土地が煙草に適當して居り、一寸地を離れゝば同じ品質の煙草は出來ぬと云はれる程煙草には好適地なるを以て、其れを經營する和蘭人は、其の手入も嚴密にし、其の生産に力を注ぎ、價格の如きも、多く産出すれば之れを燒捨てゝ調節し、製造の方法は絶對秘密を守り、他國人の見學は餘程有力者の紹介狀でも持參せねば之を許さず、其種子なんかも、乞はれて人に與へる時には、其れを殺して發芽せぬものか、又は發芽しても生育し得ぬ不良の物を與へる由である。

其の名高き煙草の農園を過ぎれば、千古斧鉞の原始林である。巨樹・灌木・雜草が鬱蒼として蔽ひ重なり茂つてゐる。音する物は只我々を乘せて走つてゐる自動車の音斗り。晝尙薄暗く淋しい所である。此の山中には猿や鹿の類は勿論の事、野猪が群を成して棲み、豹が居り虎が居り大蛇が出で、時には大群を成す象に出會ふと云はれ、成程見るからに猛獸毒蛇の巢の樣に思はれる。白人は云ふに及ばず、土人すらも特別重大なる要件でもないならば、夜分は猛獸毒蛇の往來を恐れて、此の道を通らぬ由である。時には名も知らない綺麗な鳥が、自動車の爆音に驚いてか道を横ぎりて飛んで行くのが見受けられて、目の好い慰安である。

此の原始林の中をば或は登り、或は下り、時には鰐の棲むと云ふ河を横ぎりて、走る事約一時間半位にして、今は金持で羽振りをきかしてゐる元アチエ州のサルタンの居る村落に出で、久し振りで自動車は椰子の畑と護謨林の續く平地を走る。併し又十五分位にして再び森の中に入る。森の中にても所々惜しげも無く大木を切り倒し燒き拂つて、今尙煙りを吐いてゐる場所もある。偶〻大木が道路に切倒されてゐるのに出會ひ十分斗り待たされた。十分位は早い方で、運の惡い時は三十分も、其の木の取片附くまで待たさるゝ事がある相である。

メダンから約三時間半程走り、漸くコーラシンパンに到着し、日本人の雜貨店にて紅茶を御馳走になりつゝ暫くの間休み、ボルネオゴム會社からの迎への自動車に乘り換へ、コーラシンパンから二里位の地にある會社の事務所へ向ふ。

四

メダンからコーラシンパン迄約八十哩三時間半斗りの間に、南洋特有の驟雨に出會ふ事實に三回。驟雨は南洋に遊ぶ者の一度は必ず經驗する南洋名物である。

驟雨は實に男性的で、全く氣持の好い、自づと爽快の氣に打たるゝものである。日光赫々として滿天に漲り渡り、萬物は爲めに殘らず溶解されんかとも思はるゝ時、遙か天の一方より、白雲の一團飄然として雨を含んで飛來し、頭上を低く或は高く、其の將に通過せんとするや、幾千條の銀線を翠樹・地上に灑ぎ、

颯然として飛び去る。其の來るも早く去るも亦早く、再び太陽が輝いて晴れ渡るのである。

驟雨は南洋に旅する者、又は、常夏の地に生活を營つみゝ年月を送る者に取りては、何物にも代へ得ぬ有難き清涼劑であり、天の惠みし活素劑である。太陽その猛威を擅にして、燒き附く斗りの酷暑の折に、一度驟雨飛來せば、何處からともなく冷氣涌き出で、地上の生物爲めに悉く生氣附き、身も心も清くなり、其の涼味に醉うて、炎暑の苦しみも旅の疲勞も、何處にや有らんと云ひたいほど、塵埃と共に洗ひ去られ、其の時の氣持の好さは、口には述べ難く、筆にも充分表はす事が出來ない。誠に南洋ならでは、味ふ事の出來ない情緒である。

コーラシンパンを出でしは六時、旣に太陽は沒し、只薄赤き雲が西方の空に微かに見え、暮色邊りを蔽ひチラ〳〵と燈火の散在するゴム林の中を走る事約十五六分にしてボルネオ護謨會社の事務所に着いた。支配人長野藏造さんに迎へられ、突然の訪問を謝し且つ一夜の御邪魔を願ひし所、「サア好く來た、マンデイ(水浴)をやつて疲れを取つたら好からう」との氣輕な言葉に嬉しく思ひ、早速奥さんの差出された浴衣に着換へ下男の案内でマンデイを濟し部屋に歸れば食卓の中央にランプが置かれ、早や夕餉の用意が整へられてある。此の地方一體の農園は皆ランプで未だ電氣が行渡らぬ由である。ランプの光りで食卓に附けば、我が幼かりし時が想起され、何時とは無しに思は故郷に走り、父母兄弟の事が浮んで來る。

長野氏は大分の生れで、早大の出身、彼の地に渡りて十年に近く、南洋事情に精通され、熱帶植物に關しての造詣深く、今は會社のため國家のため盛に奮鬪を續けらるゝ溫厚篤實の紳士である。食を終り長野さん夫婦とスマトラの事情やら南洋一般の日本人の現狀及び爪哇土人其の他の種族の風俗習慣等を話してゐる時、當會社に勤務してゐる原田君入來り一段と興涌き南洋の事から日本の事と其れから〳〵と夜の更けるも知らず、十一時を打つ音に驚いて床に入る。

翌朝七時漸く起き庭に出づればゴム林からの涼風面を打ち、樹間には珍らしい鳥が盛んに囀り廻つてゐる。南洋の朝の景色は、實に氣持好い。ゴム林の間を覗けば、黑い皮膚に白いシャツを着、腰には大柄な縱橫の縞のサロンを卷き、頭にはトルコ帽を戴いた土人が、忙し相とも呑氣相とも何れとも分らぬ足取りでゴム樹の皮を切り廻つてゐる。

五

現今スマトラ島の農園に働く苦力・勞働者は、主として爪哇人の契約勞働者で之が全數の大部分を占め支那人・印度人は只僅かに存在せるのみである。彼等契約勞働者の日給は卅七錢から四十七錢迄位が多く朝は五時に起き夜は五時まで働く。其の中晝食の休一時間、其の間に三十分づつ二回の休憩で正味拾時間の勞働である。彼等土人はかゝる安價な賃銀の下に甘んじて勞働を續けてゐるのである。併し勞働者の中

に病氣にかゝるものあれば、其の費用は全部雇主之を負擔し、女子の如きも、姙娠すれば六ケ月の間は雇主が之を養ふ事になつてゐる。和蘭人は土人の善導に意を注ぎ、土人の貯蓄心に乏しく金少々殘れば其の日から働かず安逸に送らんとする惡癖を知り、土人をして働かしむべく富ましむ可からずの方法で、此の種の勞働者を盛んにしてゐる。

苦力とか勞働者とか云へば我々は直ちに支那人を思ひ起すが、蘭領東印度諸島にゐる支那人は、其の數百萬近くもあれども、苦力勞働者としての支那人は、スマトラ東海岸の農園に働く二萬九千强、及びバンカとビリトンの錫山に、各二萬一千强並びに一萬五千强、卽ち合計六萬五千强が其の大部分で、所々に散在するものを合しても、十萬に達せぬのである。支那人を農鑛業に於て苦力として使つても、彼等支那人は忽ちにして、自分達の移住部落を作り、結局は諸農園や鑛山に働く他の勞働者を相手とする食糧品や日用品・雜貨類の小賣店か、各地物產を仲買する商かを始め、兎にも角にも商業をやり出し、商業を以て身を立てんとする者が多く、支那人の忍耐心に强く貯蓄心盛んにして商業に巧みなる國民であると云ふ現象が、此の如き種類の勞働に於てすら、見受けらるゝのである。

蘭領東印度諸島に於ける支那人の大部分は商業を營み、其れも大商業に非ずして中商業を營み、好く商業上の道德を嚴守し、各地に渡りて連絡を取り、決して他を倒さんとするが如くいやしき內爭もなく、偶々不幸にして倒れんとする者があれば、皆集りて之を助け合ひ、かくて彼等支那人の一大勢力を構成し、蘭領東印度諸島の仲買業の殆んど全部を獨占してゐるのである。南洋に於ける支那人の意義のある所は支那人の大なるに非ずして群島到るところに歐人と相並び否他人の追從を許さぬ重大なる經濟上の地位を有し經濟的の活動を爲してゐる事である。故に群島到る所、如何なる寒村僻地にても苟も人の住んで居る所には、必ず支那人の日用品雜貨類の小店か、或は食糧品を並べた小店を見る。彼等支那人の隈なく行き渡れる事は、南洋旅行者の何人なるを問はず必ず一驚する所であらう。

勿論支那人中には南洋有數の大富豪も有り醫者・學校敎師・新聞記者等の智識階級もあり、大農園の所有者も居る事は多言を要せぬ所である。南洋に於ける支那人の事に關しては他に書く人もあり且つ多くは知られて居る故、此位にて御預けとする。

六

簡單なる食事を取りて後長野さんの御案內でゴム園一週と出掛ける。馬來半島のゴム林を見て、今此の地のゴム林を見るに、我々素人の目には、前者に比して土地も肥沃にして、其の手入も好く行屆き、木の成育も申分なく、綠葉に富んでゐる樣に思はれる。前者の木は橫の方に繁茂してゐるが、此地の木は上の方に繁茂して、見る者をして立派に發育してゐる樣に思はせる。併し後でマワイゴム園の支配人山村さん

から聞いた事だが、横に繁茂してゐる方が乳液も多く出で、其の性質も良いとの由だ。我々素人にはスマトラの方が樹の成長發育も好く生氣潑剌として居る様に思はれるけれども。

ゴム林の中を彼方此方と馳け廻り苦力小屋に一服し、作業場も見て、約二時間で事務所に引上げる。苦力小屋と云へば何だか不潔相に思はれるが、掃除萬端行届き、實にサツパリと綺麗であつて、我國女工の寄宿舍なんかより餘程居心地が好く思はれる。暫く滯在して農園生活を味ひたいと思つたが、即日メダンへ再び引返へし、伊藤君とブラスターギー及びトバコの方面を視察する豫定なるを以つて、名殘り惜しく思ひつゝも、十二時半原田さんに送られて、コーランシンパンから汽車でメダンへ引返す。

三十日今日はスマトラ島第一の健康地であるブラスターギーに行く日である。午前中はメダン市の殘りの場所を見物し、午后一時愈々乘合自動車でブラスターギーに向ふ。メダン市郊外の煙草の農園を過ぎれば自動車は早や山路にかゝる。山路とは云へど、我國の都會の惡道路に比すれば、其の善き事數等上である。アスフアルトにでも敷きつめられた道の如く思はれる。一時間斗りも走れば、冷氣自づと感ぜられ兩側に茂る巨木も熱帶の氣を失ひ溫帶の氣を帶び、メダン附近とは其の趣きが大分異なる。時には枝頭に野猿が戯はむれてゐるのが見えて、我々には珍らしく思はれた。

此の地方一帶に住む土人は、バタツクと云ひ着物は男女を問はず全部藍染の品を着け、女は頭に藍染の布で包んだ釜敷の様な形の帽子を被り、其の上に種々の物をのせて歩く有様は、ジャバや馬來半島の土人の一寸華美なる風を見た目には驚く。此のバタツク種族はボルネオ島のダイヤ種族と並び稱せられた慓悍なる蠻民にして、今日に至るも醬油や味噌の如き味附けを用ひる事なく、其の代りに獸物の血や、汚い話しだが、牛糞を煮た其の汁が用ひられてゐる由である。

四時過ぎ漸く目的地たるブラスターギーに着く。此處は先年我國實業界の重鎭藤山雷太氏が南洋視察の折、自分の活動の本據とせらるゝ豫定にて、土地を買はれた事に依り、既に日本に知られたる場所であるが、海拔五千八百尺の高原に位し、我が國の輕井澤の如く外人の別莊の在るのに名高い土地である。四方は奇峰を以て包まれ其の中には今尙盛んに煙を吐いてゐる噴火山在り、近くに風光明媚なるトバ湖をひかへ眺望絶佳、加ふるに天高く澄み渡り氣淸くと云ふ我國の九月下旬の氣候にして、保養地として申分ない立派なる仙境である。

淺田寫眞館の前で自動車を降り、其處に一休して身輕になり、此の仙境に根據を据ゑるスマトラ島内の野村農園を總括してゐる總支配人細田さんの山莊へ、林日本人會長の紹介の下に訪れる。

細田さんは、只今は事業擴張のため多忙なる故を以て、我々の爲めに話さるゝ暇をも惜しまるゝ様子にして、僅か十五分位の簡單なる質問應答にて、息のつまる様な感じの下に、早々として暇を乞はざるを得

ざりしは實に遺憾至極であつた。

再び淺田寫眞館に引返し、其處の世話にてファミリアホテルに入る。ホテルは英人經營にしてテーブルの上に我が菊の花の鉢植が置かれてあるのに、思はずアツ菊だと叫ばされた。

南洋特有の刺戟の強いライスカレーを、水の助けで漸く食ひ終り、招かるゝまゝに三度淺田寫眞館に遊びに行く。同家自慢のコーヒを御馳走になり、主人夫婦の南洋に來られての苦心談やバタック通の山中さんのバタック族の物語りやら、佐藤さんの渡南の動機やら、中井さんの日蘭貿易會社時代の逸話やら、其れから其れと話しが移り、益々興が涌いて來るので、時の經つのも打ち忘れ、十二時近くまで前記五人と話し合ひ、周章てゝホテルへ引返へして床に入る。

床に入れば急に寒いのに氣が附く。我慢して毛布に包まり、何時の間にか旅の疲れでトロ〱と三時間斗りも寢入つたが、冷氣愈々加はり骨迄も冷えるのに如何とも我慢出來無く、持參せる全衣服を身に着けても未だ足りず、昨夜バタック人より買求めた土人の手織の机掛を三枚腰に巻き着け、漸々にして暖を取る。

暑い所と敎へられ、暑さを覺悟して之に對して充分の決心で來た常夏の南洋で、寒さの爲めに苦しめられるとは、全く豫期せぬ事であるが、南洋旅行中寒さで苦しめられた事は、此のブラスターギーの一夜と、

後に世界一の活火山と云はれるボルモの噴火口を見に行つた時と、前後二回である。ブラスターギーは全財産を身につけて間に合はせたがボルモの時には全財産を身につけても未だ足らず夜が明けて太陽の輝く迄ブル〱と振ひ乍ら待たねばならなかつたのには驚いた。口から吐く息は白く見え、我國の十月の下旬の様である。實に南洋にも此の如き寒い場所も有るのだと今更ながら驚いた。併し南洋には暑い所斗りでなく此の如き寒い位の涼しい保養地も處々に散在し、邦人發展地としては、決して暑さに苦しめらるべき土地ではなく、愉快に事業の出來る好發展地であると云ふ事が益々深く感ぜられた。

七

明くれば今日も亦、上々の天氣である。

今日は此のブラスターギーに一週間一回の定期市の開かるゝ日である。其の故か朝早くから表の道は何んとなく人通りも多く賑かである。バタック駒と云ふ小さな馬に乘つて得意相に飛んで行く若者も有り、頭に籠を戴き種々と品物を入れて市場に急ぐ女も有り、牛車に山と積んで市場へ運ぶ者もあり、其の盛んな事が想像される。

九時過ぎ淺田の奥さんに誘はるゝまゝに、伊藤君と共に市場へ出掛ける。

市場に來て見ると實に多くの人出である。其の賑やかな有様は何んと云つたら好いやら判からん。始め

てかゝる市を見る我々には、實に珍らしい。凡ゆる職業の集りであり、凡ゆる商品の陳列場である。野菜類太物類は勿論米牛肉魚の類や、日用品雜貨類何一つとして無い物はない。芳香馥郁とした南洋の珍しい果實類の店は子供等の人氣を呼んでゐる。特に珍らしく見えたのは土人の醫者である。眼科醫らしいのが患者の目の邊りに、丸く紅ガラの如き粉を塗附けてゐる様は、あれで病が快くなるかと、不思議に思はれる。其の傍には不格恰な髯を生やした齒科醫が、自分の膝に女を枕さし、醫者然としてヤスリでギシ〳〵と齒を削つてゐる様は、南洋ならでは見られぬお醫者様である。(此のバタツクの習慣として、女が結婚する時には、齒を丸く根元迄削る事になつてゐる。)

此の地方の土人の醫者と云へば、前記の二つ位で、病氣は如何なる種類の物も熱病として片附け、他の病名は知らないと云ふ。醫術にかけては未だ幼稚なのである。

話しは一寸橫道へ入つたが此の市場は時の經つのに從ひ、益々人出が盛んになつて來る。附近の見物人や買物に來る人、遠くの地方から自動車で買込みに來る人々で、殆んど歩く事すら出來無い位の人の集りである。

薄黑い藍染の着物に、同じ色の帽子を被つた土人斗りの中を白衣のサツパリとした風をして男女仲好く手を引いてぶらつく若き外國人や、下女に籠を持たせて買物に來てゐる別莊の主婦らしい品好き中年增の和蘭人の女が、一際目立つて見える。

一寸見た所、彼等土人には、將來の希望も無く、此の世の煩悶も無く、一體浮世の苦勞や樂しみが有るのかと疑はれる位、皆一樣に揃つて呑氣相に世事には無關心の如く、見受けられるのである。彼等土人は氣候や土地の關係で豐富な物產に惠まれ、仕事に見放されると云ふが如き生活苦も無く、其の日〳〵が何の心配もなく樂に暮らされるのである。先天的に彼等土人は衣食住には事缺かぬ惠まれた人種なのである。

併し彼等土人と云へども同じく生きて居る人間である以上、やつぱり人生の春もあり秋も來るらしい。若い男女が只二人人込みを離れて物陰に秘と嬉し相に笑つて居るのもあり、怠惰男を次から次へと求めて本能の生活を送る淫賣婦も、彼方此方と徘徊してゐるし、又若い時代に鶯鳴かせた事もあるのを表徵するかの如く、耳に五寸以上もあるかと思はれる大きな銀の耳飾りを附けたお婆さんも來てゐる。殊更人目を引くのは、持つた器量が元で今は外人の妾となり、思はぬ出世で身に金銀や寶石をチラつかせ土人の視線を一身に集めて、得意相に歩く土人には一寸珍らしい顏形の整つた女のソゾロ歩きである。彼等土人の仲間では外人の妾にでもなり贅澤の出來るのが一番の出世で皆の羨望の的となるらしい。

此の市の開かるゝ日は平常何んの變化もない土人に取つては、復とない樂しい日らしい。附近の土人の部落から老も若きも集つて來るのであつて、午后二時頃迄は人々は集る斗りで少しも減らないのである。

豫期せぬバタツク人の市場見物に午前中を費やし、トバコ一週も遂に流れて了ひ、附近の土人部落の散策でブラスターギーを切上げる事に急に豫定を變更した。豫定を變更したが、メダンに歸へる乘合自動車が無くなつてゐるので、仕方なくメダンから市場へ買物に來た貨物自動車に、荷物と共に乘せて貰ふ様に賴み、漸くメダンへ日の暮れ方歸へる。

八

今夜は七月の晦で、外人經營の農園は、月の勘定日で明一日の公休日を控へた、最も樂しい夜である。今夜はメダンのホテルは、農園に働く外人の爲めに一杯になり、彼等のための踊り場飲み場となり、夜の明ける迄飲み續け踊り狂ふ、宿に取りては一月一回の儲け日である。

日本にはダンスが嚴しく規則で取締まられてゐる故、後日の參考迄に外人のダンスを見ては如何かとのことに、夜八時過ぎ生木さんの案内で、金尾君と伊藤君の四人連で、メダンの夜を散歩かた／＼ダンス見物に出掛ける。

メダンの夜は實に淋しい。スマトラ島第一の都とは云ふもの丶、其の靜な事は我國の田舍の町の様である。道歩く人にも餘り出會はず、只家の前に椅子を出して涼んでゐる土人の姿が目に付く位である。併し時々氣持好く目に入るのは、和蘭人夫婦がヴェランダの電燈の下の小卓に洋盃を置き、長椅子の上に體を伸ばし、樂しげに語りつ丶食後の涼を取つて居る傍に、子供が可愛い形の白衣をつけて、無邪氣に遊んでゐる一家睦まじ相な様子である。

やがてメダン第一のグランドホテルの前に來ると、此處斗りは淋しい靜かな町の只一つの陽氣な場所である(但し今夜に限つてかも知れん)。大きな廣庭の野天椅子は、酒酌み交はす外人で滿員である。仕方なく中に入れば、中も亦一杯で、殆んど坐る所がないと云ふ大賑ひである。漸く入口の角の方に空席を見出し、人並にビールを注文する。

此處に集まつてゐる人々は、皆云ひ交はしたかの様に浮かれた顏斗りで心配相なのが一つも見當らん。樂しい語らひに餘念の無い者もあり、嬉し相な笑ひに崩るゝ者もあり、金時の火事見舞と云ふ様な眞赤な顏して、テーブルを彼方此方とフラ／＼して廻つてゐる者もある。土人のボーイが其の間を、胸に番號をはつた赤い布を掛け、所々から起る注文の聲にキリ／＼廻ひをしてゐる。尙戸外からは、自動車やサドと云ふ馬車で乘込んで來る者が、三々五々と奧へ吸込まる丶様にして入つて行く。やがて奧から奏樂の音が聞えて來ると、ソロ／＼と氣の早い連中の數組が踊り始めたが、未だ餘り興が上らぬらしい。三度四度と音樂の變はるに連れ、其の度毎に愈々盛んになつてダンス場から溢れ出る位の有樣である。美しい綺麗な顏した女が品好く踊つてゐるのもあれば、どうして這麼に肥つたかと思はれる角力取以上にデブ／＼した

女が、自分の半分位の體の男と、手を取つて踊つてゐる。又頭の好い加減禿げた老人が、若い自分の子供の様な年の娘の手を取つて、踊つて居る。若い者も老いたのも肥つたのも痩せたのも色々の人々が、思ひ思ひに種々な格好で踊つてゐる。踊り疲れると、テーブルに歸つて飲み、又踊るのである。實に其の賑な有様は我國には見られぬ光景である。

次にメダンホテルへ廻つて見ると、此處も前に負けない盛況である。

遠く故國を離れ、不自由な植民地に來て、何の娯樂機關の設備も無い農園に、毎日〳〵單純な生活を續けてゐる彼等外人に取りては、月に一度相會し、盛んに飲み、盛んに踊る。此の一夜の享樂は、如何に愉快な事であり、如何に樂しい事であらう、無理も無い事と思ひつゝダッチワイフの待つ所へ戻る。

九

八月一日今日は愈々スマトラを去る日である。

南洋の地と人が非常に日本に似て居るとはよく人に聞き又本で讀むところであるが、自分は今スマトラを見、後にジャバを始め南洋各地を廻つて來て、特に其の感じを深くした。

スマトラ島の土人の建物は、我國の各地にある神社や寺の構造と全く同じである。家は地上から約四尺位の所に床をつけ、正面の眞中に登口があり、直ぐ四角なお寺の本堂かお宮の拜殿の様な大廣間になつて居り、次の間が兩方少しづつ狭く奥の方に續いて、神棚や佛を祭る所の様になつて居る所なんか、實によく似てゐて、我國の祖先は南洋から渡つて來て今日の日本を成したのでは無いかと思はれた。尙土人の部落に、我國の神社の祭日に能狂言をやる建物の様な構造の建物が、土人の祝日に踊る場所としてある點から見ても、又バタック人の藍染の方法なんか、家に數箇の藍を入れた瓶を並べ、次から次と布を入れて染める工合の、我國古來の唯一の染物たる藍染の方法と似て居る點から押しても、ジャバの田舍に竹林や水田が多く、其の間に藁葺の百姓家が散在してゐる有様を見ても、驚くほどの一致である。第一スマトラやジャバの土人は色こそ氣候の關係で黒いが、其の體や顔の格好が我々日本人に似て居る。思ふに必ず我國と深い關係があり、審べて見たら或は意外の結果があらうかと思はれた。此の事は南洋旅行中は勿論現在歸國して居ても尙考へらるゝ點である。

十

南洋旅行の事に關しては未だ多く書きたい事があるけれど、紙數に制限あれば之れ位に止め、後の機會に讓る事にする。

少し話しは違ふけれども南洋旅行中特に在留邦人の多くの人（我等が話したり世話になつたりした人々）から、歸國の上「皆に傳へて欲しい」との傳言故、一寸紙數の端に書き添へさして戴く。

我國の者が南洋と云へば、裸で素足の儘歩く、禮儀も知らず廉恥心も無い者斗り居る様に思つて、南洋視察とか南洋旅行とかに來る日本人の皆とは云はぬが、大部分の者は南洋を輕蔑し、自分等日常の注意も日頃の禮儀も缺き、一等國民の尊大振か後進國の野蠻振か分らぬ振舞をなし、諸外人は元より土人より反つて野蠻人に見られ、在留邦人が後で無形の大なる損害を受ける故、南洋に來る人々は今少し日常の事に關して注意をして欲しいとの事である。其の一例を擧げれば、

何年の視察團の時か知らんが、宿屋から浴衣の略服で夜散歩に出かけ、餘り長過ぎ時遲くれて宿に來たら、既に門を閉ぢられてあつた爲め、宿の人を呼び起すのが面倒なる故か、門を乘越へんとして上に登つた迄は好かつたが、如何した調子か足を滑べらし、下に落ち氣絶をして、一方ならぬ厄介を引起し、其れ以後日本人は泊めぬ事にして、近々二年前までは、誰一人日本人としては泊めなかつたと云ふ話もあり、又或宿屋が日本人は泊めぬ原因となつた話であるが、やはり我國の視察隊一行が宿せし時、寄つて話をするのに各室に與へられた椅子が定まつてゐるのを知つてか知らずにか、自分の室の椅子を取つて來る面倒さから、近くの外人の部屋に與へられた椅子を無斷拜借し、毛脛の見える位にテーブルの上に足をあげ、外人が困つて居ようが、見て笑つて居ようが、我不關焉の仕放題を爲し、二時から四時迄の午睡の時間も知らぬ高談高笑に、(外人は皆二時から四時迄午睡の習慣がある) 外人はいづれも、一方ならぬ迷惑を感じ、今後日本人を泊めるなら、我々一同宿を引拂ふとの强談判を主人に持込み、近々迄日本人一切お斷りになつて居たと云ふ。又、或者が風呂に入り、入口の戸を閉めず、入浴中通りがかりの下女や下男が、物珍しさにクス〳〵笑つたとかで腹を立て、自分が戸を閉めぬのを棚に上げ、此宿の躾が惡いと散々に主人を叱かつた爲めに、主人は相手は日本に相當の地位ある人で、且つお客の故、戸を閉めて下さればとも云へず、「土人でさへも水浴中は決して人前で腹から下は見せぬ習慣がある」と說明も出來ず、以後謹みますと答へた由である。

南洋の山奥に住む或特種の土人を除いては、洗濯女でも決して人前で腹から下は見せぬ事になつてゐる。未だ種々例もあるが、此等の事からして土人は褌を締めて居る例を取り彼等中で一番野蠻のボルネオのダイヤの如き者と思ひ、人の迷惑を意にせぬ點からは禮儀知らずの半開人とし、日本が時の强國ロシヤを破ぶつた强い偉い國と云ふて敬せられたのもだん〳〵無くなり、三大强國としての威嚴もきかず、一等國民としての信用も失はれ在留邦人が旅行するにも商賣をするにも輕蔑せられ、非常な目に見えぬ損失があるとの事である。

此等は只一寸した日常の注意心さへあれば足る事故、鄕に入つては鄕に從への例の如く、南洋に居る外人や土人の習慣や風俗位は、來る前に船中ででも一寸知つて來て欲しいとの事である。僅かな些細の事が

思はぬ失敗や豫期せぬ損害を伴ふもの故、今後南洋に行かるゝ人は、是非在留邦人の迷惑や損害にならん様に注意をして行かれん事を、切望して居らるゝ事を意に止めて置かれたい。（大正十五年十一月十五日）

ジャバに遊ぶ

明治大學　伊藤光雄

神戸——シンガポール——ピナン——ベロワンデリー（スマトラ）——ヌメダン（仝）—ピナン——コーランボー——ジョホール・バルー——シンガポール——バタビヤ（ジャバ）——バインドン——ガールート——ジョクジャカルタ——スマラン——シンガポール——神戸

バタビヤ

讀者諸君よ！　諸君はからりと晴れた風一つ無い赤道直下を、南へ向つて進路を採つて行く白塗りの船を想像して下さい。

未知の國ジャバへ云ひ知れぬ希望を抱き、胸のをどるのを禁じ得ないで元氣にデツキの上を歩いて居る二人の日本青年が居ります。和蘭の一大寶庫だとさへ云はれて居るジャバ、更に東洋に於ける樂園であると稱せられて居るジャバ、僕等は明日朝早くそれを見る事が出來るのだ!!　短い夏休みを利用して、今日は馬來半島明日はスマトラと、歩一歩、未知の國の大地に足跡を彫みつけて行く一學生には、見る物聞く物總て物めづらしからざるものは一つとしてありません。否、それ等の一つ一つが總て私共には貴い敎へとなるものであるといつても過言ではありますまい。丈の高い金髮のよく肥えたホーランドの紳士、斷髮したアメリカの女、英吉利人と印度人との混血兒、更紗で頭を卷いて居るジャバのボーイ、支那の紳士、同じくボーイ、それ等の人々の話し聲、步音の交錯!!　各々その國々のなまりの響き!!　國境を超越したとも思はれる各國民の存在を感じては、幾ら鈍感な私でも、成程自分は今迄狹い世界に生きてゐたのだなとつくづく思はれないこともありません。見渡す限り青々とした大海に漂ふ一隻の小さな舟は、かうした各々異なる人種を乘せて、靜かに走る。

×　　×　　×　　×　　×　　×

今朝は五時頃に眼がさめた。いつも聞くあのエンヂンの音がしない。舟は旣に碇りをおろして居る。私はいつの間にかバタビヤ（Batavia）の波止場に身をよせて居たのだ。スチュワードがキャビンの戸をたたき

ながら「オール、パッセンヂャース、フロム、シンガポーア (all passengers from singapore)……」と云ひながら旅券の検査を促して行く。あわたゞしい人の足音、今まで眠つて居た世界が急に目をさました様だ、水の上の社會に連結をもつて居たものが、再び陸との關係を結ばねばならない、ものの轉換期はあわただしい。

ねむい眼をこすりながらデッキに上る。舟はつかれた様に波止場に休んで居る。下では迎ひの人や客引き等でごつ　や返すやうにさわいで居る。まだパスポートの検査官が來ない以上ジャバの土地を前にしても直ぐとは上陸出來ない。面倒くさいと思つたが仕方がない。國から國に足を入れるには當然なこととは思ふ。あわたゞしい人間と人間が自ら造り出したのんきな御つとめだとあきらめざるを得ない。やがてでつぷり肥つた和蘭の役人が、シガーを口にしてやつて來る。土人の巡査がどやどやとついて來る。一通り検査が濟んでやつと一般の人が水門を開けた様にどつと流れて出る。お定りの様に手荷物を税關でしらべて貰つてからウェルトフレーデン (Weltevreden) にある日本人の旅館に身體を休ませた。

バタビヤは御承知の通りネーデルランドインディー(Nederland Indies) の中心地で首府であります。町は大體二つに分れて居て元のバタビヤ市と新しい町ウェルトフレーデンがあります。此の町は一寸見ると總てが公園化して居る様に思はれます。殊に新しい方の町はゆとりもあり清楚な感じを與へて呉れます。町の中央にはチリウォ運河が流れて居り、その運河を挾んで所謂ビジネス、オヒスが軒をならべて活氣を呈して居る。運河の兩側には階段があつて私共が丁度その側を通つた時などジャバ人が河の中で水浴をして居た。水は汚い、眞赤だ、まるで泥水の樣だ。その中で平氣で體を洗ひ洗濯をなし甚しいのは用便もするのだと聞かされて吃驚した。それに河の兩岸には市內一流のホテル等が並んで居てヴェランダには輕くシガーの紫煙をふかす客人を見受けるが、始めて此の土地を踏んだ者には妙な感じを與へないでもない。自然的生活を禮讃すべきか、將又文明の尖端をあざ笑ふべきかは私は問はない。然し少くとも征服者對被征服者、機械的生活對本能的生活の面目を見受けられる樣な氣もする。

一體に蘭領印度の地は本國が常に水に苦しめられて居る故か、水利の妙を得て居るのも一寸注意するに價すると思ふ。バタビヤは元來沼地で低床なる爲濕氣多く住ひに適して居らないので、新らしくウェルトフレーデンに居を移すに至つたと云はれて居る。町の中には電車の外輕便鐵道式の汽車が步き廻つて居る。和蘭人は大抵白の詰襟を着込んで居るが、一方土人は腰に更紗を卷きつけ、頭には、馬來半島でも見受けられるが、土耳古帽風の物をかむる者もあれば、更紗を巧みに卷きつけて居る者もある。一體に落着き拂つて步いて居る。惡く云へば活氣がないのかも知れない。

バタビヤに限らず一帶に南洋方面の如何なる町に行つても、少さな土人の子供が金錢をもて遊んで居るのを見受ける。所謂メンコ遊びのバクチ化したものであらう。それに生意氣な格好をしてスモーキングを

やらかす。之れは少くとも蘭領印度に於ける都市で度々目撃した所である。善いか惡いかの倫理的批判は下すまい。然し滅び行く民族の前衞としての少年等よ、君等は何も知らずに嬉々として遊んで居る。然し少くとも國家の安定性の確實な日本の青年の目から見れば恐ろしい。否！ 同情を禁ずるを得ない感がする。和蘭政府の放任的自滅策を呪ふべき乎、將又亞細亞民族の一員たるジャバ人の自覺を促すべき乎!!
それは私の言ふべき外にある。

バイテンツォルグ植物園を見る

バイテンツォルグと言へば、あゝ世界有數の植物園のある所かと思はない方はないと思ふ。私共は午前中一と通りバタビヤ市中を見て後朝食兼晝食を喫して、大枚二十ギルダーを出してタクシーに乘つた。約一時間半位美しい道路を走つて行くと目の前にサラクゲデイ山を仰ぐ事が出來る。自分は既に海拔九百尺位の高地に來て居るのだ。小學校か中學校の教科書でおぼろながら記憶の中にあるバイテンツォルグ!! 思出すと夢の様な氣もする。今現實に足跡を印する事の出來た自分は少くとも旅行者としての喜びを深く味ふ事が出來た。私は植物園として、今迄に小石川のそれを見たに過ぎない。ほこりだらけな東京の一隅に憐れにも貧弱に横つて居る植物園、見聞の狹い私には植物園は樹木を箱庭式にならべてあるものだとばかり思つて居た。然し、一度バイテンツォルグに歩を轉じて見れば、これが植物園かと思ふ位だ。清澄なる空氣生々とした植物、靜かな山中に在るバイテンツォルグの植物園を見よ、植物の種類は如何程あるかは知らない、植物學者ならぬ私には科目的分類上の興味は起らぬ。然し植物園らしき植物園としてバイテンツォルグを探る。園内の一部には蘭領印度總督の官邸がある。白塗りの壁が鬱蒼たる樹木に圍まれて、靜かに坐つて居る。一年の大半を此の地に送る總督あるを知つては、又感なきを得ない。

バイテンツォルグは人口約五萬位あると稱せられて居る。此處にも亦支那人の商舗を營む者を多く見受ける。成程支那人は物質的に根強く發展する國民であるとつくづく思つた。

限られたる時間を持つ我々には充分に園内を見る事が出來ないのは返す返すも殘念であつたが、案内の人に從つて一通り見物することにした。全面積百八十英斤(エーカー)あるといふ事だから、一々見學するには專門的知識の少さを嘆ずるのみに過ぎない。園内の池畔に東屋風の建物があつて、折柄の日曜に家族連れの人々が靜かにバンドの演奏に耳を傾けて居るのを見受けた。變態的都市のほこりだらけな公園の中で神經的な氣分で好い音樂を聞くよりどの位ましだか知れないと思つた。歸りがけに園の一隅にあるシンガポール建設者ラッフル氏の夫人の墓に詣で、記念に寫眞を寫して再び車中の人となつた。

三日間の船の疲れが出たものか眠むくなつたので居ねむりをしながらいつの間にかバタビヤ市中に戻つ

て來た。

言葉の解らないのは確かに不便なことだが時には反へつて旅の興を增すこともある。七月の始め神戸を去つて以來既に一ケ月餘の間をどうにかからにかして、異國を步き廻つたせいか旅慣れて來た樣な氣もする。馬來語の片言も不知不識に腦裡に刻みつけられて何か買物でもやつて見たくなる。その結果は土人等にツーアン(旦那樣の意、特に歐米人日本人に對する敬稱)ツーアン等と煽てられて飛んだ錢失ひをすることもあつた。宿屋のおやぢさんに切符を買つて貰つてバタビヤのステーションを出たのが正午過ぎだつた。車中で大西君とナシゴリーといふハム・ライス式の飯を採つて腹を肥やす。何を食つてもしつつこいものばかりだ。それに熱帶地方に生活して居る人は概して刺戟物を多量に攝る樣に思はれる。車中物賣りが煙草を賣りに來る。暫くすると果物菓子と引切りなしに何かしら賣りに來る。うるさくて晝寝も何も出來やしない。私共の乘つて居る汽車は既に高原を走つて居る。涼しいなと感じる位だ。窓からはバンドン高原が遙かさきに見えて來た。谷といふ谷、凡そ土地といふ土地には米田が切り開かれて居る。年に二回乃至三回の收獲がある相な。幸福な所だ。額に汗して年一回の收獲にも多少のある我々の國を思ひ出して勿體ない樣な氣がする。マルサスの人口論も今の所此處には不要だ。生れて勞して食ふの民と、生れて不勞して食ふの民との終局に於ける倫理的價値判斷はさておいて、少くとも人が安樂を追求するものとすれば、南洋の未開地方は人類の現實上のパラダイスであるかも知れない。

生れながらに自然にめぐまれたる人々よ、君等はめぐまれて居るが故にめぐまれないのだ。何處かで小利口な猿が果物をねらつて居る樣な氣がする。

「伊藤君!!」と呼ばれてくだらない夢想が消え去つた。バンドンへ來た、バンドンへ。

バンドンに遊ぶ

政治的の背景を有つでも無く、さりとて商用の爲めでも無い、唯一介の書生の漫步なのであるから、紹介狀を片手に荷物擔いでバンドン驛のプラットフォームに立つても誰も迎へに來て呉れる人も無い。之を却つて幸ひに外に出たが、流石に始めて來た町故方向も分らず弱り抜いたが、こんな事には再三慣れて居るので外で客待ち顔をして居る車屋を呼んだ。待つてましたとばかり四方から集つて來る、車屋の中のおとなしさうなのを選んで早速飛び乘る。大西君が得意の壇上だ。「サヤ、ペギトコジツポン」(日本人の家へやれ)と云へば、馭者の先生心得たもので「ヤー(イーエース)」とか何んとか云つて、鞭をあてて行く。途中で賃金の交渉をしたが旅行者と見てか法外な云ひ値をふつかける、こいつ! 生意氣な奴とは思つたが何しろ知らない土地でもあるし、其の上兎に角日本人の店に連れて行つて貰はなければ充分安心も出來な

いので「よしよし」と云つてやるとすつかり喜んで手近かな日本人の店へ連れて行つて呉れた。

其處で例の紹介狀の家名の所を尋ねて來たのが畑氏のお宅だ。畑氏はバンドン市で寫眞店を開いて居られる。場所は市中最も繁華な所、左右に各國人の一流商店が軒を並べて居る。日本人として畑氏が活躍されて居るのが直ぐにうなづかれる。刺を通じると折よく氏は直ちに出て來られた。挨拶をする前に例の馬車屋さんの賃金を聞いた。學生のことだから隨分呑氣な奴だと思はれた事だらう。馭者の要求金額は一盾(約八十五錢)だ。「何に二十五錢位で差支へありませんよ」と氏に言はれて、物の相場の分らないのは不便なものだなと思つた。不平を鳴らして馭者は戻つて行く。畑氏は心よく私共を應待された。而も見ず知らずの一介の書生に一夜の露を凌がせ大いに歡待して下さつたのも、異國に在る同胞の心からの親しみであると感じた次第である。元來等しき種を有する人々が異國に在つてはその團結力は極めて強くなり、クロポトキンの相互扶助說を待たずとも武士は相見互ひの氣持が濃厚になるものである。況んや我々大和民族の下に於いておや、世界の如何なる人種も持ち得ない、日本人の日本人たる氣分の特質は、斯かる場合遺憾無く發揮せらるるものであると思ふ。私は一面畑氏の厚遇を感謝すると共に私が日本人であるといふ事をも併せて喜びの中に加ふるものである。單に物質的優遇を受けたるが爲に誰か此の紙上に平氣な顏をして、私は何處の町へ行つても日本人の厄介になりましたと書き得るものぞ。まして異國に於いて同胞に歡迎さるゝを當然なりと心得るは問題外である。

どんなに口先きで強い事を云ひ又動作に表しても、故國を離れて幾千里未知の國に來て見れば、自然人の心は旅のあはれを感ずるものである。斯かる時に唯一の慰めは同胞の心を見ることである。決して批判的態度で無く血潮としての、否！ 人としての同胞を見ることである。勿論理想としては廣く地上に生ける人々の心を得るのが究極であるかも知れないが、それは要する所終局點である、事物の階段の頂點である。それに至る階段として私は同種族の心を見る。諸君!! なんとうれしいことでは無いだらうか？

扨バンドン市の外見に記憶を戻す。御承知の通りバンドンはプレアンガア州のキヤピタルである。前述の如く市は海拔二千三百呎の高原にある故氣候溫度の差極めて少い所で、住を立つるには此の上もない適當の所と信ずる。それは唯に四圍山を以つて還らされて居るに止まらず、町全體の調和が甚だよく取れて居り清閑の氣分に滿ち滿ちて居る樣に見受けられる。私はバンドンに來て遙かに故國の京都を思ひだした。さうだ京都に似て居る。何處かゆとりがありそれが下品にならず一種奥床しい感じがする。町はホテル、ホーマンを中心として政治的にも商業的にも發達して居る樣に感ぜられ、又事實さうなのである!! 私がバンドンに對する好感は、單に周圍が美しき自然を以つて滿されて居るのみでなく、一は市がジヤバに於ける教育の最も普及せる所であるのにも由來すると思ふ。

町の中央を出ると住宅地一帶を背にして日本の古代建築を思はせる樣な建物がある。これが工科大學であると云はれて始めて氣が付いた位だ。總て平屋式の建物で如何にものんびりしたバンドン市に相應しい學校である。而も屋根の格好など日本のそれに近いので一層親しみを感じた。學校は丁度休暇中であつた故か學生は殆んど見受けない。土人の學生も多數居る相な。時々刻々に歐化の風に傾いて行くのは私共の日本ばかりでは無いらしい。教育機關の發達は土着人の頭腦否科學的知識を廣めて行きそれが更に風習に影響を及ぼす事は恐ろしい位目に見えて行く。人智、發明、發見等の物質的文明の鋒先は到る所に向けられて居る。私共が內地に居つた間は南洋は未開地非文明の代名詞と思つて居つた。私の期待想像は今夏の旅行以來全然覆へされてしまつた。しかし恐らく內地に生活して居られる方々の六割乃至七割は未だ南洋とは恐るべきマラリヤの流行地 あり、食人種族の生存せる所なりと考へて居らるるかも知れない。現に私も旅行前には右の如く迄で無くとも少くとも左して文明的施設のなき地として想像をめぐらして居たことを告白するものである。

前述の如くバンドン市には多數の學校が存する故教育の普及さるる結果として、土着の人種の白人化(外見の意に於いて)するものを屢々認むるを得た。

バンドンの夜は桃色だ、のぼせた身體の汗を一掃する涼しい風を身に受けて、今迄弛んで居た頭腦を引き締めて呉れる樣な氣もする。體軀肥滿のオランダ人の間を更紗を卷き付けた土人が行く、支那人が通る、人種展覽會の樣な中を通つて夜のバンドンを味ふのも一興だ。アルン、アルンの左手には主として土人の來る娛樂場がある。物珍らしさに中に入つて見る。廣場の中に極く簡單に建てた小屋を取卷いて、涼みがてらの人々が右往左往して居る。音樂を愛好する人種、それは馬來人でありジャバ人である。靜かに哀調を帶びた笛を吹く土人の子供を度々見受けた。言語を超越した音の流れは言葉を解せぬ私如き者の心をも強く動かすものである。婦人の唱ふソプラノに合して男の踊る樣が今尙頭に浮んで來る。巧みに腰を動かして、如何にも面白さうに踊つて居る。ギターの餘韻を殘して靜かにバンドンの夜は更けて行く。

× × × × × ×

バンドン市よりガルーに至るには邦人佐藤氏の經營されて居る乘合自動車がある。幸ひ畑氏の紹介にてガルーに行くには非常に好都合であつた。懷しいバンドンを後にして車は米田の間を眞一文字に走る。數多くの峠を越して夕暮間近にガルー市に着く。

市はガルート高原にあつて、バンドンと同じく海拔二千呎有餘の地點にあり、氣候も涼しき爲ジャバ有數の避暑地として知られて居る。附近のチバナスといふ所には溫泉があつて設備さへよくすれば將來有望なる地であると思つた。當地にても佐藤氏の御厄介になり心からの待遇しを受け學生として此の上もなく

愉快に思つた。
私共の旅行は日數に制限もあり、殊に私等は今一度シンガポールに歸らねばならぬ都合があつたので充分落ちついてジャバを歩く事が出來なかつたのは最も遺憾とする所であつた。ジャバに滯在日數僅々十日間餘、日に夜をついで町から町に轉々として行くのは餘り勿體無い樣な氣がした。然しどうすることも出來ない。夜ガルーに來て一泊、翌朝五時には旣に我々二人は再び車中の人となつた。

ジョクジャ・カルタよりボロブドルへ

ジョクジャ・カルタと云へば直ちにボロブドルの佛蹟を連想する。共れ程兩者は密接な關係を持つて居る所である。ジョクジャ・カルタはジャバに於ける古都であると共に寧ろ煙草の集散地であり、更紗の主要なる生産地であると云つても過言ではあるまい。

市は所謂舊都であつて、今尙市の中央には王城があり、サルタンは和蘭政府より年金四五十萬ギルダーの金を受けて名目上は侯領統治の權を有して居るが、事實上は和蘭理事官の管理の中にあり、單なる無意味な存在としてその日を送つて居ると云はれて居る。

時々刻々と變化しつつある世相の中に今尙古代社會を想はする樣な生活、それはジャバのジョクジャ市

の一部にも見受けられる。日夜歡樂に耽り、飽くことを知らざる人々か、左なくば己れが和蘭てふ鷲の懷に在る小雀なるを自覺する人々か、とにかく、哀れにも自らの墓穴を掘るものと思はざるを得ない。

當市にては澤部氏の御蔭を以て水城(タマンサリ)、更紗工場並びにボロブドル佛蹟を充分に見ることを得たるを深く感謝する次第である。水城は西曆千七百五十年頃建てられたるもので、その昔ジョクジャ王の盛なる時日々詩歌管絃の樂を極めた所であると云ふ。今は只荒廢にまかせて到る所雜草が生ひ茂つて居るのみである。門を潛ればその昔女官の水浴場であつたと云はれて居る池の樣な所がある。その左手には稍突き出した同じく石造の部屋がある。王がその窓に凭れ盃を傾けたといふ。人の世の變り易きを想はざるを得ない。今靜かに池畔に座せば自ら共の昔の面影を想像するに難くはない。そぞろに無言の言葉が自分の胸に傳はるのを覺ゆる。「實際他人の事ではないぞ」と誰かが言つて居る樣な氣がするのである。

水城を一通り見物後時間の都合で直ちにボロブドルへ赴くことにした。

私共を案内して下さつた富士洋行の加藤氏を加へた一行を乘せて、車は椰子林の下を走つて行く。早く期待して居る佛蹟が見たいと思つてゐる內、一時間餘りすると左手に小高い丘が擴がつて來る。數千年の間靜かに座つて居る佛蹟、無數の信仰の結晶なる佛蹟が前方椰子の樹木の間に隱見して居る。何がしかの見料を拂つて佛蹟に足を入れる。

實に偉大なものだ。私の想像は全然はづれなかつた。いやそれにも增して偉なるものである 佛蹟の寫眞は今迄に幾度となく見たが現在目の前に嚴かにも聳えて居る偉大なる史蹟を見ては自ら心の淸くならざるを得ない。私の今迄の狹い見聞よりしては、恐らく此のボルブドルの佛蹟位壯大にして且つ精巧なるものはないと思はれる。今より何千年前印度の佛教徒が斯かる素晴らしいものを形ち造りたるその偉大なる力は何なりや？ 然り、信仰の力である。信仰の力は實に恐ろしい。人の信念は或る場合には超人間的所產を造り上げることがある。此の佛蹟を見よ、之こそ信念の極致であり信仰の結晶である。藝術的作品として勝れて居ると共に、歷史的にも宗教的にも共に勝れたるものなる事を何人が否むことが出來ようぞ!! 塔上に登れば夕陽既に傾きて靜かにスンビンの嶺に入らんとする。只言葉なく身を佛蹟の一隅に寄するのみである。スンビン山を見上ぐれば遙かに故國の鋸山を想ひ出す。まさしく鋸山に似て居る。之も何かの暗示かも知れない。

私はボロブドルを見て思ふ存分自分の想像をたくましうした。私共が旅を行く慰さめも一に斯かる境地を味ふ事にあると思ふ。全く之れだけでもこよなく幸ひのことである。日は沈んだ。夕闇が徐ろに襲つて來る。マッチの光をたよりに壁面の彫刻を賞でながら塔を下りた。折柄の月光を浴びてボロブドルはその輪廓を空に見せて居る。後をふりむき、ふりむき、ジョクヂヤ・カルタに戻つたのは夜九時過ぎであつた。

昭和二年七月十三日印刷
昭和二年七月十八日發行

亞細亞の旅

【定價金壹圓】（送料八錢）

編者 亞細亞學生會出版部
東京市麴町區下六番町一一番地

印刷者 市川茂市
東京府荏原郡荏原町戶越一二九八番地

印刷所 市川活版所
東京府荏原郡荏原町戶越一二九八番地

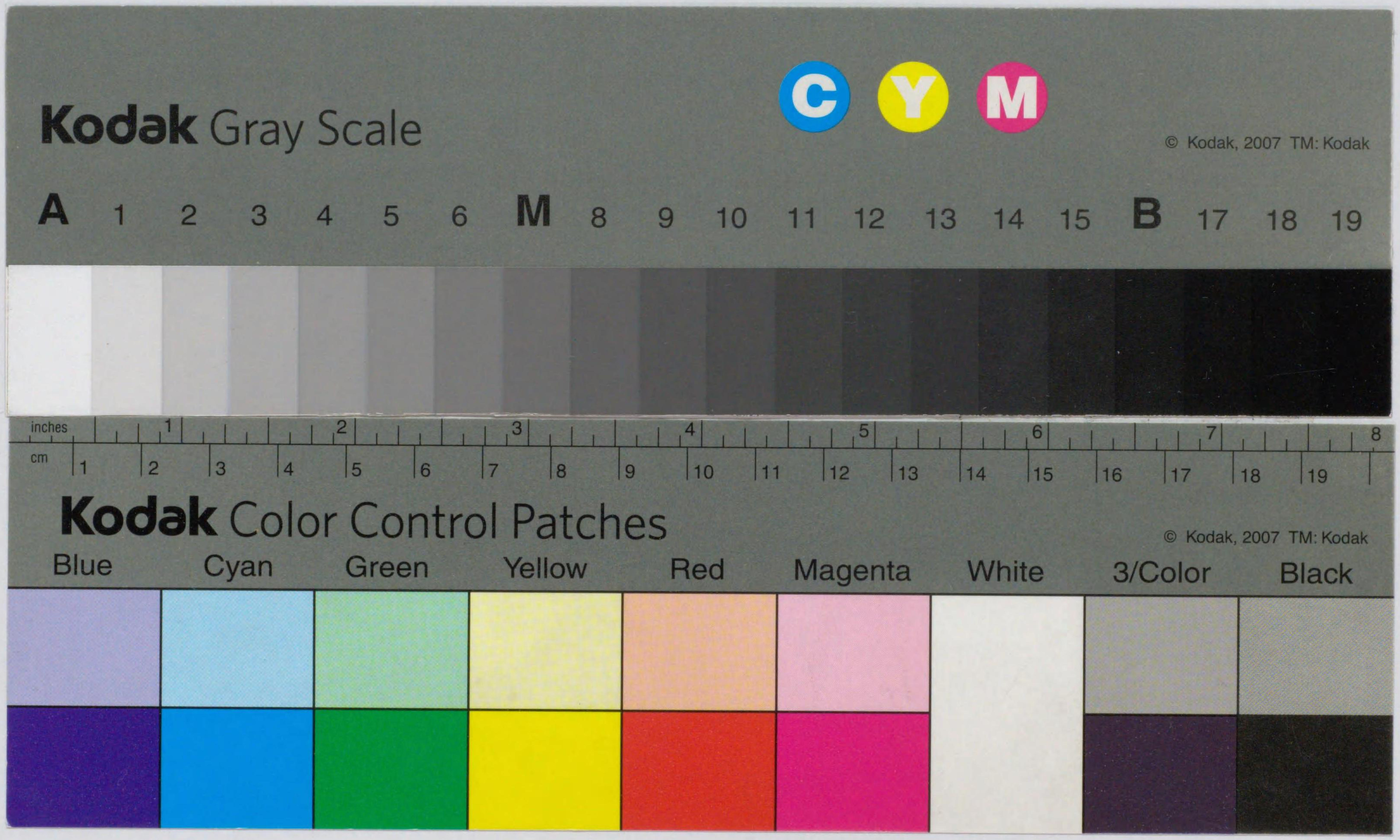
發行所 亞細亞學生會
東京市麴町區下六番町一一番地
電話九段九二九番
振替東京七〇四二四番

發賣所
東京堂
東京市神田區表神保町三番地
振替東京二七〇番

大阪屋號
東京市日本橋區數寄屋町
振替東京一三七五番

82

556
262


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black